

山梨市文化財調査報告書 第19集

# 間之田東遺跡

— 市道落合正徳寺線改良に伴う発掘調査報告書 —

2014年3月

山梨市  
山梨市教育委員会  
公益財団法人山梨文化財研究所

# 間之田東遺跡

— 市道落合正徳寺線改良に伴う発掘調査報告書 —

2014年3月

山 梨 市 教 育 委 員 会  
山 梨 市 文 化 財 研 究 所  
公益財団法人山梨文化財研究所

## 序

本書は、市道落合正徳寺線の改良に伴って行われた間之田東遺跡発掘調査の報告書です。調査は、武田信繩の墓と伝わる市指定文化財の五輪塔が所在する臨済宗聖徳寺の北東約150mの地点で、長辺48m、短辺24mの範囲で行われ、平安時代の竪穴住居、溝、中世の円形土坑群が検出されました。竪穴住居は2軒検出され、いずれも10世紀前半のもので、2軒とも竈の袖材や天井材として加工石材が利用されていました。同様の加工石材を利用した例は県内でも少なく、貴重な発見となりました。

また、円形土坑群は、周辺から五輪塔の一部が出土していることから、五輪塔を伴う中世の墓域の一部である可能性があります。『山梨市史』では武田信繩の館と菩提寺が正徳寺地域に存在した可能性を示唆しており、それらとの関係や聖徳寺の五輪塔との関係も注目されます。正徳寺地域周辺は、慶長10年(1605)以前の水害で聖徳寺の流失などがあったとみられており、今回の調査が水害前の正徳寺地域の姿を知る手掛かりともなり得ます。

最後になりますが、調査を担当していただいた(公財)山梨文化財研究所の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げ、序といたします。

平成26年3月

山梨市教育委員会

教育長 丸山森人

## 例　　言

- 1 本書は平成25年度に発掘調査を行った山梨県山梨市正徳寺1361-3番地ほかに所在する間之田東遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は市道落合正徳寺線改良に伴うもので、事業主体は山梨市である。
- 3 試掘調査は山梨市が実施し、本調査は山梨市より委託を受けて公益財団法人山梨文化財研究所が実施した。
- 4 本書は第4章第1節を黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）、第2節を佐々木由香・バンダリ・スグルシャン（株式会社パレオ・ラボ）、第3節を河西学（公益財団法人山梨文化財研究所 地質研究室）が執筆し、それ以外は鶴原功一（公益財団法人山梨文化財研究所 考古第2研究室）が執筆・編集した。
- 5 発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務は株式会社テクノプランニングに委託した。
- 6 本書にわたる出土品、記録類は山梨市教育委員会で保管している。
- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。

山梨市役所建設課、兩宮弘聰、三澤達也、駒田真人（山梨市教育委員会）、三枝哲雄（三枝興業）、森谷忠・柴田直樹（株式会社テクノプランニング）、佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）、CATV山梨ふる一つねっと、鈴木稔・畠大介・河西学、望月秀和・中山千恵・平野修・宮澤公雄・小澤美和子（公益財団法人山梨文化財研究所）、保坂康夫・塙谷風季・柴田亮平（山梨県埋蔵文化財センター）、瀬田正明（笛吹市役所）

## 凡　　例

- 1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北で、真北の方向角は-0°05'57"である。

- 2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

全体図	1 : 250
竪穴住居	1 : 60
竈・土坑・ピット	1 : 30
溝	1 : 100
土師器・石製品	1 : 3
土製品・金属製品	1 : 2

- 3 土器断面図中の黒塗りは須恵器、ドット網掛けは陶磁器を表す。

- 4 平面図・断面図における遺物の種別は以下のとおりである。

●土師器 ○土師質土器 ▲須恵器 ■陶磁器 △石器 ◇金属製品 ★炭化物  
□土製品 ○瓦

- 5 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。

- 6 平面図における遺物番号は、遺物図版、遺物観察表と一致する。

- 7 本書の図1は国土地理院発行1/200,000地勢図「甲府」、図2は山梨市発行の1/2,500山梨市都市計画基本図、図3は1/10,000山梨市全図、図4は国土地理院発行1/50,000地形図「甲府」「御岳昇仙峡」を使用した。

# 本文目次

序	
例言	
凡例	
本文目次	
挿図目次	
写真目次	
表目次	
図版目次	
写真図版目次	
第1章 経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	10
第1節 調査の方法	10
第2節 層序	10
第3節 遺構	10
第4節 遺物	14
第4章 自然科学分析	19
第1節 間之田東遺跡出土炭化材の樹種同定（黒沼保子）	19
第2節 間之田東遺跡の堅穴住居跡から出土した炭化種実（佐々木由香・パンダリ スダルシャン）	22
第3節 間之田東遺跡の窯を構築する加工石材の岩質について（河西学）	24
第5章 総括	27
報告書抄録	
奥付	

# 挿図目次

図1 遺跡の位置	5	図3 調査区の位置	7
図2 周辺の遺跡分布図	6	図4 加工石材と山口縣石凝灰岩の分布	30

# 写真目次

写真1 間之田東遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	21	写真3 崩平泥流堆積物の露頭	26
		写真4 山口縣石凝灰岩の露頭	26
写真2 間之田東遺跡から出土した炭化種実	23		

# 表目次

表1 周辺の遺跡一覧	5	表5 土製品観察表	34
表2 樹種同定結果	19	表6 石製品観察表	35
表3 間之田東遺跡から出土した炭化種実	22	表7 金属製品観察表	35
表4 土器類観察表	31		

# 図版目次

第1図 全体図（等高線図）	36	第6図 1号住居（4）遺構	41
第2図 全体図	37	第7図 2号住居（1）遺構	42
第3図 1号住居（1）遺構	38	第8図 2号住居（2）遺構	43
第4図 1号住居（2）遺構	39	第9図 2号住居（3）遺構	44
第5図 1号住居（3）遺構	40	第10図 2号住居（4）遺構	45

第11図	1・2号溝 遺構	46	第25図	1号住居(3) 遺物	60
第12図	土坑(1) 遺構	47	第26図	1号住居(4)・2号住居(1) 遺物	61
第13図	土坑(2) 遺構	48	第27図	2号住居(2) 遺物	62
第14図	土坑(3) 遺構	49	第28図	2号住居(3) 遺物	63
第15図	土坑(4) 遺構	50	第29図	2号住居(4) 遺物	64
第16図	土坑(5) 遺構	51	第30図	2号住居(5) 遺物	65
第17図	土坑(6) 遺構	52	第31図	2号住居(6)・1号溝(1) 遺物	66
第18図	土坑(7) 遺構	53	第32図	1号溝(2) 遺物	67
第19図	ピット(1) 遺構	54	第33図	1号溝(3) 遺物	68
第20図	ピット(2) 遺構	55	第34図	2号溝・土坑(1) 遺物	69
第21図	ピット(3) 遺構	56	第35図	土坑(2)・ピット・遺構外(1) 遺物	70
第22図	ピット(4) 遺構	57	第36図	遺構外(2) 遺物	71
第23図	1号住居(1) 遺物	58	第37図	遺構外(3) 遺物	72
第24図	1号住居(2) 遺物	59			

## 写真図版目次

図版1	1 航空写真 2 調査区全景		図版12	1 11号土坑完掘状況 2 14号土坑完掘状況	
図版2	1 航空写真 2 航空写真			3 15号土坑完掘状況 4 16号土坑完掘状況	
図版3	1 調査前風景 2 作業風景			5 17号土坑完掘状況 6 18号土坑完掘状況	
	3 調査区北東壁の土層堆積状況および5号土坑の断面			7 20号土坑完掘状況 8 21号土坑完掘状況	
図版4	1 1号住上層縦・遺物出土状況		図版13	1 23・37号土坑縫出土地状況	
	2 1号住縫・遺物出土状況 3 1号住内集石			2 37号土坑上層縫出土地状況	
	4 1号住縫道部分出土斐			3 23号土坑遺物出土状況	
図版5	1 1号住縫 2 1号住床面ピット遺物出土状況			4 22号土坑土層堆積状況	
	3 1号住完掘状況 4 1号住縫断ち割り状況			5 25号土坑縫等出土状況 6 27号土坑完掘状況	
図版6	1 1号住縫右袖石組状況 2 1号住縫			7 29号土坑完掘状況	
	3 1号住縫左袖石組状況 4 1号住縫		図版14	1 27号土坑周辺土坑群 2 15号土坑周辺土坑群	
	5 1号住床下掘り方完掘状況			3 31号土坑完掘状況 4 32号土坑完掘状況	
図版7	1 2号遺物出土状況			5 34号土坑完掘状況 6 35号土坑完掘状況	
	2 2号住縫周辺遺物出土状況			7 31~33号土坑完掘状況	
	3 2号住完掘状況			8 8号ピット完掘状況	
図版8	1 2号住縫 2 2号住縫 3 2号住縫		図版15	1 空中写真 2 空中写真	
	4 2号住縫 5 2号住縫 6 2号住縫		図版16	1・2 作業風景	
	7 2号住床下掘り方完掘状況			3 ラジコンヘリによる空中写真撮影風景	
図版9	1 1号溝内出土状況 2 1号溝完掘状況			4 ボールによる空中写真撮影風景	
	3 1号溝内水輪出土状況		図版17	1 遺跡付近にある五輪塔群	
	4 1号溝内空風輪出土状況			2 聖慈寺境内の(伝) 武田信繩塔	
図版10	1 1号溝完掘状況 2 1号溝上層縫			3 (伝) 武田信繩塔	
	3 1号溝内土師器出土状況		図版18	1号住居(1) 遺物	
	4 1号溝内土師器出土状況		図版19	1号住居(2) 遺物	
	5 1号溝南端の集石 6 1号溝南端の集石下層		図版20	2号住居 遺物	
図版11	1号土坑完掘状況 2 2号土坑完掘状況		図版21	1・2号溝・土坑・ピット・遺構外 遺物	
	3 3号土坑完掘状況 4 4号土坑完掘状況		図版22	1・2号住居 加工石材	
	5 6号土坑完掘状況 6 7・8号土坑完掘状況		図版23	2号住居・1号溝・土坑・遺構外 遺物	
	7 9号土坑遺物出土状況 8 10号土坑完掘状況		図版24	間之田東遺跡庭構築加工石材の顕微鏡写真	
			図版25	山口輕石凝灰岩の顕微鏡写真	

# 第1章 経過

## 第1節 調査の経過

山梨市正徳寺の間之田東遺跡は、JR 山梨市駅から西へ約 1.1km付近の釜無川右岸にある低平な果樹地帯に位置する。平成25年、本遺跡の一部が市道落合正徳寺線建設予定地内に含まれることから、山梨市の委託により公益財団法人山梨文化財研究所が本調査を実施することとなった。この市道建設は社会資本整備総合交付金事業として施行されるもので、市道は調査地点の北側、350mに位置する山梨厚生病院前交差点から南東方向へ、JR 中央線を跨いで笛吹川方面へ至る道路として計画・施行され、現在山梨厚生病院側の約200m分が完成、供用されている。

山梨市教育委員会では平成25年5月29日から8月1日に工事予定期間内で試掘調査を実施した。調査は幅2mのトレンチを24本程度設定し、重機で掘削、人力により精査したところ、今回の本調査区内にあたる2号トレンチ内に竪穴住居と思われる落ち込み1か所、掘立柱建物とみられる柱穴5本が確認され、平安時代の土師器片が少量出土したことから、今回調査を行うこととなった約800m<sup>2</sup>が本調査の対象とされた。それ以外の部分については河川氾濫によるとみられる砂礫層堆積がみられ、試掘では部分的に最深で約2mまで掘削したところ疊層が続く状況が確認されたことから、調査区域から除外されている。

山梨市では年度内の調査、報告書刊行を行うため、「市道落合正徳寺線改良に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託」として外部委託を行うこととし、委注者 山梨市、受注者 公益財団法人山梨文化財研究所、10月22日契約、契約日の翌日を着手日、平成26年3月20日完成として、山梨市教育委員会の指導監督のもと山梨文化財研究所が本調査を実施することとなった。発掘調査にあたっては、監督員（教育委員会担当者）から段階確認を受け、承諾を得たのちに次の段階に移ることができるとされ、年内（12月末）に現場作業が終了することが求められた。

山梨文化財研究所では契約ののち直ちに山梨市教育委員会経由で山梨県教育委員会あて発掘届を提出、11月21日から調査を実施した。発掘調査は次節に記すように12月26日でおおむね終了し、年末年始の休暇をはさんで1月5日に埋戻しを完了、1月6日に現場作業は完成とした。また調査と併行して整理作業を行い、報告書刊行を含めて3月20日に業務完了となった。

## 第2節 発掘作業の経過

発掘調査は11月21日より重機による表土剥ぎを7日間行ったのち、国家座標にもとづく基準点を設定し、人力により精査を行い、遺構確認、遺構調査を実施した。調査最終段階の12月26日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、景観写真とともに図化用写真を撮影し、写真図化により全体図作成を行った。また補足図化用として溝内集石や竪穴住居の掘り方面に対しポール撮影を行い、図化を行っている。現場での記録・遺物取り上げについては光波測量機および遺跡調査ソフト「遺構くん」を用い、効率的かつ正確な記録化に努めた。なお、遺跡は疊層を主とした河川堆積物の上に存在するため、砂層中に竪穴住居、土坑、ピットなどが構築されていたが、確認面の設定が難しく、砂が崩れやすいことから竪穴住居の壁は大きく崩落した状況を呈し、遺構プランを把握することが容易ではなかったことから、試行錯誤をしながらの調査となった。幸い、山梨市教育委員会による試掘が多数設定され、遺構確認面よりも深くトレンチが入れられていたことから、トレンチ内を再発掘、再精査することによって遺構の有無を確認することができたが、遺構がない部分についても念のためにトレンチを設定し（6・7号トレンチ）、遺物出土の有無を探り、結果的に住居等の遺構がないことを確認し、調査終了とした。なお、基準点設置、ラジコン撮影、ポール撮影は業者委託により実施している。詳細な調査過程については以下の日誌を参照されたい。

【調査日誌】

平成 25年(2013)11月21日(木)快晴

重機による表土剥ぎ開始。山梨市教育委員会（以下、市教委）職員の立ち合いのもと、試掘坑の位置、遺構確認面の深さなどを確認しながら、北東隅より作業を進めたが、地山が砂層のため遺構確認面の確定が難しく、調査区壁面精査により遺物包含層、土層堆積状況を確認しながらの作業となった。

11月22日(金)快晴

重機による表土剥ぎ。テクノプラニングによる基準点設置。

11月23日(土)快晴

重機による表土剥ぎ。1号溝を確認（当初、近現代の水田面に伴う暗渠排水と誤認する）。

11月25日(月)晴

重機による表土剥ぎ続行。作業員による精査を本日より本格的に開始する。器材・コンテナハウス等搬入。調査区の壁を精査したのち、遺構確認作業。

11月26日(火)晴

重機による表土剥ぎ継続。遺構確認作業。発出土（1号住の煙道に伴うものと後に判明）。北西側は大半が礫層面であり、一部疊層を重機により掘り抜き、下層に遺構面があるかどうか探った。地表下2.3m（疊層面以下1.6m）掘り下げたが、疊層がさらに続く状況であったため、下層には遺構はないとの判断し、疊層上面のみの調査にとどめることとした。

11月27日(水)晴

重機のみ稼働。

11月28日(木)快晴

重機稼働（本日で終了）。確認面の精査。

11月29日(金)快晴

疊層面の精査作業。陶磁器類、古銭など少量出土し、現代の擾乱状の焚火痕などが存在するものの遺構はない。

12月2日(月)晴

市教委による試掘坑を掘り返し、断面など観察する。

12月5日(木)晴

試掘坑の掘り返しおよび実測。土坑・ピットなどの遺構確認のための勘定掛け作業。

12月6日(金)晴

土坑・ピットの調査開始。半蔵のうち断面図化、完掘、写真撮影、実測を順次行う。1号溝確認面の精査。SX1設定（後に1号住に変更）。4号トレンチ内の埋土中に五輪塔などの石造物が存在し、元位置を留めている可能性があることから、慎重に掘り返す（結果的には試掘の後の埋戻しにより現位置はとどめないと判断）。

12月9日(月)曇

土坑・ピット調査。1号住調査開始。1号溝内の礫を残して掘り下げ。

12月12日(木)晴

1号溝の礫を水洗し、ポール撮影に備える。1号住の掘り下げ。ベルトを残して掘り上げる。2号トレンチ内壁寄りに竈構築材の加工石材があるのを確認した（2号住竈）。地元CATVの山梨ふる一つねっとの取材。

12月13日(金)晴

1号溝の礫出土状況をポール撮影。撮影終了後、礫を除去して溝を完掘する。いくつかの五輪塔部材が確認された部分は疊層断面図を作成。1号住ベルトの断面図作成後、上層礫出土状況をポール撮影。床面はさらに下がることがわかったため、ベルトを再設定し、床面まで掘り下げを開始。2号住のプラン確認のため、竈西側にトレンチを入れ、プランをつかんだ。

12月16日(月)晴

1号溝内礫の取り上げ。溝の完掘。2号住確認面上層のピット・土坑の半蔵、実測後、完掘、実測。2号住内

にベルトを設定し、掘り下げを開始した。

12月17日(火)晴

土坑・ピット調査。1号住のベルト断面図追加ののち、ベルト撤去。下層の遺物・礫出土状況写真撮影。1号溝内の掘り下げ。2号住の掘り下げ続行。

12月19日(木)曇

2号住の断面実測ののち、ベルト撤去。

12月20日(金)曇

2号住遺物出土状況写真撮影。1号住竪の断ち割り。

12月21日(土)晴

1号溝完掘状況写真撮影。土坑・ピット調査。2号溝掘り下げ。1号住内周溝、ピット掘り下げ。2号住竪断ち割り。

12月24日(火)晴

1号住の周溝等掘り下げ、完掘、写真撮影。竪周辺のピット内より遺物出土。2号住竪内遺物出土状況写真撮影。

12月25日(水)晴

25号土坑の集石断ち割り。2号住竪完掘。

12月26日(木)晴

ラジコンヘリによる空撮のための清掃ののち、空撮。その後、1・2号住掘り方完掘、ポール撮影。6・7号試掘坑を完掘し、下層の遺物出土状況等を探ったが、遺構はない。23号土坑の完掘。下層より石臼片出土。ハウス等返却、器材搬出。

その後、重機による埋戻し作業を12月27日～30日、2014年1月5日に実施し、終了した。

#### 【発掘調査参加者】

小澤正臣・河西元彦・河西町男・岸本美苗・河野次雄・武井美知子・近山辰男・筒井聰・出井光・長澤晴雄・原義仁・深沢修・保坂悌司・箭本公幸・横内光夫・渡辺智之

## 第3節 整理等作業の経過

現場調査と併行するように出土遺物の洗浄、注記、接合を実施したのち、図化資料を抽出、実測をした。また現場で採取した竪内土壤については、乾燥、水洗選別を遺物洗浄とともにを行い、委託先（パレオ・ラボ）に分析依頼した。加工石材については、当初焼成粘土柱として取り上げたが、被熱した石材であることが指摘されたため、产地推定、分布についての考察を含めた分析を行うこととした。

遺物は図化ののち、トレース、図版組を行い、観察表作成、遺物写真撮影等の報告書作成のための一連の作業を行った。金属製品については保存処理を実施することとし、X線撮影後、さびを落とした段階で図化を行った。

遺構図は、業者委託した空中写真、ポール撮影により作成した平面図をベースとし、現場で用いた遺構図化ソフト「遺構くん」の遺物出土状況やセクションポイント等のデータを加え、遺構図面、全体図をパソコン画面上で作成、遺構図版とした。

#### 【整理作業参加者】

大村加代子・川口三和・櫛原ゆかり・菅原由美子・古郡明・佐野真雪・齊藤ひろみ・竜沢みち子・中川美千子・山下詩雅

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

本遺跡は甲府盆地東側の北縁、標高315m付近の低平面に位置する。甲府盆地東側は笛吹川が北東より南西に向かって流下し、盆地内に氾濫原を形成したので、本遺跡は笛吹川右岸、重川、日川の合流地点近くの旧氾濫原上に位置する。笛吹川は今日、山梨市万力付近から流路が直線的に固定されているが、かつては西寄りの山際にかけて扇状に蛇行したらしく、旧流路の名残が現在の夕川等の河川の存在や微地形からわかる。山梨市街地は笛吹川を挟んで対岸にあたり、本遺跡の南東約550m付近に笛吹川が流れ、南西70mの至近距離にJR中央線が通る。間之田東遺跡の広がりは、図2(05043)に示すように本調査区から聖徳寺にかけての150×200mが周知されている範囲で、本調査地点は間之田東遺跡でも北東端にあたる。

遺跡の北西側には標高1000m前後の棚山、兜山、大藏経寺山などの低山が連なり、旧笛吹川の流路とされる平等川が山裾を南西方向に流れる。兜山と棚山の間に流下する夕狩沢は平等川の支流で、中世、跡部氏と武田氏の古戦場として知られるが、夕狩沢は山間に小扇状地を形成し、その山腹には矢坪・山根・上岩下等の集落が山裾に分布する。その扇端部が笛吹川の浸食を受けたあたりに本遺跡が所在する。本遺跡の北西側に通る国道140号線は秩父往還として古くからの交通路であり、平行するように旧道が存在するが、旧道沿いには古くからの集落が発達し、集落間にはモモ・ブドウを主とした果樹地帯を中心とした農村風景が広がっている。調査区北西側には笛吹川から引かれた堰が豊かな水量をもたらしているが、果樹地帯として発展する以前、かつてこの一帯は水田地帯であった。笛吹川の旧流路上にあたることから土壤は砂質を主とし、作物には適した土壤ではあるが、表土直下には疊層が中洲状に広く分布し、深い耕作には不向きな地点が多い。こうした疊層間の砂溜まり状の狭い場所を選んで、本遺跡では小規模な平安時代の集落が形成されている。

### 第2節 歴史的環境

山梨市正徳寺周辺には、武田信虎誕生屋敷等の伝承地や武田信昌の夕狩沢古戦場が知られるなど、中世武田氏との関わりが強い地域であり、また山際に点在する古墳の分布状況から古墳時代後期にはある程度繁栄した地域として捉えられてきた。そうした中で、近年の西関東自動車道建設に伴う事前調査などで弥生末～古墳前期以降、平安時代末にかけての集落域の様相が明らかになりつつある。

詳細遺跡分布調査にもとづく遺跡分布は図2の通りで、山際に濃密な分布を示し、河川流域の低平部に疎らに分布している。また笛吹川と重川合流付近の三角地帯にも多くの遺跡が知られ、繩文時代中期および平安時代の集落が見つかった高畠遺跡が著名である。山梨市正徳寺周辺での調査例としては、山梨厚生病院内の授産施設建設に伴う延命寺遺跡の調査(2003年)、西関東自動車道建設に伴う延命寺遺跡(2006年)・足原田遺跡・武家遺跡・中沢遺跡の調査がある。

延命寺遺跡は本遺跡の北、600mの夕川沿いに位置し、2003年の調査では古墳前期を主とした5軒、平安時代9世紀中1軒、平安末1軒の堅穴住居のほか、古墳前期の溝、近現代の水溜、井戸等が検出された。特殊遺物としては弥生後期のいわゆるパレス壺の破片、平安時代かと思われる瓦片、鋳型片らしい土製品が出土している。また2006年には2003年調査地点から約100m離れた別地点で調査が行われ、旧河道内から古墳時代前期の土器類、木器類が出土した。2003年調査地点周辺を集落域とする廃棄エリアかと考えられる。

中沢遺跡は間之田東遺跡の西方約1kmに位置し、奈良時代の堅穴住居4軒、古墳時代前期の堅穴住居2軒および溝が検出されている。奈良時代の単独集落は珍しく、また住居の向きが隣接する八幡条里と同じような向きとなる点が注意される。山腹地帯には傾斜方向に沿って盆地底部とは異なった条里地割が形成されたことが考えられ、またその成立段階が奈良時代にまで遡る可能性を示唆している。

武家遺跡は中沢遺跡の西方約500mに位置し、古墳前期の堅穴住居1軒、方形周溝墓3基のほか、弥生時代に

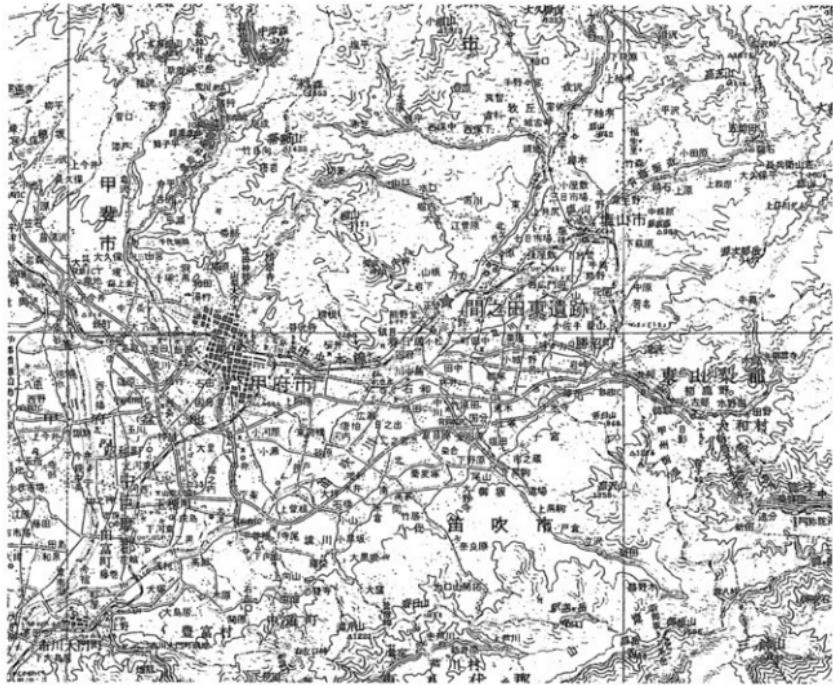


図1 遺跡の位置

表1 周辺の遺跡一覧

遺跡No.	遺跡名	時代	遺跡No.	遺跡名	時代	遺跡No.	遺跡名	時代
05006	小畠遺跡	平安	05054	荒原遺跡	平安・中世	05114	宗高南遺跡	弥生・古墳
05007	大工北遺跡	古墳・平安	05055	市原市遺跡	平安	05115	宗高西遺跡	古墳
05009	芦原遺跡	平安	05058	正寺寺前田遺跡	平安	05116	天神前北遺跡	平安
05010	大工南遺跡	縄文	05057	林原遺跡	平安	05117	市道遺跡	平安
05012	市川西遺跡	縄文	05058	御田遺跡	平安・中世	05118	杉・木道遺跡	古墳
05013	桔田遺跡	縄文	05059	蛭・内遺跡	平安	05119	雲林遺跡	古墳・平安
05014	於北南遺跡	平安	05060	小寺田遺跡	縄文	05120	宗高東遺跡	縄文
05015	神明前遺跡	平安	05061	半井池遺跡	古墳・平安	05121	御殿池遺跡	縄文・平安・中世
05016	大塚遺跡	平安	05062	田原之前山遺跡	平安	05122	上石森塚越遺跡	縄文・平安
05017	市川東遺跡	縄文	05063	三町内遺跡	平安・中世	05123	宮・前遺跡	平安
05023	大久保遺跡	縄文・平安	05064	小寺家遺跡	平安・中世	05124	上黒木遺跡	奈良・平安・中世
05026	穂庭遺跡	平安・中世	05065	三寺寺遺跡	平安・中世	05150	長瀬寺前古墳	古墳
05028	西片山遺跡	中世	05066	九ヶ塚遺跡	平安・中世	05151	鶴塚古墳	古墳
05035	中下西遺跡	平安	05067	五重石春墓	平安	05152	山寺古墳	古墳
05040	江曾原遺跡	縄文・古墳・平安	05068	寺の下山遺跡	縄文	05153	天神塚古墳	古墳
05041	上ゴトケ遺跡	縄文・平安	05069	平坂遺跡	平安	05154	秋尻寺古墳	古墳
05042	兄川河床遺跡	旧石器	05070	黒熱山遺跡	古墳・中世	05155	平塚古墳	古墳
05043	間之里遺跡	平安	05071	松原遺跡	中世	05160	岩下古墳群	古墳
05044	天神前遺跡	縄文・平安・中世	05072	日介郡病院前遺跡	古墳	05161	山根古墳群	古墳
05045	間之里遺跡	古墳・平安	05073	八王子遺跡	縄文	05162	富士塚	近世
05046	原ノ田遺跡	奈良	05074	立石遺跡	縄文・奈良・平安	05174	城伊庵原古墳	中世
05047	長田遺跡	縄文	05075	舟原遺跡	平安	05177	安田観音古墳	中世
05048	豊原遺跡	中世・近世	05076	宮之上遺跡	平安	05180	大野若瑟跡	中世
05049	金桜遺跡	縄文・平安	05100	上平原遺跡	縄文	05182	鹿八幡山社境内	中世
05050	延命寺遺跡	弥生・平安	05110	天神前東遺跡	縄文・平安	05183	鹿八幡神社社家坊中群	中世・近世
05051	千原田遺跡	古墳・平安	05111	馬鹿遺跡	縄文・古墳・平安	05184	飛行場	近世
05052	地蔵久保遺跡	平安	05112	桜木田遺跡	平安	05186	清水屋塚跡	近世
05053	久之下遺跡	中世	05113	宗高北遺跡	平安	05187	足原田遺跡	古墳・平安・中世



- 1 調査地点（関之田東遺跡）
- 2 江曾原遺跡
- 3 足原田遺跡
- 4 延命寺遺跡 (2003)
- 5 延命寺遺跡 (2006)
- 6 中沢遺跡
- 7 武家遺跡
- 8 高畠遺跡
- 9 寺本廃寺

図2 周辺の遺跡分布図

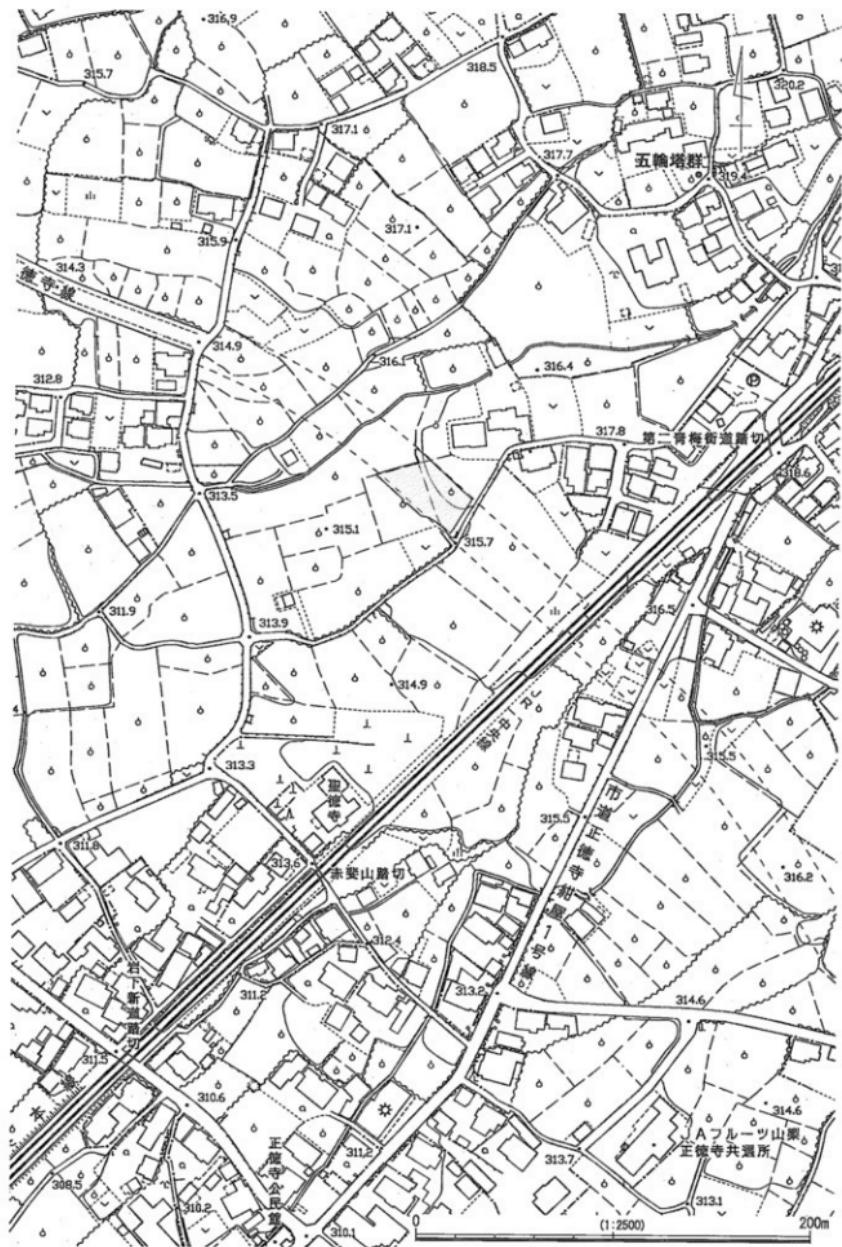


図3 調査区の位置

遡る溝が検出されている。方形周溝墓の検出は、山梨市域では初めてとなった。

足原田遺跡は本遺跡の北東約1kmに位置し、1次調査では埋没谷より古墳前期の祭祀遺構とも考えられている土器捨て場が検出されたほか、平安末の竪穴住居6軒がある。また2~4次調査では平安時代（9~11世紀代）の竪穴住居23軒が検出され、とくに平安末の11世紀代の住居が多いのが特徴である。墨書き土器としては9世紀後半の土器器底部に「立寺」と記されたものがあり、古代寺院の存在をうかがわせる資料として注目される。

このように弥生後期から古墳時代と、奈良時代、平安時代の集落が山寄りの平坦部に多く分布し、とくに平等川、夕川周辺には古墳時代集落が存在することから、山際の地域が集落域として早くから開けたことがわかる。また平安末にかけて集落が一段と発達しているが、こうした状況は北側の八幡地区とも共通している。本遺跡では10世紀前半の小規模集落が見つかったが、笛吹川の流路の安定化を経て、集落域が旧氾濫原側に拡大していく様相と理解することができよう。

調査区南側、約150mには正徳寺の地名由来となった臨濟宗向嶽派聖徳寺がある。山号を赤甲山（石甲山）、開山は通方明道とする。赤（石）甲山とは北西に位置する兜山のことであろう。通方は相模三浦氏の出で、抜隊得勝に師事し、至徳4年（1387）師の死去に伴い向嶽寺二世となり、応永2年（1395）5月8日に没した。中興開基檀那は守護武田信昌の嫡子信繩（のぶつな）で、永正元年（1504）建立と伝えられる。弟信恵と家督争いのうち明応7年（1498）和睦し、父信昌を開基とする永昌院が和睦の証として創建されたのち、聖徳寺も同じころ、父の菩提寺建立にあわせて自らの菩提寺を作ったと考えられている（山梨市2005）。高野山成慶院の「武田御位牌帳」によれば、信繩は永正4年（1507）2月14日他界、法名を長興院殿宇山邦公大禪定門とし、聖徳寺には信繩の位牌がある。長興院とは弘治2年（1556）「武田晴信判物」にある恵林寺境内の塔頭で、信繩の菩提所であったと『甲斐国志』は推測する。また正徳4年（1714）以前成立の秩父横道三十四観音靈場の三十四番に「恵林寺中 長興院 臨濟宗」があり、「元正徳寺村ニ在リ」と注記されていることから、長興院はもと正徳寺にあって、恵林寺に移転した塔頭であったことがわかる。恵林寺と信繩との関連は薄いことから、聖徳寺内に信繩出家後の建物として「長興院」があったのではないか、との推測もあり（山梨市2005）、それが恵林寺に移転したのである。また『国志』によれば、聖徳寺は模擬不明ながら跡部上野父子の居館址かとも推測されている。

宝永2年（1705）に記された「正徳寺由緒書草稿」には、「百年以前満水ニ寺住持由緒共ニ流損退軒仕」とあることから、水害で伽藍を流失したのち小庵として維持されていたが、天和3年（1683）に旧寺地に堂宇が再興され、江戸後期には太子伝説が加えられて「正徳寺」から「聖徳寺」に改称され、山号も太子像の朱色の冠から赤甲山に変更されたとされている。注目すべきは「百年以前満水」で、宝永2年から100年前、つまり慶長10年（1605）以前に伽藍が流失するような大水害があったことが伝えられている点である。『国志』『山梨市史』（飯田2009）によれば、天正11年（1583）の大出水で差出が決壊、二十一か村の田畠が被害を受けたのち、一ノ出堤より難又まで堤を築き、御林を設けたところ、正保元年（1644）の水難は免れ、延宝2年（1674）、同4年（1676）、元禄2年（1689）の水害では一ノ出堤が破られ、正徳3年（1713）には二ノ出堤が決壊したものの甚大な水禍には至らなかったという。また『東山梨郡誌』（山梨教育会1916）には天正11年の大水について、「差出の堤決潰して正徳寺の東方を洗ひ去り、桑戸の中央に中河原を押流し、此処を本流として加茂、小松、國府一面の地を砂原となし、遂に甲府城附近に及べり」と記し、聖徳寺一帯が流失したことがわかる。すなわち「百年以前満水」とは天正11年の大水害のことであろう。

聖徳寺本堂脇には地輪を新しく補った五輪塔があり、山梨市指定文化財（平成4年12月1日指定）として「伝武田信繩塔」の標柱が立つ。空風輪・火輪・水輪は凝灰岩製で、高さ72cmを測り、火輪は上面の軒反りが顕著だが下面の軒反りは弱く、やや扁平な水輪には四門の梵字を刻む。15~16世紀代の作とみられ、かつては隣接する住職墓地内にあったものを移設復元したものであるが、もとは正徳寺共選所あたりに信繩の墳墓や館跡があつたともいわれている。

【参考文献】

- 山梨教育会東山梨支会 1916『東山梨郡誌』
- 山梨県教育委員会ほか 2004『中沢遺跡・武家遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第214集  
財山梨文化財研究所ほか 2005『延命寺遺跡』山梨市文化財調査報告書 第9集
- 山梨県教育委員会ほか 2005『足原田遺跡Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第230集
- 山梨市 2005『山梨市史 文化財・社寺編』
- 山梨県教育委員会ほか 2007『足原田遺跡Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第246集
- 山梨県教育委員会ほか 2008『延命寺遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第251集
- 飯田文彌 2009『笛吹川圓御林と用水』『山梨市史 通史編 上巻』 山梨市
- 古明地義勇 2009『寺社と村人』『山梨市史 通史編 上巻』 山梨市
- 山梨市教育委員会 2011『市内遺跡発掘調査報告書2010』山梨市文化財調査報告書 第14集

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

調査にあたっては、基準点上に据えた光波測量機により造構図化ソフト「造構くん」の画面上に設定した10mメッシュの方眼（グリッド）に基づき、一括遺物で小さなものについては南西隅を起点とするグリッド一括として取り上げている。また造構の図化、遺物の取り上げにあたっては光波測量機をノートパソコンにつなぎ、「造構くん」を用いて遺物の3次元データの記録化、断面測量ポイントの測定、一部造構の図化（上端・下端および礫外形、調査区外形など）を行った。詳細な造構図化、全体図作成については空中写真から図化を行い、整理段階で現地でのデータと合成した。造構調査の手順は以下の通り。

堅穴住居の場合、造構確認のうち十字ベルト設定・掘り下げ、断面撮影・図化、ベルト撤去、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ、周溝・ピット等掘り下げおよび窓断ち割り、完掘状況写真撮影、掘り方掘削、掘り方写真撮影、エレベーション図作成の順で行い、完掘・掘り方については空中写真からの図化を業者委託で実施した。竈は十字にベルト設定し、断ち割り、断面図化、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ、礫を残して完掘・写真撮影の順で行い、断ち割りおよび十字ベルト撤去の際に炭化物分析のための土壌サンプリングを行った。

土坑・ピットはすべて断面図を作成することとし、南側半分を半截、遺物や礫を残しながら掘り下げ、断面図化後、完掘、遺物出土状況写真撮影を行った。また複数の重複関係をもつ土坑・ピットについては、切り合い関係把握のため同じラインで半載した。

溝（1号溝）については、集石があまりにも密に入れられていたため、当初近現代の水田に伴う暗渠かと判断し、プラン確認後、覆土中の礫を残した状態で掘り下げたが、五輪塔の部材が入っていることから中世以前の溝と推定し、実測図化用の写真撮影の後、何ヶ所かで断面実測を行い、完掘した。

### 第2節 層序

地表面から断面を作図した地点としては、調査区北東壁の5号土坑、西壁の20号土坑があるが、ここでは前者を基本層序として標準的な土層堆積とみなす（第13図）。

- 1層 耕作土
- 2層 赤褐色土 旧水田層。
- 4層 灰黄褐色砂質土
- 5層 鈍い黄褐色砂質土
- 6層 暗褐色砂質土 中世の土坑掘り込み面、遺物包含層。
- 7層 鈍い黄褐色砂質土 無遺物層（造構確認面）、西側では礫層となる。
- 8層 黒色土 無遺物層。

中世を主とする土坑・ピットは7層上面で確認でき、6・7層で平安時代の堅穴住居プランを確認した。

### 第3節 造構

#### 1号住居（第3～6図、写真図版4～6）

調査区南東壁近くに存在する。東壁の中央やや南寄りに石組竈をもつ東西4.4×南北4.2mの隅丸方形の堅穴住居で、砂地に構築されているため、南・北・西壁が大きく崩れ、確認面では東西5.8×南北4.9mの不整形形を呈している。当初、5号トレンチ近くの確認面で伏せた甕等が分布したことから堅穴住居があると判断し、プランは明確に見えなかったものの、おおよその想定線から十字のベルトを設定し掘り下げた。遺物や炭化物の分布状況を手がかりに掘り進めたところ、確認面下約50cmで本来の住居の壁の立ち上がりが確認できたことから、

さらに竈の袖石等の設置面をもとに床面まで掘り下げる、確認面下約65cmでやや軟質な床面に達した。したがって当初の十字ベルトの方向は住居の主軸方向とは異なるものとなってしまった。覆土は黄褐色砂を主とした砂層および砂質土で、壁は斜めの傾斜を示し、とくに上半が大きく広がっている。覆土中には床面より10~15cmほど浮上して20cm大の円標が $12 \times 0.8$ mの範囲に集中し、集石状を呈していた。また遺物の出土は覆土中層から下層を主とし、竈内および竈右脇を中心に出土しているが、床面出土遺物は竈周辺に多い。

住居は竈側を基準にするとE-10°-Nで、ほぼ東向きである。砂層の地山面を床面とするため床面には硬化面はない。周溝は北・西・南壁際に幅25~30cm、深さ10cmのやや幅広で浅く連続するが、東側には存在しない。ただし溝の掘り込みは全体に不明瞭であった。周溝を探る過程で南壁の竈寄りの部分に2個の小ピットを含む浅い落ち込みが見つかり、小ピット内から形をとどめた土師器壺や甕口縁部等が出土している。竈内と接合関係をもつことから、何らかの目的で穿たれたくぼみである。

竈は石組竈で、袖石は手前を縱に、奥側を横に立てた2石を約70cm幅で左右に立て並べ、奥側2石目の上に2~3個の標を載せている。さらに左袖では手前に加工石材の柱状角礫を直立し、奥壁の一段上がったところにも礫を立てている。火處には中央やや南寄りに支脚石を直立する。長さ28cmで、頂部がわずかに平坦に敲打され、甕底部を載せやすくしている。煙道の掘り込みはほとんどなく短いとみられるが、確認面で伏せた甕口縁部が煙道にあたる位置で出土したことから、煙突として土師器甕を転用したものと考えられる。同一個体の分布は、確認面のレベルで水平方向の接合関係を示し、甕を復元したところ、口縁部から胴下半まで接合し、高さ22cmの胴下半を欠く甕となったことから、底部付近を欠く甕を伏せて利用したものであろう。左袖石として直立した加工石材は2号住でも出土しているが、当初焼成粘土柱として取り上げたもので、一見粘土製に見えるが、比較的軟質な凝灰岩を柱状に加工したものである。2号住同様に、本来右袖にも存在したのではないかと考えられる。天井石は全く遺存していないことから、住居廃絶時に取り外して移動したらしい。甕口部は径60cmの円形の落ち込みを呈し、竈全体の大きさは、甕口から煙道まで1.7m、竈本体の石組部分は長さ70cm×幅80cmである。竈内には第24図41の甕を中心に遺物が多く出土し、41はほぼ全体像がわかる甕として復元できた。

床下の掘り方面は、住居の北東、北西、南西隅を中心にごく浅い落ち込みが検出されたが、異なる土を持ち込んで貼り床とした状況は確認できなかった。掘り方中からは土師器片が少量出土している。

## 2号住居（第7~10図、写真図版7・8）

造構確認面では全く住居プランは確認できなかつたが、2号トレンチの西壁際に加工石材が横に出土して遺存していたため、トレンチ内を精査したところ、わずかに住居の東壁の一部を直線的に見いだすことができた。住居は東西4.5m×南北4.1mの隅丸方形で、東壁の南東隅寄りに竈をもち、竈を基準にすると住居の主軸方向はE-16°-Nと、1号住に比べ西に傾いている。住居上層の確認面には13~15号ピットが存在した。調査はまずプランを確定するため、2号トレンチから西に向かってサブトレンチを設定し、南壁を確認した。北壁については未確認のまま、東・南壁を手がかりにおおよそのプランを推定し、十字ベルトを設定した。掘り進む中で北壁を確定し、南東隅がわずかに調査区外に出ていることがわかつたため、調査区を一部拡張して住居の全体像を出すこととした。覆土はほぼ暗褐色砂質土の單一層で、覆土中の遺物は非常に少なく、竈周辺と西壁付近の覆土中にわずかに分布している。地山面は黄褐色砂質土で、床面は地山面をそのまま利用し、全体的に覆土よりも締りが強い面として検出されたが、ごく一部に硬化面が残るもの、硬化面がほとんどない状態である。

周溝は竈周辺を除く壁際に幅20~50cm、深さ8cm程度の溝として連続し、北側周溝中には中央、北東隅寄りに小ピットが確認された。床面中央には直径62×55cm、厚さ21cmの台石が床面に据えた状態で出土した。表面は摩耗して滑らかで、住居中央が作業スペースとして利用されたことがわかる。

竈は南東隅に近く、東壁との隙間はほとんどない状態である。石組で、袖石幅を約70cmとし、正面左右に高さ約30cmの加工石材を立て、加工石材を含めて右側に4石、左側に2石を直立し、その上に小形の礫を平らに置く。煙道との境には横に長さ49cmの加工石材を渡し、天井石としている。甕口側の天井石はなかったことから、1号住と同様に住居廃絶時に撤去したのであろう。煙道部は1号住同様に短く、わずかな壁の掘り込みをなす。また甕口部は径約60cmの楕円形の落ち込みを呈す。竈の全体的な大きさは、甕口から煙道まで1.25m、幅1mで、

竈本体の石組部分は幅1m×長さ0.7mである。加工石材は竈に使用されたもののほか、左袖脇から1点出土しているが、接合関係をもたないことから竈の袖石上部に詰め石として用いられたものであろうか。

掘り方を調査したところ、床面中央に不整形の浅いくぼみがあるほか、中央から北東隅にかけて小ピットが複数検出されている。貼り床として異質な土を持ち込んだ形跡はない。

#### 1号溝（第11図、写真図版9）

調査区中央、1号住と2号住の中間に存在する直線的な溝で、約23m分が確認された。幅1~1.8m、深さ20~40cmで、南端は調査区外にのび、北端は礫層面で途絶えている。溝方向はN-22°-Wで、わずかに西へ触れた南北溝である。溝内には拳大のやや小さな礫を中心に充填されていたため、当初、近現代の水田に伴う暗渠排水と考えた。しかし木材等を入れて蓋石を被せる暗渠の構造とは異なり、溝上層に礫が無造作に入れられた状況であったことと、礫中の数箇所で五輪塔石造物が含まれていることがわかったため、中世以前の溝の可能性があるとして、礫配置状況を写真図化し、下層を掘り下げていった。なお、南端は溝が断続し、直径1.4mの楕円形の集石土坑状を呈し、その集石の中央下層に地輪が1点出土している。集石墓の可能性も想定したが、現場では溝の統きと判断した。溝内の集石が人為的か自然埋没過程での形成か判断は難しいが、人工的な礫の配列は認められない。

溝は全体に壁土がサビ化し、また北半では壁が二重構造を呈していて、中段が認められる部分がある。溝の断面形は逆台形あるいは箱状で、覆土は灰黄褐色砂質土を主とする。

五輪塔は空風輪、火輪、水輪、地輪各1点の計4点があるほか、中世に多い大小の凹み石が3点存在する。他に石臼1点がある。五輪塔は東隣に位置する4号トレンチ内に2点が含まれ、中世墓と考えられる円形土坑墓群が存在することから、本来墓坑に伴うものと考えられる。1号溝南半の溝中に点在するように出土し、溝の廃棄時に他の礫と共に投棄されたものと考えられる。

石製品以外の遺物としては中央やや南寄りの溝底面から平安時代の土師器壺、小形壺が復元される個体片としてまとまって出土した。溝下層に堅穴住居が存在する可能性が考えられたため、脇にトレンチを入れたが、出土遺物はなく、遺構もないと判断されたため、土師器そのものは溝に伴うものと考えられる。そのほか平安時代の遺物には土師器壺、灰釉陶器皿、須恵器壺片があるが、出土量は少量である。そのほか中世に遡る可能性ある遺物には鉄軸小皿、土製擂鉢片がある。

1号溝は1・2号住と主軸方向が共通すること、土師器がまとまって出土したことから、平安時代、10世紀前半に構築され、その後中世末～近世初頭に廃棄されたか、あるいは水害で自然埋没したと考えられる。

#### 2号溝（第11図）

1号溝の南東側にある長さ4.5m、幅40cmの短い溝で、1号溝と2.3mの間隔を置いて平行する。溝の断面形は鍋底状。1号溝とは幅、深さとともに規模が違っている。

#### 土坑（第12~18図、写真図版11~14）

土坑と認定したのは径50~60cm以上の円形を基調とするもので、中世の土師質土器片が出土したことから、それらの多くは中世の土坑墓と考えられる。中には平安時代の土師器片が出土した例もあるが、それらは混入と考えられる。土坑群は群在傾向があり、調査区北東から調査区外に広がりを示すことが推測される。1号溝や3号トレンチ内で出土した五輪塔との関連性がうかがえるが、本遺跡で土坑から五輪塔が出土した例はない。

1号土坑（第12図、写真図版11）14×1.3mの円形土坑。断面形は鍋底状で、深さ15cmと浅い。遺物はない。

2号土坑（第12図、写真図版11）12×1mの楕円形。断面形は皿状で、深さはわずか5cm。遺物はない。

3号土坑（第12図、写真図版11）15×1.1mの楕円形土坑で、4号土坑と重複する。断面形は鍋底状で、深さは24cmを測る。わずかに平安時代の土師器片が出土。

4号土坑（第12図、写真図版11）13×1.2mの円形で、3号土坑と重複。断面形はボル状で、深さ35cm。

5号土坑（第13図、写真図版3）重機による掘削初日、確認面を探すため深めに下げた調査区壁面に確認された

土坑で、平面形は不明。径 1.4 m の円形土坑と推定され、断面形はやや袋状を呈した鍋底状。深さ約 60cm。

6号土坑（第12図、写真図版11）1.4 × 1.5 m の円形土坑で、断面形鍋底状。深さ 20cm。

7号土坑（第13図、写真図版11）1.3 × 1.1 m の楕円形で、断面形は鍋底状。8号土坑とわずかに接する。深さ 25cm。

8号土坑（第13図、写真図版11）径 1 m の円形土坑で、断面形はポール状。深さ 25cm。

9号土坑（第12図、写真図版11）径 1.2 m の円形で、断面形は鍋底状。深さ 15cm で、上層から土師質土器片等が出土した。南東壁寄りに人頭大の礫が存在する。

10号土坑（第13図、写真図版11）80 × 90cm の円形で、断面形は皿状。深さ 15cm。

11号土坑（第13図、写真図版12）90 × 70cm の楕円形で、断面形は鍋底状。深さ 20cm。

12号土坑（第14図）90cm × 1 m の円形土坑で、断面形は鍋底状。深さ 20cm。12～15号土坑は東西方向の列状に配置する。

13号土坑（第14図）14・18号土坑と重複する。1.5 × 1.2 m の不整楕円形で、断面形は鍋底状。深さ 40cm。土師器片、角釘が出土。

14号土坑（第14図、写真図版12）1.6 × 1.2 m の楕円形で、13・18号土坑と重複する。断面形は鍋底状。深さ 38cm。灰釉陶器が出土。

15号土坑（第14図、写真図版12）1.5 × 1.2 m の楕円形で、断面形は鍋底状。深さ 56cm。土坑の東壁寄りに 1 m 大の巨礫のほか礫が存在するが、意図的に入れたにしては大き過ぎる。

16号土坑（第15図、写真図版12）2 × 1.6 m の不整円形で、断面形は鍋底状。28号土坑と重複する。深さ 28cm。

17号土坑（第13図、写真図版12）80 × 75cm の楕円形で、断面形は鍋底状。底面には礫面が露出する。深さ 15cm。

18号土坑（第14図）13・19号土坑と重複する。また 18～21号土坑は東西方向の列状に配置する。2 × 1.7 m の不整形で、断面形は箱状。深さ 48cm で、覆土中から土師質土器片が出土している。

19号土坑（第14図、写真図版12）18・20号土坑と重複。切り合い状況は明確ではないが、20号土坑を切り、18号土坑に切られる。20号土坑と連結し、形状は不明確だが、1.3 × 1 m の不整形で、断面形は箱状。深さ 60cm。土師質土器片出土。

20号土坑（第14図、写真図版12）19・21号土坑と重複し、19・21号土坑に切られる。1.7 × 1.4 m の不整楕円形で、断面形は鍋底状。深さ 68cm。

21号土坑（第14図、写真図版12）1.7 × 1.6 m の円形で、北寄りが円形にくぼみ、2重の土坑状を呈している。断面形は二重の鍋底状で深さ 72cm。20号土坑を切る。

22号土坑（第13図、写真図版13）2号住そばの調査区壁面にかかる土坑で、径 1.5 m の円形と推測される。断面形は箱状で、深さ 22cm。

23号土坑（第16図、写真図版13）1号溝脇に存在し、2号トレンチ壁面にかかる。2.3 × 1.65 m の不整楕円形で、断面形は鍋底状。深さ 40cm。上層には近代以降の棧瓦、ビール瓶を含む集石があり、下層からは底面の南壁寄りから半分の穀臼の上臼が出土した。下層については近世の墓坑の可能性が高い。

24号土坑（第13図）70 × 80cm の楕円形で、調査区外にかかる。断面形は皿状で、深さ 8cm と浅い。

25号土坑（第17図、写真図版13）4号トレンチにかかるようにして検出された土坑で、1.8 × 0.9 m の楕円形。断面形は皿状で、深さ 15cm。覆土には炭化物、灰層があり、当初中世の火葬施設の可能性があるとみて調査を行い、土壤水洗も行った。しかしビニールが混入していたことから現代の擾乱に伴うものと判断した。ただし中世の土坑と擾乱が重複した状況と考えられ、いくつかの遺物が出土している。

26号土坑（第17図）4号トレンチに切られるようにして存在する。1.45 × 0.6 m の隅丸方形で、断面形は皿状。深さは 13cm と浅い。

27号土坑（第15図、写真図版13）3.2 × 2.7 m の大きな不整楕円形で、断面形は皿状。深さ 40cm。土師質土器片出土。28号土坑と重複する。

28号土坑（第15図）90 × 75cm の不整楕円形で、断面形はポール状。底面に礫が露出する。深さ 50cm。27・16号土坑と重複するが、断面観察では切り合い状況を認めることができなかった。

29号土坑（第15図、写真図版13）1.3×1.2mの不整円形で、断面形はボール状。深さ30cmで、底面には疊層が露出する。土師質土器片等出土。

30号土坑（第17図）3.2×1.2mの溝状で、断面形は鍋底状。深さ40cm。底面には疊層が露出する。

31号土坑（第18図、写真図版14）32号土坑と重複。1.3×1.2mの円形で、断面形は鍋底状。深さ24cm。

32号土坑（第18図、写真図版14）31・33号土坑と重複。2×1.8mの不整形で、断面形は鍋底状。深さ16cm。

33号土坑（第18図、写真図版14）32号土坑と重複。65×50cmの円形で、断面形は鍋底状。深さ15cm。

34号土坑（第17図、写真図版14）径70cmの円形で、断面形は鍋底状。深さ24cm。

35号土坑（第18図、写真図版14）1.35×1.2mの不整円形で、断面形は鍋底状。深さ24cm。

36号土坑（第18図）70×56cmの楕円形で、断面形はボール状。深さ16cm。

37号土坑（第16図、写真図版13）1.5×1.1mの楕円形で、断面形は鍋底状。深さ40cmで、覆土上層を集石が覆う。

#### ピット

1号住の南西側を主とする周辺、および2号住東側を中心に存在する。試掘では柱穴列が確認されたというこ<sup>ト</sup>であるが、一部直線的に並ぶピットがあるものの、掘立柱建物としての配置は把握できなかった。各ピットのデータは以下のとおりである。

長径cm	短径cm	深さcm	備考	長径cm	短径cm	深さcm	備考
1号ピット	40	34	24	29号ピット	47	39	33
2号ピット	56	50	17	30号ピット	32	30	9
3号ピット	42	38	8	31号ピット	50	43	27
4号ピット	71	61	20	32号ピット	36	35	29
5号ピット	85	70	42	33号ピット	43	40	23
6号ピット	67	64	27	34号ピット	29	28	15
7号ピット	43	42	28	35号ピット	29	29	16
8号ピット	61	60	42	36号ピット	58	33	17
9号ピット	67	52	13	37号ピット	30	27	10
10号ピット	89	64	10	38号ピット	29	29	19
11号ピット	34	33	19	39号ピット	56	50	24
12号ピット	108	55	58	40号ピット	24	21	11
13号ピット	50	48	20	41号ピット	21	17	9
14号ピット	42	38	21	42号ピット	24	20	8
15号ピット	75	41	21	43号ピット	31	27	11
16号ピット	42	36	20	44号ピット	35	33	10
17号ピット	39	34	17	45号ピット	55	29	10
18号ピット	62	48	24	46号ピット	38	36	26
19号ピット	27	25	8	47号ピット	24	21	11
20号ピット	21	20	23	48号ピット	28	25	17
21号ピット	55	44	16	49号ピット	35	31	24
22号ピット	36	34	14	50号ピット	60	53	14
23号ピット	65	57	52	51号ピット	37	31	19
24号ピット	33	31	20	52号ピット	38	32	25
25号ピット	43	39	17	53号ピット	34	34	12
26号ピット	36	34	17	54号ピット	43	35	13
27号ピット	24	22	11	55号ピット	59	52	13
28号ピット	35	33	15	56号ピット	107	78	9

## 第4節 遺物

### 1号住居（第23～26図、写真図版18・19・22）

竈内、周辺遺物を主としてやや多い。1～38・56～58は土師器壺皿、39は灰釉陶器壺、40は土師質土器皿、41～53は土師器壺、54・55は須恵器壺皿、59・60は土師器置き壺、61は加工石材、62・63は鉄製品、64は支脚石である。

土師器坏皿類は図面は小破片を相当数復元実測しているため、個体数が多くなっているが、1～5・56～58が完形に近い器形のわかる資料である。また56～58は竈脇の床面ピット内出土資料である。土師器坏皿は回転ナデ成形、外面下半に斜め手持ちヘラ削りをもつ甲斐型土師器を主とし、口唇部が玉縁化したタイプ、あるいは玉縁化しつつあるタイプがある。底部は4～5cmとやや小形で、回転糸切り後、手持ちヘラ削りを加えるを基本形とするが、糸切り痕が大きく残り、周縁のみヘラ削りしたようなものが多く、37のように手持ちヘラ削りを行わないものもある。内面を黒色化したいわゆる黒色坏が圓化資料41点中6点あり、黒色坏の中には内面に暗文を施文したものがある（16・24）。暗文は16が花弁状（放射状）、24が小破片のため不明だが渦巻き状を呈している。どちらも甲斐型黒色土器の範疇で理解されるものである。内面はナデ調整が不十分で、回転ナデ痕を残すものが多い（4など）。口唇部内外にスコケ痕をもつものがあり（12・21）、灯明皿に用いたことがわかる。なお56・57は居住時最終段階の土器と考えられるが、玉縁化が著しく発達している。土器の大きさとしては口径12～13cmの通常タイプのほか、口径14cm大のやや大形化したもののが少数存在する。手持ちヘラ削りの向きは図面上で左上から右下への斜めヘラ削りとするものが一般的だが、4の黒色坏のみが右上から左下へと逆になっている。胎土は甲斐型特有の緻密な粘土を用いるが、2・3はやや粗く、特に3は長石粒が多い特徴があり、甲斐型土器生産が一元的ではなかった可能性を示唆する。墨書き土器としては38を掲げたが、黒色付着物の可能性がある。なお40の土師質土器皿は中世。

土師器壺には口縁部が肥厚した長胴壺の系譜を引くものと、新しい器種としての羽釜がある。41は竈周辺の土器か接合して底部から口縁部まで復元できた稀有な事例である。底部は広葉樹の大形の葉を用いた木葉痕とし、胴下半、全体の1/3の高さで一端輪積みを止めて、時間を置いてさらに積み上げているため、高さ13～14cmの付近（接合帯境界）には内面に輪積みの痕跡を明瞭に残す（図版19 2段目左）。粘土帶の接合状況は内傾接合で、内面に粘土帶の接合状況が段差として遺存し、外面上には粘土帶を重ねた際の鈍角の角の形跡が残り、角を落とすようにその上だけをハケメ調整したため、部分的に短いハケメ調整痕が残っている（図版19 2段目左）。内外面の調整もその輪積み痕を境に上下で若干の違いをみせている。とくに外面境界下では下から上へ向かってハケメ調整をするが、境界上では口縁側から下へ向かって調整するため、ハケメの向きが上下で異なる。また内面も同様に行っているとみられるが、内面の場合は上半1/3が左上がり、2/3以下が右上がりのハケメの向きとなる。また内面は境界下には指頭痕がよく残り、ハケメが消失する傾向がある。口縁部は器壁の2倍程度に厚みをもたせ、胴部からの移行は屈曲部が弱く滑らかになっている。また口唇端部は角頭状で、端部をハケメ調整する。使用痕は明瞭ではないが、胴下半2/3付近にススが薄く付着し、特に胴下半1/3にはやや厚くススが付着する。内面には胴下半1/2が薄く変色している。外面口縁部に近い部分には器壁に貼り付くように赤褐色の被熱した粘土が部分的に存在するが、これは竈にかけた際に隙間を埋めるように粘土で塞いだものとみられる（図版19 2段目中）。また底には灰がかすかに付着する（図版19 3段目左）。42も41とはほぼ同じ大きさの壺で、煙道の煙突に転用されて出土した。逆位に伏せた口縁部が煙道に遺存し、胴の破片は遺構確認面のレベルで出土したもので、胴下半以下がないが、もともと底部付近を欠損した壺を用いたのであろう。この土器も接合帯境界が存在するが、使用痕としては外面全面にススが薄く付着し、内面接合帯境界以下が黒く変色する（図版19 3段目右）。煙突として使用された使用痕の可能性もあるが、煮沸使用に関わる炭化物付着と考えておく。また内面口縁部寄りの部分には灰褐色の灰汁状のものが付着する。外面のハケメの条線の幅が2～3mmと狭いのに対し、内面は幅5～6mmと広く、異なる施文具を用いている。48は壺底部のみの破片だが、底部内面の見込み部にあたる部分にコゲが付着し、底部外面には灰が付着する資料である。61は断面長方形を呈した角柱状の加工石材で、竈左袖に直立てて出土した。明らかにチョウナによるハツリ痕がある2号住の資料に比べ、本例は各面が平らに整い、型に入れて成形したようにみえるため焼成粘土にみえるが、第4章第3節の分析では石と同定された。62はクランク状に曲がった角鉄、63はC字状の鉄製品で、断面形は平たく、器種は不明である。64は棒状の自然礫で、竈支脚に用いられた。外面は薄く被熱、変色し、頂部に人為的な敲打痕があり、3cm四方にわたって頂部を平らに加工している。壺の底部を受けやすくするための加工痕であろう。

竈内および竈脇から多くの遺物が出土したが、それ以外では遺物の出土量は少ない。1～14は土師器坏皿、15は灰釉陶器塊、16～24は土師器壺、25～27は土師器置き竈、28～32は焼成粘土塊、33～36は竈構築材としての加工石材、37は支脚石、38は台石である。

土師器坏皿類は1号住とほぼ同じ様相で、すべて甲斐型土師器であるが、黒色坏が19点中3点存在する。口縁の玉縁化は11・12の皿では著しい。手持ちヘラ削りの向きは右上左下とするものが2点（1・14）ある。ヘラの持つ手を左とした左利き工人による製作例であろう。8は大形の坏で、1号住4と同様に大形品を黒色土器とした例である。灯明皿例としては11がある。墨書き土器は存在しない。

土師器壺は1号住例とほぼ同形態で、16・17は接合帯境界直下を欠失した例、23は境界直上を欠失した例である。20・21は羽釜で、口径、器高ともに壺よりも小さい。20は外面縦ハケのち鉢を接合している。口唇部は丸く、内外ともに薄く変色する。21の口唇部もやはり丸味をもち、鉢および外面には褐色粘土の付着痕らしきよごれがある。

25は置き竈の上半で、内外面ともに変色する。口唇端部や鉢の断面形状は羽釜と類似することから、置き竈は羽釜とセットで製作されたものではなかったかと推測できるが、25・27ともに復元径が羽釜よりもひとまわり大きい。28～32は焼成粘土塊で、加工石材片とは区別される。

33～36は角柱状の加工石材。断面形は幅13～15cm、厚さ10～14cmの（長）方形で、竈左右袖石、天井支石に用いられたもの。幅にある程度の規格を見いだすことができそうなので、竈袖石として産地で加工されて出荷されたものではなかったか。33・34は表裏面に幅5cmのチョウナ痕とみられる刃部を繰り返し碟面に打ち付けて平坦面を作りだした加工痕を残し、側面は割り取ったままで整形痕がないが、33には片面に表裏面側から溝を入れて割った痕跡がある。断面形はともに幅、厚さが同程度で、歪んだ不整形の方形とする。それに対し35・36は縦方向に刃物の痕跡があり、削るように4面とも面整形し、断面形は表裏面と側面を意識するかのように長方形となっている。35は断面長方形を意識し、角には丸味をついている。36は断面形がやや歪んだ長方形となる。33・34と35・36はそれぞれ似た色調、石の肌をもっており、加工工程の違いが認められることから石材産地、製作工程、工人集団が違っていた可能性を示す。

37は竈支脚石で、自然縁の平らな端部を上にして立てており、1号住例のように人為的な加工痕は認められない。38も自然縁だが、50kg近い重量をもつ碟を住居内中央に持ち込んで据えた台石で、表面は滑らかになっている。様々な作業台として用いたことであろう。なお図にある凹みは人工的なものではない。

#### 1号溝（第31～33図、図版21）

平安時代の土師器が集中する部分があり、7・10の壺が出土したほか、土師器坏が少量出土している。また中世の土師質土器、陶器などもわずかにあるものの、近世以降の陶磁器類はほとんど存在しない。また碟中に混じて五輪塔の部材、凹み石が出土した。

1～6は土師器坏皿、8は灰釉陶器皿、7・9・10は土師器壺、11～13は須恵器壺、14は中世～近世初頭の鉄釉小皿、15は土製擂鉢、16～18は凹み石、19～22は五輪塔、23は石臼片である。

1～3の坏のうち3はやや大形の黒色坏。4～6は皿で、6は体部外面に太い文字で書かれた墨書きがある（文字は不明）。7の壺は口縁部と胴部の大形破片で、胴下半は黒く変色する。また内面に一部粘土が付着している。接合帯境界付近の外面を境に作り分けている様子は1号住の例と同じである。9・10は小形壺で、10は底部付近を欠く良好な資料である。大形壺と違って接合帯境界がなく、底部から一気に口縁部まで製作したように見える。また煮沸痕は内外面ともにほとんど見受けられない。調整痕としてのハケメは、外面は単調な縦方向のみで、内面は上半を横位、下半を斜位とする。

16～18の凹み石は縄文土器としての凹み石とは異なり、やや扁平な円碟の片面に明瞭な凹みをもち、凹みの断面形は浅く、また凹みの径が大きいのが特徴で、中近世の遺跡から多く出土する。何らかの叩き石に用いたと考えるのが自然であろう。いずれも裏面にもかすかに敲打痕があり、片面を主に使いつつ裏面も利用したことがわかる。

19~22の五輪塔は19が空風輪、20が火輪、21が水輪、22が地輪で、各1個ずつあるので単純に考えるとセットの可能性もあるが、空風輪、火輪、水輪はいずれも欠損し、さらに水輪が大きく不釣り合いで、セット関係を示すものではない。また21には径12.5cm、深さ10.5cmの円形のボール状の凹みがあり、また22にも径10cm、深さ3cmの凹みがある。22の凹みは納骨孔の可能性があるが、21の凹みは、大きく内面が研磨していないものの、比較的滑らかで、凹み石として五輪塔部材を転用したものと考えられる。20の火輪は扁平化したもので、16世紀後半~末と考えられる。なお図化資料以外に溝の時期を示唆する資料として土師質土器皿片5点、内耳土器片1点がある。

#### 土坑（第34・35図、図版21）

ここでは遺物が出土した土坑の出土遺物について、図化資料のほか未図化資料にどのようなものがあるか記しておく。

3号土坑 未図化資料に土師器坏皿片2点あり。

7号土坑 未図化資料に土師器壺片3点あり。

8号土坑 未図化資料に土師器坏皿1点あり。

9号土坑 第34図では土師質土器皿（1）と擂鉢（2）を図示したが、未図化資料として土師質土器皿2点、土師器壺1点、坏1点がある。中世の土坑であろう。

10号土坑 未図化資料に土師器坏皿片1点あり。

11号土坑 第34図では土師器黑色坏（1）を図示したが、他に未図化資料土師器壺片1点、坏皿2点あり。出土遺物は重複した1号住の覆土中遺物の可能性がある。

12号土坑 未図化資料に土師質土器片が5点あることから、中世であろう。

13号土坑 第34図では土師器羽釜片（1）と角釘（2）を図示したが、中世の所産であろう。

14号土坑 図化資料として灰釉陶器皿1点があるが、混入の可能性が高く、造構自体は中世か。

15号土坑 未図化資料に土師質土器片が1点あり、中世の土坑か。

16号土坑 未図化資料に土師質土器皿2点があり、中世の土坑か。

17号土坑 未図化資料に土師器壺片1点あり。

18号土坑 第34図では土師質土器皿4点を図示した（1~4）。口縁部が薄く尖り気味のもの（2）と丸く厚いもの（3）がある。他に未図化資料として土師器壺片4点があるが、中世であろう。

19号土坑 第34図では土師質土器皿（1）と角釘（2）を1点図示した。中世の所産。

20号土坑 未図化資料に土師器皿1点、土師器壺片2点、土師質土器皿1点があり、中世の所産と考えられる。

22号土坑 未図化資料として置き甌の鰐細片3点あり。

23号土坑 第34図1はほぼ半分の穀臼で、2つに割れた破片が接合したもの。摺り面はよく摩耗し、刻み線は不鮮明で、方形に近い供給孔があり、摺り面にはもの配りの溝が弧を描いている。裏面中央には軸受孔があり、側面には柄孔がある。そのほか未図化資料として上層の集石付近から近現代の棧瓦片10点、近現代のビール酒瓶片3、磁器染付急須蓋1、碗3、鉄釉陶器壺1があり、また平安時代の遺物に土師器壺6点、坏皿7点、土師質土器皿1点がある。近世土坑で、石臼半分が入っていることから石臼を割って埋納した墓坑の可能性がある。上層の集石については、隣接する1号溝と同時期に形成された可能性がある。また近現代の遺物については集石と重複した摺乱の遺物と考えておく。

25号土坑 第34図では土師質土器皿（1）、灰釉陶器壺（2）、不明鉄製品（3）を図示したが、ほかに未図化資料として土師質土器皿2点、土師器皿1点、壺1点、近世と思われる陶器擂鉢、壺各1点がある。また丸釘、ビニール等が炭とともに出土した。明らかに現代の摺乱（畑に穴を掘ってごみを燃した場所）であるが、中世の遺物が出土したことから、炭化物範囲を除く土坑範囲は中世土坑と考えられる。

26号土坑 第35図では土師器坏（1）、壺（2）を図示した。他に未図化資料として壺細片2点がある。

27号土坑 第35図では土師質土器皿3点（1~3）、土師器羽釜片（4）を図示したが、他に未図化資料として

土師質土器皿1点、土師器壺1点、近世と思われる磁器片1点があり、中世～近世の所産であろう。

29号土坑 未図化資料に土師器皿1点、擂鉢かと思われる底部1点があり、中世か。

30号土坑 未図化資料に土師器壺皿1点あり。

35号土坑 未図化資料に近世末の磁器染付碗片1点があり、近世以降の土坑か。

37号土坑 第35図で図示した近世、18世紀代の尾呂窯製品(1)、擂鉢底部と思われる土器片(2)、角釘2点(3・4)のほか、未図化資料として土師器壺皿片3点があり、近世の所産か。

#### ピット(第35図、写真図版21)

ピット出土遺物は以下のとおり。なお47号ピットは1号住内竈脇のピットで、竈内遺物と接合関係をもつことから1号住の中に含めた。

4号ピット 未図化資料に土師器壺皿片1点、壺片1点あり。

5号ピット 第35図1は土師器皿。

12号ピット 未図化資料に土師質土器擂鉢片1点、土師質土器皿片2点がある。中世か。

18号ピット 未図化資料に土師質土器皿片1点あり。中世か。

25号ピット 未図化資料に土師器壺皿細片1点あり。

36号ピット 未図化資料に明治の時期碗片1点あり。近代か。

50号ピット 図化資料に土師器壺片1点あり。

#### 遺構外(第35・36図、写真図版21・23)

1～18は平安時代の土師器壺皿、19～21は灰釉陶器塊皿、22～29は土師器壺、30はいわゆる鉢系壺、31は置き瓶片。32・33は土師質土器皿。34・35は中世かと思われる陶器、36は時期不明の土器片、37は焼成粘土塊、38は水楽通宝、39は砥石、40・41は五輪塔、42は不明石製品、43・44は石臼片。

土師器壺皿類には玉縁が発展途中のものがあるが、壺頸など遺構外遺物をみても時期的な違いを示す資料はなく、本遺跡は平安時代の中でもごく短期間な居住痕跡を示す遺跡といえる。18の穿孔土器片は、土師器皿の底部片の中央に、直径2.5～4mmの細い孔が穿孔され、内面から見ると2孔、外面から見ると1孔となっている。皿の底部と体部の境に穿孔があるが、皿の状態で穿孔されたというよりは、破片に孔を開けて紐を通すなど、なんらかの土器片利用が行われたことを想定したい。また通常の壺に混じって30の壺系鉢が存在する。30は内外面が著しく黒変し、盛んに煮沸が行われたことがわかるが、広口の鍋的な使い方が行われたと考えられ、県内では大型集落を中心にみられる器種である。口縁部の厚みや作り、内外面のハケメは通常の壺と同じで、甲斐型土器の器種とみなされている。32の土師質土器小皿は調査区境、北壁面から出土したもので、回転ナデ成形が行われ、器壁はやや厚みを持って端部は丸味がある。口縁部はやや歪み、底部は回転糸切り後後らかの圧痕が付着する。

40～44は4号トレチ内出土で、トレチ底面から他の標と共に見つかったことから、市教委の試掘時にトレチ内から出土したものと考えておく。これらのうち40は五輪塔地輪で、1号溝出土例と同様に上面の中央に径9.5cm、深さ4cmの断面ボール状の凹みを開け、側面(第37図40の正面)のうち1面を砥面として使用したらしく、著しく摩耗している。上面凹みは納骨孔と思われるが、砥面は五輪塔の転用利用を示す。42は不明石製品だが、中央に断面三角形の稜をもつ部分があり、六地藏籠の破片かと思われるが定かではない。火袋にあたる「龕(がん)」の六面体を刻んだ角に相当するのではないか。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 間之田東遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子(パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

山梨市正徳寺地内に所在する間之田東遺跡で平安時代(10世紀前半)の竪穴住居跡から出土した炭化材について、樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて炭化種実同定も行われている(第2節参照)。

#### 2. 試料と方法

試料は1号竪穴住居の竪と、2号竪穴住居の竪内から出土した炭化材で、竪の火廻内の竪底面に近い堆積土を水洗選別し、抽出された。考古学的な所見から、どちらも平安時代(10世紀中頃)の竪穴住居跡と推定されている。

破片が多かったため、まず目視と実体顕微鏡を用いて観察し、分類群を抽出した。その際、およそ0.5cm角以上の炭化材を対象としたが、2号竪穴住居跡の竪は試料が少なかったため0.3cm角程度の炭化材片までを観察の対象とした。また、形状の確認と径および年輪数の計測も行った。次に、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。残りの試料は、山梨文化財研究所に保管されている。

#### 3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はスギとヒノキの2分類群、広葉樹はオニグルミとコナラ節クヌギ節(以下、クヌギ節と呼ぶ)の2分類群が確認され、その他に分類群不明が1点確認された。

表2 樹種同定結果

遺構	No.	樹種	形状	残存径
1住	1	スギ	破片	1cm角、26年輪
	2	コナラ属クヌギ節	破片(節)	2cm角以下、1年未満
2住	1	ヒノキ	破片	1cm角、8年輪
	2	オニグルミ	破片	0.3cm角、年輪数不明
	3	不明	破片	0.5cm角、年輪数不明

1号竪穴住居跡のカマドではスギとクヌギ節の2分類群、2号竪穴住居跡の竪ではヒノキとオニグルミ、不明の3分類群が確認された(表2)。形状はすべて破片で、1号竪穴住居の竪から出土したクヌギ節は組織が大きく曲がっているため、節と思われる。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 写真1 1a-1c (1住-Na1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真1 2a-2c (2住-Na1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性およ

び耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(3) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino クルミ科 写真1 3a-3c (2住-No.2)

大型の道管が単独もしくは放射方向に数個複合して散在し、晚材部で径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は線状となる。道管の穿孔は單一である。放射組織はほぼ同性で、1~4列幅である。

オニグルミは温帯~暖帯に分布する落葉高木である。材は重さおよび硬さは中庸で保存性はあまりないが、粘りがあり、狂いが少なく加工容易である。

(4) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 写真1 4a-4c (1住-No.2)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晚材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は單一である。放射組織は単列同性と広放射組織がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靭で、加工困難である。

(5) 不明 Unknown 写真1 5a-5b (2住-No.3)

試料の状態が悪く発泡しており、組織の配列が観察できず、針葉樹か広葉樹かも不明である。

#### 4. 考察

試料は、竈の底面に近い堆積土に含まれていた炭化材片であり、燃料材と推測される。形状はすべて2cm角以下の破片で、元の形状は不明である。

山梨県内では、平安時代の住居跡から出土した炭化材の分析はそれほど多く行われていないが、コナラ属コナラ節やクヌギ節を中心とした広葉樹が比較的多く確認されている(伊東・山田編, 2012)。針葉樹はモミ属が数点確認されている程度だが、木製品ではスギやヒノキも利用されている(伊東・山田編, 2012)。分析点数が少ないので概には比較できないが、今回の分析結果も周辺の遺跡で確認されている木材利用傾向と類似すると思われる。

今回の分析で確認されたスギとヒノキは軽軟で割裂性が大きく、加工容易な材である。また、クヌギ節は重硬で、オニグルミは比較的加工容易な材である。クヌギ節は二次林的要素の強い樹種であり、オニグルミは川沿いなど湿気の多いところに生育する。遺跡周辺から木材を得ていたとすると、スギやヒノキなどの常緑針葉樹と、クヌギ節やオニグルミなどの落葉広葉樹が、周囲に生育していたと思われる。

#### 引用文献

伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p, 海青社.

#### (補足)

なお、1・2号住竈からの土壤採取および炭化物抽出は以下の目的・手順で実施した。

分析の目的としては、竈内に残された植物残滓から当時の食生活を探ること、および炭化材から燃料材を明らかにすることである。竈内の土壤採取は通常、焼土層直上、炭化物層で行うことが多いが、両竈とも焼土層、炭化物層ともにほとんど確認できなかったため、1号住竈内3層、2号住竈内2・3層を採取し、炭化物が含まれている土壤を選択的に採取した。室内で洗浄カゴに新聞紙を敷いて数日括げ、乾燥した重量を計測し、水洗選別した。選別は水を張った桶内に土を投入し、浮上した炭化物を網でく取る浮遊選別法である。また沈殿した土壤もチェックして炭化物等があれば回収した。洗浄量は1号住竈 23.2kg、2号住竈 23.6kgである。 (鶴原)

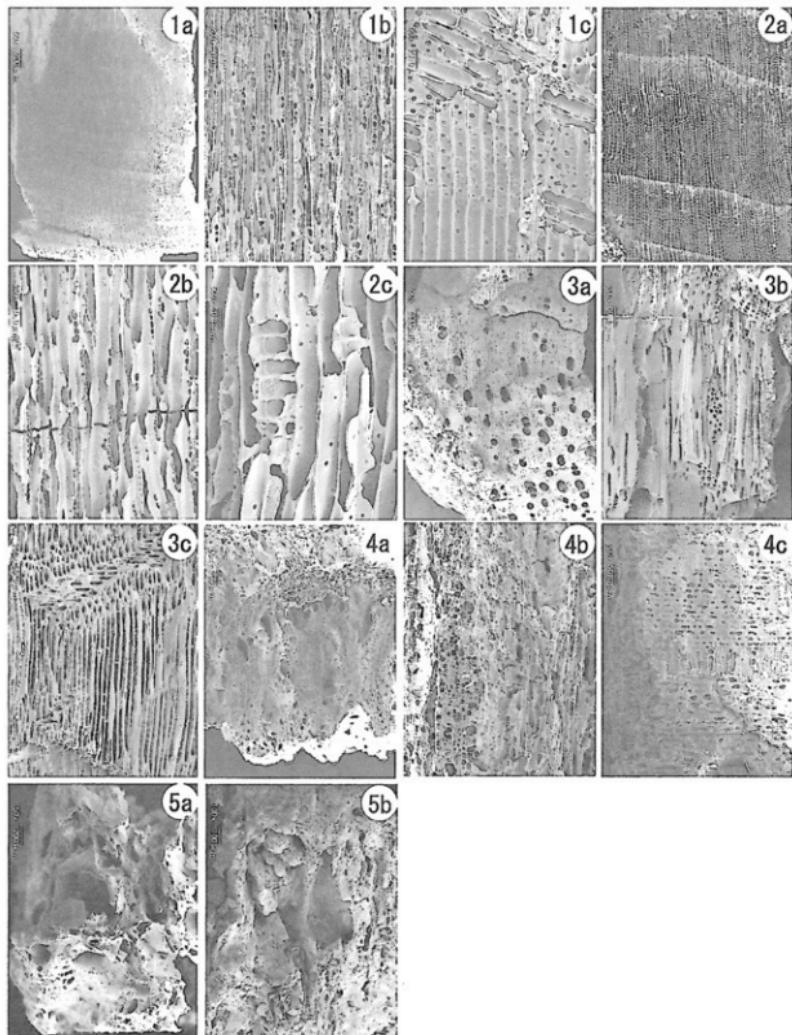


写真1 間之田東遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. スギ (1住-Na1)、2a-2c. ヒノキ (2住-Na1)、3a-3c. オニグルミ (2住-Na2)、4a-4c. コナラ属クヌギ節 (1住-Na2)、  
5a-5b. 不明 (2住-Na3)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

## 第2節 間之田東遺跡の竪穴住居跡から出土した炭化種実

佐々木由香・パンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

山梨市正徳寺地内に位置する間之田東遺跡は、笛吹川右岸、旧笛吹川氾濫原の中洲状の場所に立地する古代から中世の集落跡である。ここでは、10世紀前半の竪穴住居跡の竈から出土した炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生、栽培状況について検討した。なお、同一試料を用いて炭化材の樹種同定も行われている（第1節参照）。

### 2. 試料と方法

試料は、水洗選別済みの試料で、1号竪穴住居跡（1住）と2号竪穴住居跡（2住）の竈内から回収された2試料である。

試料の水洗および炭化物の抽出は、公益財団法人山梨文化財研究所によって行われた。試料は、竈の火処内で竈底面に近い堆積土が採取された。乾燥後、重量を計測し、水洗で浮上した炭化物が灰汁取りのような網を用いて回収された。さらに沈殿物からも炭化物が抽出された。発掘現場の所見によると、1・2号住居跡ともに竈内は焼土の形成が弱く、炭化物の層は確認できなかった。なお、両住居共に火災住居ではない。どちらも平安時代（10世紀前半）の竪穴住居跡と推定されている。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。試料は、公益財団法人山梨文化財研究所に保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のクリ炭化子葉とモモ炭化核、トチノキ炭化種子の3分類群、草本植物ではハギ属炭化種子とイネ炭化種子の2分類群の、計5分類群が見いだされた（表3）。この他、科以上に細分する識別点が残存していない一群を、同定不能炭化種実とした。

以下、産出した炭化種実について造構別に記載する。

1号竪穴住居跡：トチノキ種子の破片が150点と非常に多く、クリ子葉とイネ種子がわずかに得られた。

2号竪穴住居跡：ハギ属種子が少量、クリ子葉とモモ核、同定不能種実がわずかに得られた。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化子葉 プナ科

破片であるが、完形ならば広卵形。表面に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦で光沢があり、硬質。子葉の大きさは、残存長4.5mm、残存幅4.9mm、残存厚2.4mm。

(2) モモ *Amygdalus persica* L. 炭化核 バラ科

破片であるが、完形ならば上面觀は両凸レンズ形、側面觀は橢円形で先が尖る。完形ならば下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。残存長10.5mm、残存幅2.8mm。

(3) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 炭化種子 トチノキ科

すべて微小な破片である。完形ならば橢円形で、下半部は光沢がなく、上半部には光沢がややある。上下の境

表3 間之田東遺跡から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

分類群	遺構名 採取位置 時期	1住	2住
		カマド内	カマド内
クリ	炭化子葉	(1)	(1)
モモ	炭化核		(1)
トチノキ	炭化種子	(150)	
ハギ属	炭化種子		8 (4)
イネ	炭化種子	1	
同定不能	炭化種実		(9)

目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄くてやや硬く、不規則な方向に割れる。種皮は3層からなり、各層で細胞の配列方向が異なる。種皮表面には指紋状の微細模様が密にある。最大の破片で、残存長8.6mm、残存幅8.4mm。

(4) ハギ属 *Lespedeza* sp. 炭化種子 マメ科

一部発泡しているが、上面觀は楕円形、側面觀は腹部がやや凹むいびつな楕円形。ほぼ中央に楕円形の小さい脇の痕跡がある。表面は平滑。長さ2.3mm、幅1.7mm、厚さ1.1mm。

(5) イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子 イネ科

上面觀が両凸レンズ形、側面觀は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ2.8mm、幅2.0mm。

#### 4. 考察

10世紀前半に位置づけられる2棟の竪穴住居跡の竈から出土した炭化種実を同定した結果、1号竪穴住居跡からは野生植物のクリとトチノキ、栽培植物のイネ、2号竪穴住居跡からは野生植物のクリとハギ属、栽培植物のモモが得られた。種実で産出したこれらの分類群は、同遺構から出土した炭化材では全く得られていない種類のため、種実を利用した種類と木材を利用した種類は異なっていたと考えられる(第1節参照)。野生植物のうち、クリとトチノキは食用可能である。クリは生食可能なのに対し、トチノキは食べるにあたりアクリ抜きが必要である。トチノキの食用部位である子葉を得るために種子が集められ、割った残渣である種子の破片が竈内で燃やされた可能性がある。トチノキ種子破片の産出量は完形個体に換算するとおよそ2個体分であった。しかし、竈内から出土するのは偶發的に残存した種実のみと考えられるため、本来はかなりの量のトチノキ種子があったと推測される。食用部位であるクリ子葉やイネ種子は、加工中や調理中に偶發的に炭化して残存したと考えられる。ハギ属は、材が着火材などとして用いられた際に果実が付いていたなど、偶發的に竈内にもたらされた可能性などが考えられる。

得られた種実は少ないが、栽培植物と堅果類の双方の利用が確認できた。遺跡は中洲状地形の砂層もしくは疊層上に立地しており、得られた種実の植物が生育もしくは栽培されにくかったと考えられる。したがって、これらの種実は遺跡外から持ち込まれ、利用されたと推定される。

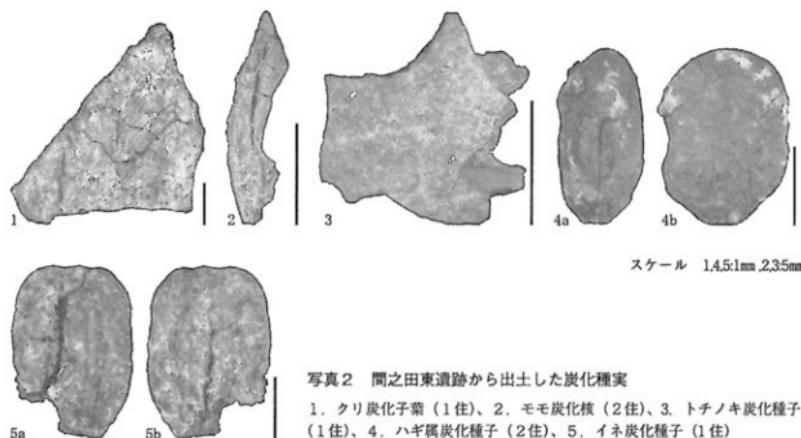


写真2 間之田遺跡から出土した炭化種実

1. クリ炭化子葉 (1住)
2. モモ炭化核 (2住)
3. トチノキ炭化種子 (1住)
4. ハギ属炭化種子 (2住)
5. イネ炭化種子 (1住)

### 第3節 間之田東遺跡の竪を構築する加工石材の岩質について

河 西 学

#### はじめに

間之田東遺跡は、笛吹川の形成する扇状地上に立地する。本遺跡の平安時代の竪穴建物跡からは、赤褐色で柱状の竪構築材が出土している。発掘当初は赤褐色を呈し、土器の感触に類似することから土製品ではないかとの見解もあった。しかし、これらの構築材が、工具による削痕が表面に認められ、自形の輝石・斜長石の結晶が普通に含まれ、安山岩を主体とする火山礫を多く含むことなどから、火山礫凝灰岩の石材であることが判明した。ここでは、これらの石材の特徴を記載するとともに、山口軽石凝灰岩との比較から原産地の推定を試みる。

#### 周辺地質の概要

「御岳昇仙峡地域の地質」(三村ほか 1984)によると、この地域の基盤は四五十累層群からなり、それを新第三紀の深成岩類と、新第三紀から第四紀の火山岩が広く分布する。低地は段丘を構成する堆積物と笛吹川扇状地などを構成する沖積層が分布する。

基盤の四五十累層群は、頁岩・砂岩を主体とし、塩山や扇山に分布し、花崗岩類の接触変成作用でホルンフェルス化している。

深成岩類は、貫入順に甲府花崗岩体、川浦複合岩体および小島花崗閃綠岩に大別される。甲府花崗岩体は、四五十累層群に貫入し、中新世の太良ヶ峰火山岩・小幡山火山岩に覆われる。甲府花崗岩体は、さらに昇仙峡花崗岩・三宝花崗閃綠岩・広瀬花崗閃綠岩に細分される。遺跡周辺では、兄川左岸の荒神山・霞森山などに広く分布し、万力公園周辺にも小規模に露出する。川浦複合岩体は、甲府花崗岩体を貫き小幡山火山岩に覆われる。小島花崗閃綠岩は、小幡山火山岩を貫き鮮新世の水ヶ森火山岩に覆われる。小島花崗閃綠岩は、小幡山火山岩とともに東山梨火山深成複合岩体を構成する。

新第三紀の火山岩類は、古いものから太良ヶ峰火山岩・小幡山火山岩・水ヶ森火山岩に3区分される。太良ヶ峰火山岩は淡緑色に変質した安山岩質の火碎岩と溶岩から構成され、水中堆積と考えられている。続く小幡山火山岩は、主にデイサイト～流紋岩質で、大部分が乾陸上堆積の溶結した火碎流堆積物である馬場溶結凝灰岩・大平溶結凝灰岩などから構成される。規模が最大の大平溶結凝灰岩は、乾徳山・大久保山・大鳥山・小幡山・切差周辺・棚山・兜山などに分布する。水ヶ森火山は、小幡山火山岩を覆い、非変質の安山岩質の火碎岩・溶岩・泥流堆積物などからなる。水ヶ森火山岩は、山口軽石凝灰岩・塔岩火碎流堆積物・片山溶岩およびこれらを覆う窪平泥流堆積物から構成される。山口軽石凝灰岩は、兄川流域から永昌院付近に広く分布するほか鼓川流域の牧平付近にも分布する。片山溶岩は、片山石や山崎石などと呼ばれ石材として採石・利用され、片山・湯村山・八人山・大蔵経寺山・水ヶ森などに広く分布する。窪平泥流堆積物は片山溶岩が分布する下流域に分布し、片山溶岩を主要構成岩片とする泥流堆積物である。その分布は、隼西側の緩斜面、笛吹フルーツ公園を含む東斜面、上岩下付近、上栗生野北方の山地などである。

#### 試料と分析方法

分析試料は、本遺跡2号住の竪を構築する加工石材 No.729 の破片試料と山口軽石凝灰岩の模式地露頭下の崩落ブロックから採取した試料の2点である。

分析は、試料が脆弱であるためエボキシ樹脂を含浸させて岩石薄片を2枚ずつ作製し、一方はフッ化水素酸蒸気でエッティングし、コバルチ亞硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色し、他方は何もせずそのまま、カバーガラスで封入しプレパラートとし偏光顕微鏡で観察した。

## 分析結果

### 2号住電構築石材 No.729 の破片試料（岩石名：火山礫凝灰岩）（図版24）

肉眼では、表面に幅17mm、長さ45mm程度の加工痕が複数認められる。これらは、平面形をしたのみのような工具による切削痕と推定される。一般的の土器の表面に認められるナデ、ミガキ、圧痕などは認められない。また瓦や煉瓦などの土製品では前述の器面調整や切断痕などで土製品内部の構造が見えづらいが、この構築材では、火山岩の角礫や鉱物粒子の輪郭や分布状況が確認できる。主として安山岩質の火山礫を多く含み基質（マトリクス）の部分は少ない。鉱物粒子は、輝石が多く斜長石も含まれ、いずれも自形の柱状～長柱状結晶を呈する。なお、構築材表面には1mm以下の金色の黒雲母が付着しているが、これは住居跡を埋積する褐色覆土中に含まれる黒雲母由来するものである。火山角礫は、硬質のものと軟質のものがあるが後者が多い。硬質火山角礫は、暗灰色で最大20mm、表面に突出しているものも少なくない。軟質火山角礫は、最大45mmで、褐色、赤褐色、暗灰色などを呈し、表面の角礫は加工工具で削平されていて、風化により爪で傷が付く程度に軟質である。火熱を受けたためと思われるが表面が赤褐色に酸化されていて、軟質火山角礫とマトリクスとの区別が肉眼では難しい場合がある。

顕微鏡下では、粒子はほとんど全てが安山岩質の角礫～砂である。多くは褐色を呈する風化した安山岩で軟質の火山角礫に対応する。一部褐色化せず新鮮な安山岩が認められるがこれらが硬質の火山角礫に対応するものと考えられる。新鮮な硬質の安山岩は、緻密な斜方輝石・単斜輝石安山岩であり、石基は斜長石・単斜輝石・不透明鉱物からなる間粒状を呈する。褐色の風化した軟質安山岩も、斜方輝石・単斜輝石安山岩で、気泡が小さくまばらに発泡している発泡不良の軽石質安山岩を含む。斑晶鉱物として斜長石・単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物などを伴い、石基はガラス・斜長石・単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物などからなる。安山岩礫間を埋めるマトリクスには、斜長石・斜方輝石・単斜輝石・綠色普通角閃石・酸化角閃石・不透明鉱物などが含まれる。

### 山口軽石凝灰岩試料（岩石名：火山礫凝灰岩）（図版25）

肉眼では、最大34mmの安山岩角礫から主に構成される。硬質な角礫は暗灰色で、軟質な角礫は白色・灰色・暗灰色・黄灰色・褐色・赤褐色など多様な色調の火山礫から構成される。発泡している粒子が含まれるが、発泡は不良である。鉱物粒子は、最大は長さ6mm幅3mm、自形の柱状～長柱状の緑黒色を呈する単斜輝石が多く、無色の斜長石自形結晶などがみられる。

顕微鏡下では、粒子の多くは安山岩から構成され、まれに流紋岩～デイサイトを含む。安山岩は、気泡が小さくまばらな発泡不良の安山岩を含むが、発泡していないものが多い。安山岩の斑晶は、単斜輝石・斜方輝石・斜長石・不透明鉱物を普通に含み、普通角閃石を少量伴う。単斜輝石・斜方輝石は平行連晶を示すことがある。単斜輝石・斜方輝石・斜長石・不透明鉱物などは集団状を呈する。石基は、ガラス・斜長石・単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物などから構成される。

流紋岩～デイサイトは、変質して緑簾石が生じた斜長石斑晶や融食を示す石英斑晶を伴う。石基は流状組織を示し、カリウム染色反応を示す岩片と示さない岩片とが混在し、脱ガラス作用がおよんでいる。変質鉱物として緑簾石・緑泥石が生じている。これらの流紋岩～デイサイトは、山口軽石凝灰岩の形成以前に噴出した馬場溶結凝灰岩あるいは大平溶結凝灰岩など小橋山火山岩に由来する異質岩片と考えられる。

## 電構築する石材の採石場所の推定

以上の記述の通り、竈を構築する加工石材と山口軽石凝灰岩の岩質は類似性が高い。一方、笛吹川扇状地に面した山麓斜面には窪平泥流堆積物の分布も広く知られている。窪平泥流堆積物は、模式地である窪平西北西約1kmの鼓川右岸発電所裏の急崖露頭では、暗灰色の片山溶岩を主要な構成岩片とする固結度の進んだ泥流堆積物である（写真3）。窪平泥流堆積物の岩片は、摩耗が進み岩片の角が丸みを帯びているものが多いが、風化はあまり進んでおらず露頭面に岩片が突出していることから、石材として表面を平滑に削平することは困難と思われる。これに対し、露頭での山口軽石凝灰岩は、風化した露頭面に突出した岩片は極めてわずかで全体として塊状に露

出する（写真4）。成層構造は明瞭に認められるが、露頭全体が塊状であり、適度に風化して軟質ではあるが強さもあることから加工調整しやすい石材として利用された可能性が高いと推定される。本遺跡ばかりでなく、同じ笛吹川扇状地上の甲州市五反田遺跡、あるいは金川扇状地上の笛吹市二之宮遺跡、大原遺跡などで同様の石材が出土しているとされる。これらの遺跡は山口軽石凝灰岩の分布から数km以内に位置していることから、山梨市から笛吹市・甲州市にかけて山口軽石凝灰岩の分布域で採石された可能性が推定される。今後、遺跡からの出土事例の増加や、採石造構などが検出されれば、地域的な石材利用の実態がさらに解明できるものと考えられる。

#### 文献

三村弘二・加藤祐三・片田正人（1984）「御岳昇仙峠地域の地質」地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、61頁。

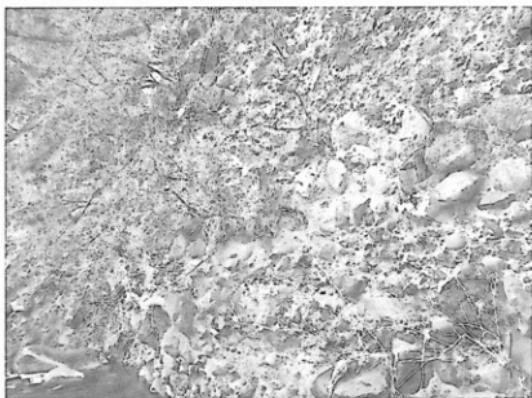


写真3 壅平泥流堆植物の露頭（山梨市鼓川右岸発電所付近）



写真4 山口軽石凝灰岩の露頭（山梨市矢坪永昌院付近）

## 第5章 総括

今回の間之田東遺跡の調査では、疊層面に挟まれた旧流路の中洲状の砂地面上に平安時代、10世紀前半代の堅穴住居2軒、溝のほか、中世の円形土坑群が検出された。主に平安時代と中世の2時期に限定的であるが、それらの調査成果について総括しておきたい。

まず本地域で10世紀前半代の住居が存在するのは、この時期に笛吹川の旧氾濫原域がようやく居住地域としての土地利用が可能になったことを意味するが、これは正徳寺地城が一時的にせよ居住可能となり、地盤が安定的になったと考えられ、笛吹川の流路が浸食で下がったか、あるいは固定化したことが想定できる。ただ、笛吹川河床面が大幅に下刻した状況はないので、「延喜式」(延長5年 927年成立)にみる「堤防料二万束」が、仮に笛吹川の築堤向けだとすると、時代的にも集落の出現と関連すると思われ、興味深い現象といえる。

山梨市正徳寺周辺地域では、比較的遺跡調査例が少ないものの、古代甲斐国府、寺本麻寺がある笛吹市春日町地内に隣接した笛吹川右岸地域にあたり、近年調査例が増えつつある。縄文時代の遺跡は希薄で、弥生末～古墳前期に集落の萌芽があり、古墳時代後期から奈良時代にかけてピークがあると考えられる。また平安時代にも引き続き集落が分布し、とくに平安時代末の11世紀には大きなピークがあることが近年の調査成果で判明しつつある。笛吹川の流路変遷過程についての研究成果がないため、遺跡分布と照らし合わせて考察することが難しいが、旧流路を避けるようにして山際や微高地に上に集落遺跡が分布する傾向にある中で、本遺跡に住居が進出したのは、10世紀前半代の時代的な事情を受けてのことと考えられる。すなわち、この時期には八ヶ岳、富士山等の山麓では開拓的な集落が広がり、標高1000m近い山中に山寺が出現するなど開発が大きく進んだ時期で、人々が山間地の開発に向かう一方、低地の旧氾濫原開発にも大きな関心が寄せられたのではないだろうか。

遺構の調査からは開発に関する直接的な資料は見いだせなかつたが、ひとつには1号溝をはさんだ住居配置、という単純な集落のあり方が示唆的である。この一帯は表層での条里地割が不明確な地域で、おそらく笛吹市国府あたりと同様な条里地割、または北側の八幡条里の分布範囲としての広がりが想定できるものの、条里に関する検討はなされていない。数度に渡り施行されたと考えられる条里地割の多くは埋没条里として地下に存在し、現地表面の区画方向とは異なるものであったと考えられるが、1号溝は10世紀前半例を示す条里地割の事例とみることができよう。溝は具体的には耕地や集落を限るものであったと考えられるが、発見された2軒の堅穴住居の向きはおおむね溝方向と一致している。なお、調査前に存在した畑の区画が溝方向とほぼ一致し、30m四方の方形の区画となることは注意される(図3)。また周囲にいくつかの同じ方向を示す方形の畑が存在する(図2参照)、この調査区付近の区画(表層条里)は平安時代に遡る可能性があるかもしれない。

平安時代の竈で最も興味を惹いたのは、竈構材としての加工石材である。非常に珍しいもので、管見によれば、未報告を含め山梨県内で以下の3遺跡に類例が存在するのみである(ただし、大原・二之宮例は実見していない)。

笛吹市石和町 大原遺跡 (15点出土しているが出土位置等の詳細は不明。)

笛吹市御坂町 二ノ宮遺跡21号住(保坂康夫氏ご教示による。報告書には図はない。)

甲州市塩山 五反田遺跡 (未報告。30・43・48号住の竈袖等に使用。計4点以上出土。)

甲府盆地でも東半分の地域で点在するように出土している(図4)。本遺跡を除き、いずれもいわゆる大規模遺跡からの出土である。従来、それらは「焼成粘土柱」として取り上げられ、粘土を柱状にしたものを焼成した製品とみなして疑うことがなかったが、今回、河西学氏の分析により土製品ではなく石製品であろうという見解を得(第4章第3節)、「加工石材」として改めて見直すこととなった。

本遺跡では1号住で1点、2号住で4点の計5点が竈袖石および天井材として出土した。それらは形状により2類に分類される。

加工石材A類 断面は不整形で、表裏2面にチョウナ痕をもち、側面を粗削り面としたもの。

加工石材B類 断面は長方形で、各面を削りにより滑らかに整形し、全体的に丁寧に仕上げる。

加工石材A類とB類は、工人や製作地の違いを反映し、それぞれ異なる工程による製作とみる見方ができる一

方、B類の工程のうち仕上げ工程を省略したのがA類の可能性もある。つまり、一連の製作工程を推定を交え以下のように想定したい。

- ①採取石材の選定（露頭か転石）。
- ②石材の切り出しのため、直線的な溝を入れる。
- ③割る（石材を折って切り取る）。
- ④チョウナにより各面を平らに粗く整える。
- ⑤各面を削りにより滑らかにする（角も面取りする）。

④のち⑤の工程を経たという確認はなく、③から⑤という過程も想定可能だが、ここではA類は④の途中、B類は⑤まで完了した姿ではなかったかと考えておく。

個人的な好みで、個人が竈に使うために採石、加工した、という状況は考えにくく、またチョウナ痕や削りの状況をみると木材加工に似た技術で石材加工が行われていること、幅や厚みに規格性を認めうことから、専門の工人によって採石、加工あるいは出荷まで行われていた、と考えておきたい。

河西氏の分析によれば石質は火山礫凝灰岩で、遺跡周辺では矢坪の永昌院の裏手から八幡地区の北西側にかけて広がる山口輕石凝灰岩が類似することから、その露頭で採石が行われたのではないか、という指摘を受けた。図4が火山礫凝灰岩分布範囲と本遺跡を含めた4遺跡の位置図である。地質図（地質調査所1984）によれば、石材そのものは春日居方面から山梨市牧丘町にかけて、広範囲に分布している。ただし本遺跡からであれば約900mの距離にある山梨市万力の靈岩寺周辺の露頭が最も近く、採取しやすい。ほかの3遺跡の事例は石材観察を実施していないので、果たして全てが火山礫凝灰岩かどうかわからないが、同じ石材と仮定すると、一元的に万力付近で採石加工されたのか、あるいは多元的に行われていたのかという課題もある。

竈の構築材としてわざわざ加工石材を用いたのはなぜか。これまでに多数の平安時代の集落が調査されている中で、加工石材が竈構築材以外の用途で出土した例はないので、火山礫凝灰岩製の加工石材は竈構築材として採石、加工、流通したことが想定される。石がまったく得られない地域であれば、竈用の石材が製品としての流通の可能性は十分考えられるが、集落の周囲に多数の礫がありながら、しかも同じ竈で自然礫を多数使っている中で、なぜ部分的に加工石材が用いられたのだろうか。

加工石材が用いられた場所は、竈袖石、天井の一部であり、これらは竈正面あるいは上面にあたり、露出した部分として人目に付く場所であったと思われる。そうした部分にのみ加工石材を用いたのではないか。この火山礫凝灰岩は軟質で、加工しやすいことに加え、耐熱性の面でも優れていたのであろう。また竈の構築材を組む上で組みやすいといえる。ただし、使用された住居はいずれもごく通常サイズで、住居の格の高さが感じられないことから、加工石材が用いられているからといって住居の社会的な特殊性はなかったと思われる。

時期については、参考事例が二ノ宮遺跡21号住および大原遺跡W179号住のみではあるが、前者が間之田東遺跡とほぼ同じで10世紀前半、後者は同時期かや古手（9世紀第4四半期）かと思われる。また未報告ながら五反田遺跡では竈が隅に寄った段階で、10世紀前半～中葉である。したがって時期的には10世紀前半に限定的といえ、一時的な短期間に甲府盆地東半を中心として地域的にみられた現象といえる。10世紀前半代の石造物についてはあまり事例を知らないが、兜山の岩場に穿たれた岩屋は10世紀前半代と推定されるなど、石材加工の萌芽期といえるかもしれない。

竈の加工石材については、長野県御代田町前田遺跡、十二遺跡、根岸遺跡で浅間山麓の軽石を加工して竈構築材とした例が知られている。前田遺跡（御代田町1987）では第IV期（8世紀第1四半期）～第VII期（8世紀第4四半期～9世紀初頭）に遺跡内に存在する追分火山灰流層中の軽石を用い、最前列の袖石にL状に面取りした石材、その他の袖石、天井石には直方体状に加工した石材を用い、支脚石には長楕円形の河床礫を用いるという。また加工した軽石の初現例に、第II期（古墳時代中期末）例が1例ある。十二遺跡ではほぼ全時期（8世紀第1四半期～9世紀後葉）に基盤層の第1軽石流層中にある軽石を面取り加工したもの多用し、袖石前方部にL状の軽石、そのほかには直方体状の軽石を用いる。また支脚石には角錐状に面取りされた軽石を用いている。根岸遺跡でも十二遺跡と同様の記載がある。このように浅間山麓の奈良平安時代の集落では、集落内で採取できる

軽石を用いて加工石材が調達された状況がわかり、その加工や竈構築には一定の形式があることから、集落の住民による自由な製作というよりは職人集団が関わっていたとみてよいだろう。ただし浅間山麓の軽石利用という地域性が色濃いこと、山梨県域の事例に先駆けていること、使用率が高いなど、山梨県域への直接的な影響があったとは考えにくい。加工石材については、山梨市域を中心に今後の資料増加を待ちたい。

さて、平安時代とともに本遺跡では中世土坑群の存在が注目されるが、人骨が出土していないものの、土坑の形態から墓坑と推定される。土坑内外からわずかに出土した土師質土器皿の形態によれば、時期は近世以前、中世末と考えられ、16世紀末を推定したい。付近から出土した五輪塔の各部材をみると、とくに火輪が扁平化した形態は、土師質土器と同時期の所産といえる。同時期の集落域がどこにあったかわからないものの、集落のはずれに墓域があった状況を想定できる。また土坑群が比較的短時期で収束した状況が認められるが、この点については調査区西南に位置する聖徳寺の「正徳寺由緒書草稿」(宝永2年 1705)の記載が注目される。すなわち「百年以前満水ニ寺住持由緒共ニ流損退転仕」とあることから、慶長10年(1605)以前にこの一帯では伽藍を流失する大水害があったということがわかるが、『甲斐国志』によれば天正11年(1583)のことと推測できる(第2章第2節)。本遺跡の土器の年代観が明確ではないため、出土遺物からの検証は難しいが、近世以前の大水害により中世の景観が失われたのではないだろうか。溝の上層を埋める礫群形成は、この際に流れ込んだ可能性を考えておきたい。五輪塔は、土坑群を中心とした墓域の一角に本来あって、土坑群に埋葬された人々とは区別された墓地に伴うものであったと思われる。なお、五輪塔に関して注意しておきたいのは、地輪を砥石に転用した例があることで、五輪塔の転用についてはあまり例をみない。また、地輪の凹みは火葬骨埋納孔と思われるが、水輪の凹みについては、大きさから搗き臼的な転用が考えられ、中世末の墓域周辺に、何らかの居住を含めた人間の活動があったことがわかる。なお本遺跡と聖徳寺との関連は不明ではあるが距離的には約150mとごく近い。また調査区近くの集落内にも五輪塔が集められた場所があり(図版17)、この一帯を聖(正)徳寺を中心とした中世の集落・墓域の広がりとして把えることができる。

最後ではあるが、間之田東遺跡の発掘調査から報告書刊行に至るまで、山梨市役所建設課をはじめ、地元正徳寺地内の方々には多大なるご理解、ご協力を賜った。また発掘調査、整理作業に携わった方々、分析等での協力者、ご教示、ご指導いただいた皆様方には感謝し、御礼申し上げたい。

#### 【参考資料】

- 地質調査所(三村弘二・加藤祐三・片田正人) 1984 『御岳昇仙峠地域の地質』  
山梨県教育委員会ほか 1987 『二之宮遺跡』 山梨県埋蔵文化財調査報告 第23集  
御代田町教育委員会 1987 『前田遺跡』  
御代田町教育委員会 1988 『十二遺跡』  
御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』

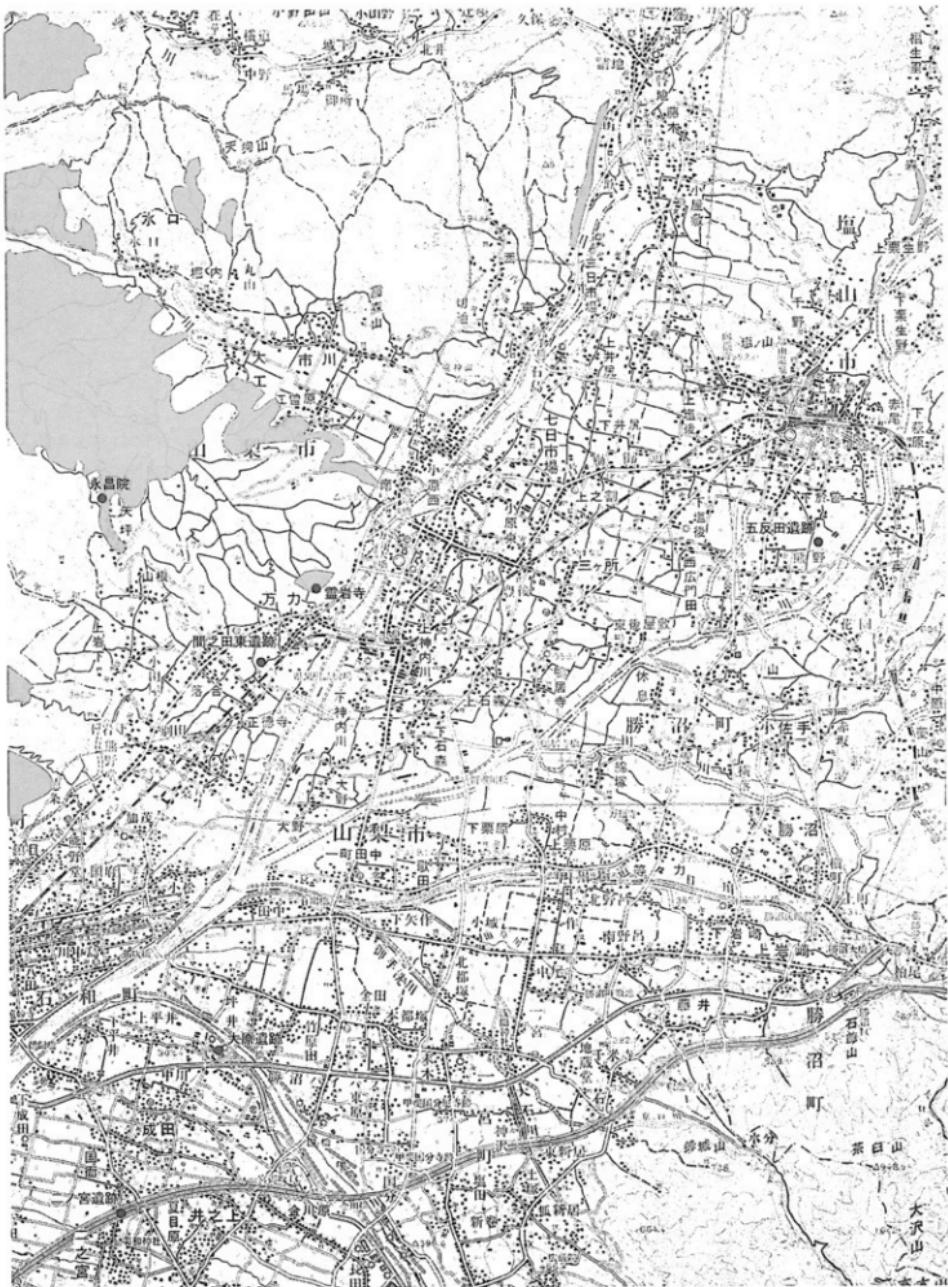


図4 加工石材と山口黒石繊灰岩の分布

0 (1:50000) 2km

表 4 土器類觀察表





図	地名	No.	類別	樹種	樹形	1/100m <sup>2</sup> /面積	樹高	平均分枝点	色調	樹上(最高～最低)	葉(種名・部分名)	葉	花期(令ヨリ初開～終期)	備考
36	篠原外	18	上坡	楓	半球	-/-14.0/-	竹り竹子/無り	熱帯	赤～大、紫	葉	葉	月	15	夏丸2
36	篠原外	19	上坡	楓	半球	(14.0) / -	竹・楓子/無・楓子/	足口	葉	葉	葉	月	400-600	
36	篠原外	20	上坡	楓	半球	16.4) / -	竹・楓子/無・楓子/	足口	葉	葉	葉	月	400-600	
36	篠原外	21	上坡	楓	半球	(17.0) / -	竹・楓子/無・楓子/	足口	葉	葉	葉	月	400-600	
36	篠原外	22	上坡	楓	半球	20.0) / -	楓子/無子/	前半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	260-400	
36	篠原外	23	上坡	楓	半球	(21.0) / -	楓子/無子/	前半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	21	
36	篠原外	24	上坡	楓	半球	(22.0) / -	楓子/無子/	前半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	16-30	
36	篠原外	25	上坡	楓	半球	(23.0) / -	楓子/無子/	後半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	18	
36	篠原外	26	上坡	楓	半球	(24.0) / -	楓子/無子/	後半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	18	
36	篠原外	27	上坡	楓	半球	(25.0) / -	楓子/無子/	後半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	18	
36	篠原外	28	上坡	小葉楓	半球	(11.0) / -	楓子/無子/	後半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	26	
36	篠原外	29	上坡	楓	半球	-/(10.0) / -	楓子/無子/	後半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	26	
36	篠原外	30	上坡	楓	半球	-/(11.0) / -	楓子/無子/	後半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	26	
36	篠原外	31	上坡	董櫟	半球	-/(12.0) / -	楓子/無子/	後半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	19	
36	篠原外	32	上坡	董櫟	半球	-/(13.0) / -	楓子/無子/	後半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	33-34	口櫻葉垂
36	篠原外	33	上坡	董櫟	半球	8.0/4.1/2.1	竹・楓子/無子/	前半葉～引手	葉	葉	葉	月	33-34	
36	篠原外	34	上坡	董櫟	半球	(7.0) / (6.0) / 1.8	竹・楓子/無子/	前半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	400-600	
36	篠原外	35	上坡	董櫟	半球	(9.0) / -	竹・楓子/無子/	前半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	400-700	
36	篠原外	36	上坡	董櫟	半球	(11.0) / -	竹・楓子/無子/	前半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	3-今冬	
36	篠原外	37	上坡	董櫟	半球	(17.0) / -	竹・楓子/無子/	前半葉	葉	葉・赤、葉	葉	月	410-600	

表5 土製品割算表

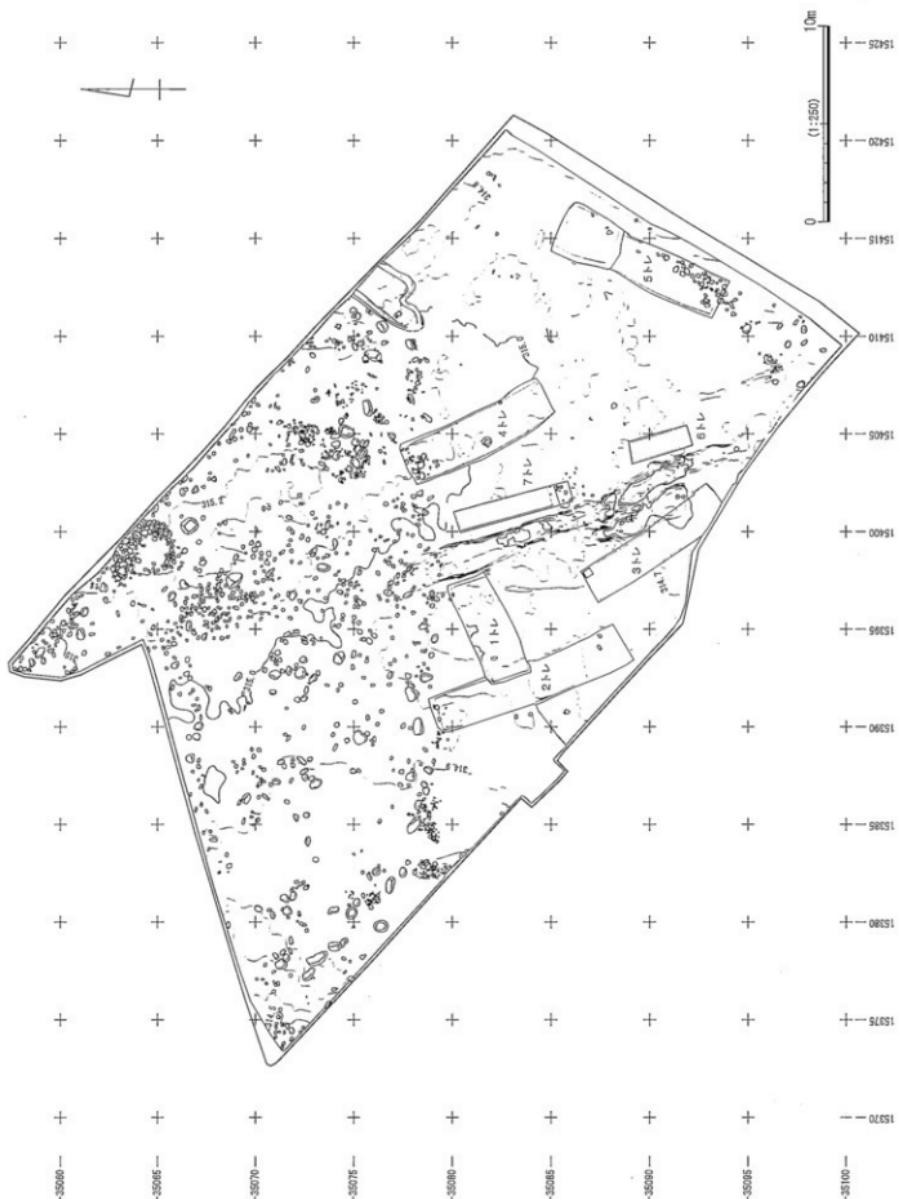
図	地名	No.	類別	樹種	樹形	長/幅/高cm	側面	外/内/底	側面	樹上	枝葉	花期	花さき	花記
28	21	29	赤上	楓	半球	4.0/2.3/0.9	楓子	赤褐色	葉・葉・赤・葉	葉	-	15	21/1644	
28	21	29	赤上	楓	半球	5.5/3.7/0.9	楓子	赤褐色	葉・葉・赤・葉	葉	-	25	21/554	
29	21	29	赤上	楓	半球	6.0/4.2/1.1	楓子	赤褐色	葉・葉・赤・葉	葉	-	19	21/281	
29	21	29	赤上	楓	半球	6.0/4.2/1.1	楓子	赤褐色	葉・葉・赤・葉	葉	-	27	21/204	
28	21	29	赤上	楓	半球	6.0/4.2/1.1	楓子	赤褐色	葉・葉・赤・葉	葉	-	20	21/673	
28	21	29	赤上	楓	半球	7.0/4.8/1.4	楓子	赤褐色	葉・葉・赤・葉	葉	-	15	20	
28	21	29	赤上	楓	半球	7.0/4.8/1.4	楓子	赤褐色	葉・葉・赤・葉	葉	-			

表 6 石製品觀察表

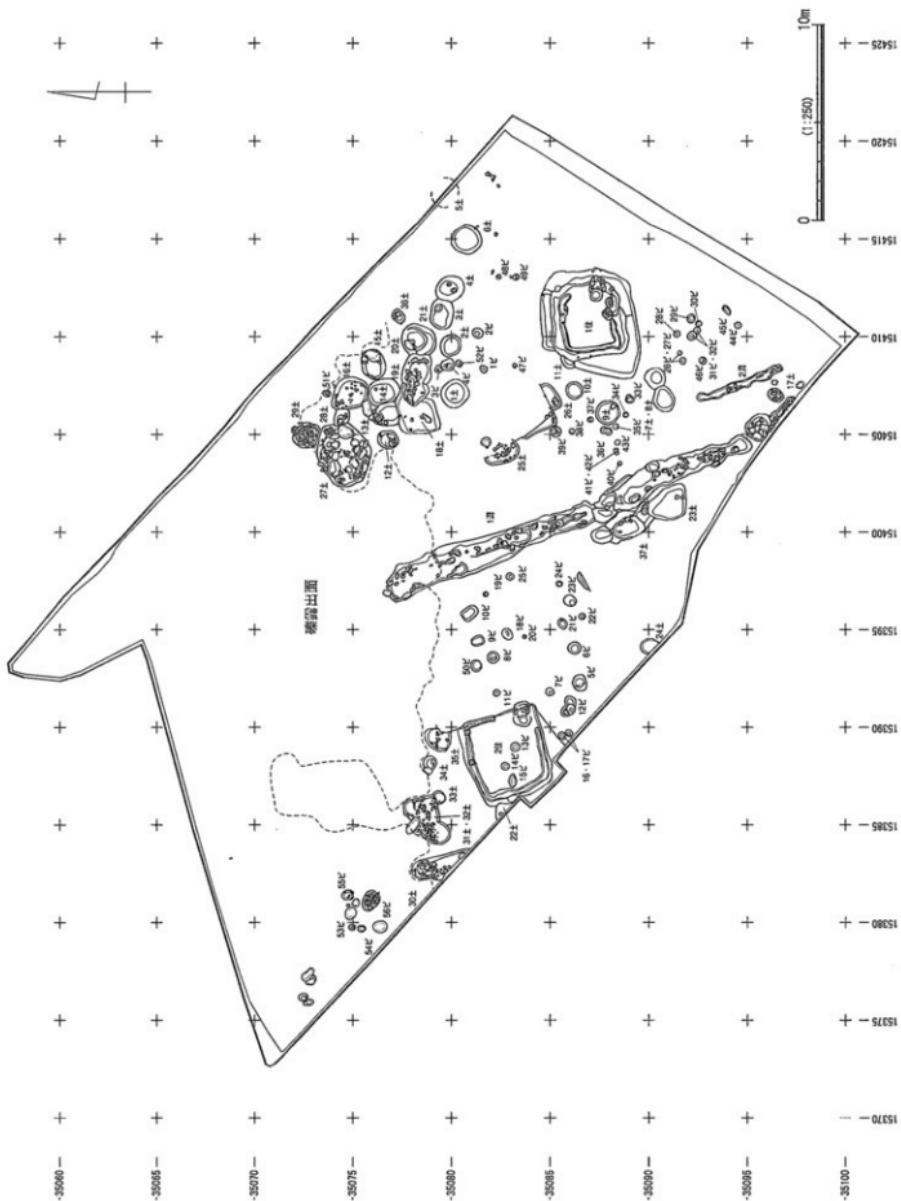
圖	地點	No.	分類	長/寬/厚/cm	kg	石材	色調	性狀
25	1(左)	61	加工石材	24.0/14.7/6.6	3.02	火山岩 火成岩	深紅	(D) 黑728 地石として使用
26	1(右)	64	火成岩	28.6/13.7/10.8	7.5	花崗岩 火成岩	黃白~灰	(D) 黑741 地石として使用
29	2(E)	23	加工石材	23.2/16.4/16.0	6.2	火山岩 火成岩	黃白~灰	(D) 黑731 台帳として使用
29	2(E)	34	加工石材	31.1/16.5/14.5	7.6	火山岩 火成岩	黃白~灰	(D) 黑730 台帳として使用
30	2(E)	25	加工石材	48.4/13.5/10.7	8.18	火山岩 火成岩	黃白~灰	(D) 黑729 天板として使用
30	2(E)	26	加工石材	17.1/13.5/10.7	2.06	火山岩 火成岩	黃	2(D) 黑728 地石として使用
30	2(E)	37	火燒石	19.7/10.9/6.3	2.45	安山岩	黑	2(D) 黑740 地石~地張
31	2(左)	38	火燒石	47.0/41.8/6.8	48.0	安山岩	黑	2(D) 黑747 地石~地張
32	1(B)	16	火燒石	10.7/6.4/4.6	0.44	安山岩	黑	1(D) 黑203 地石~地張
32	1(B)	17	火燒石	10.3/6.4/4.4	0.74	安山岩	黑	1(D) 黑206 地石~地張
32	1(B)	18	火燒石	13.7/13.8/6.2	1.72	花崗岩 火成岩	黃	1(D) 黑205 地石~地張
32	1(B)	19	火燒石	16.9/10.2/6.2	2.6	安山岩 火成岩	黑	1(D) 黑202 地石~地張
32	1(B)	20	火燒石	20.7/11.5/7.0	2.24	安山岩	黑	1(D) 黑216 地石~地張
33	1(B)	21	火燒石	28.0/19.5/7.9	9.4	安山岩	黑	1(D) 黑283 地石~地張
33	1(B)	22	火燒石	20.7/20.0/14.4	7.7	安山岩 火成岩	黑	1(D) 黑284 地石~地張
33	1(B)	23	-	15.0/11.0/6.5	1.1	安山岩	黑	1(D) 黑281 地石~地張
34	22(L)	1	-	(31.0)/9.0/9.0	5.2	安山岩	黑	2(D) 黑156 地石~地張
35	2(B)	39	鐵石	14.0/4.9/2.1	0.13	綠色火成岩	黑	546 地石~地張
37	鐵精外	40	鐵精外	19.5/2.0/13.7	9.1	安山岩	黑	4(D) 黑117 0.88×0.8m
37	鐵精外	41	五輪石	15.7/12.5/12.3	2.28	安山岩	黑	4(D) 黑117 地石~地張
37	鐵精外	42	六角鐵精外	1.1/-/-	1.14	安山岩	黑	4(D) 黑114 地石~地張
37	鐵精外	43	G白石	(14.4)/14.4/6.9	0.6	安山岩	黑	4(D) 黑116 地石~地張
37	鐵精外	44	G白石	(17.3)/17.3/6.4	1.18	安山岩	黑	4(D) 黑115 地石~地張

表 7 金屬製品觀察表

圖	地點	No.	種類	規則	材質	尺寸cm	kg	色調	性狀
25	1(E)	62	掛釘	-	鐵	4.9	1	銀	5.69 (D) 黑164
29	1(B)	63	小形金屬製品	-	鐵	2.1	0.9	銀	0.17 (D) 黑216
34	1(B)	2	掛釘	-	鐵	7.5	1	銀	3.11 (D) 黑584
34	1(B)	3	掛釘	-	鐵	6.18	0.65	銀	3.55 (D) 黑204
34	2(B)	3	小形金屬製品	-	鐵	2.65	1.2	銀	2.68 (D) 黑589
35	27(L)	4	掛釘	-	鐵	5.3	1.1	銀	3.97 (D) 黑211
36	鐵精外	37	掛釘	-	鐵	4.05	0.9	銀	2.04 (D) 黑710
36	鐵精外	37	掛釘	-	鐵	2.4	0.1	銀	0.13 (D) 黑73

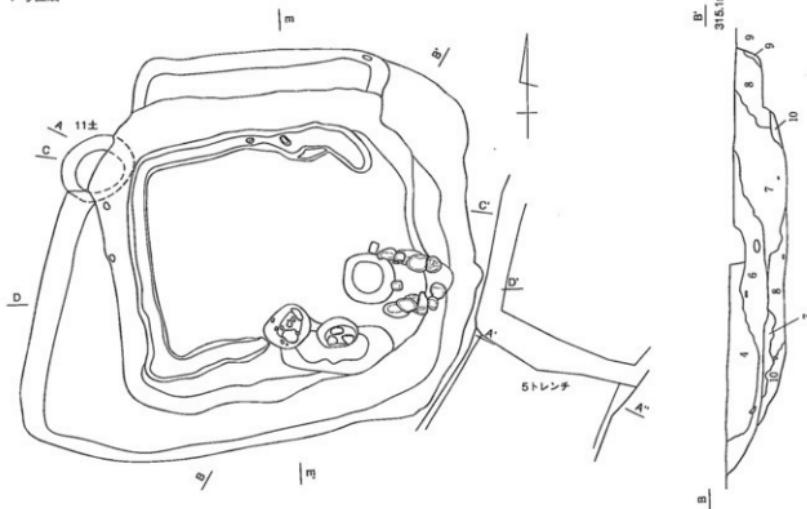


第1図 全体図(等高線図)

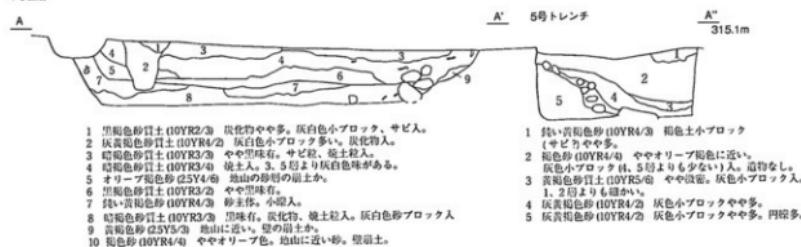


第2図 全体図

## 1号住居

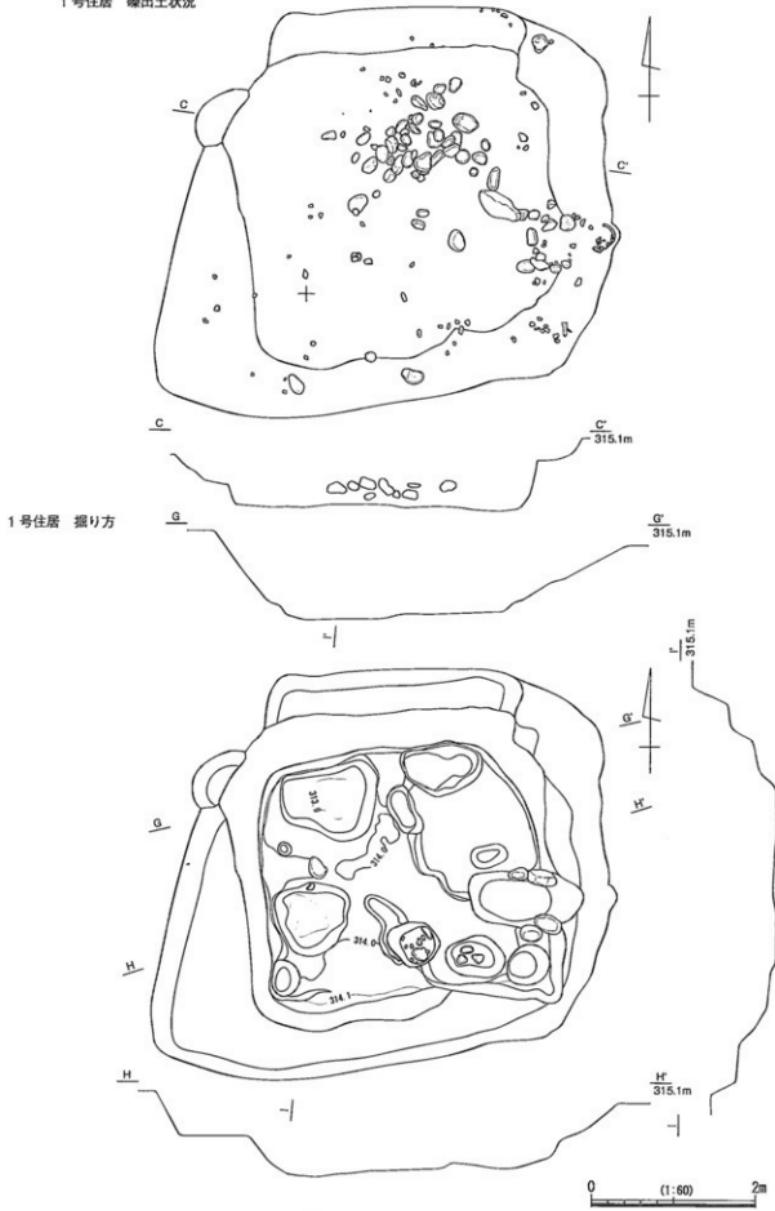


## 1号住居



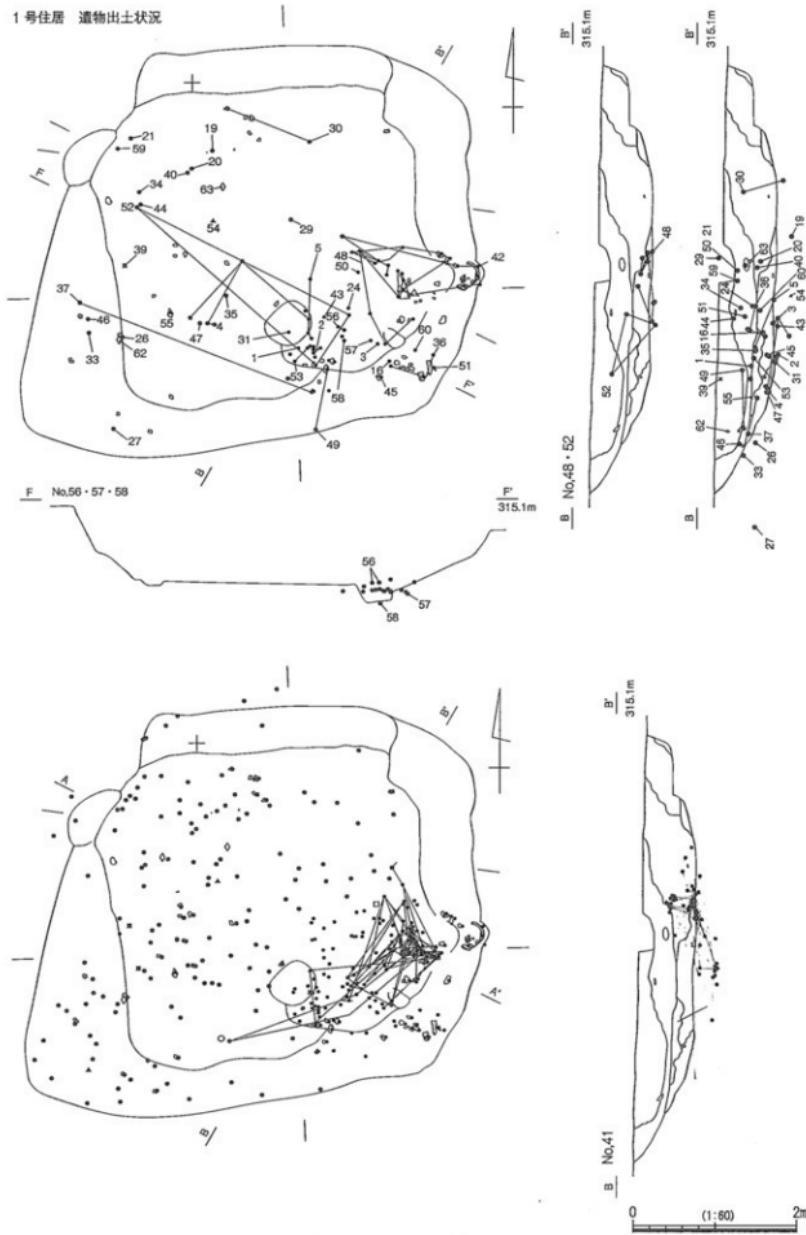
第3図 1号住居(1)遺構

1号住居 墓出土状況

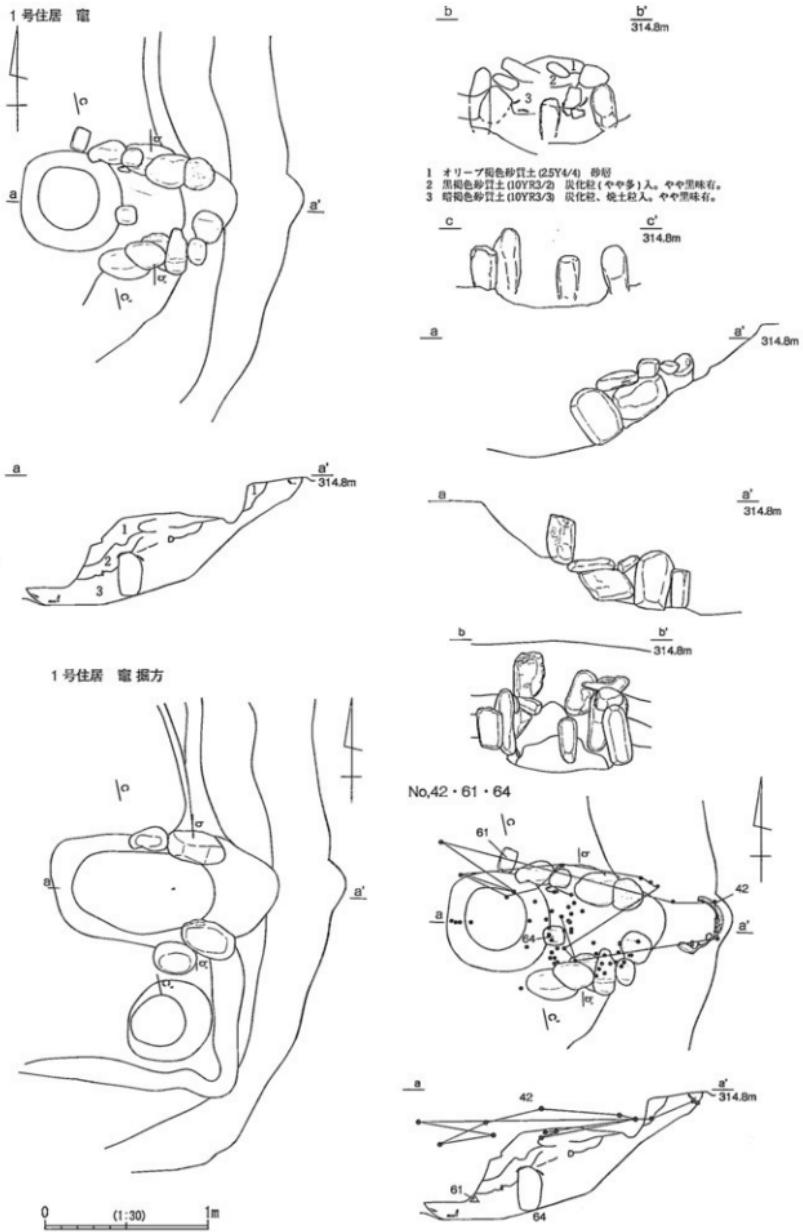


第4図 1号住居(2)遺構

### 1号住居 遺物出土状況

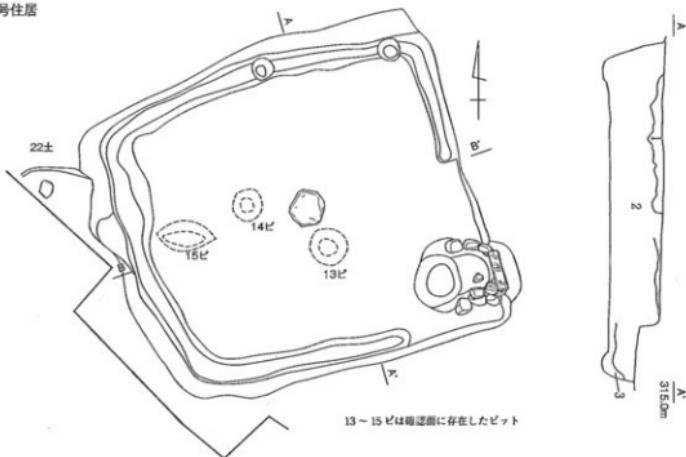


第5図 1号住居(3)遺構



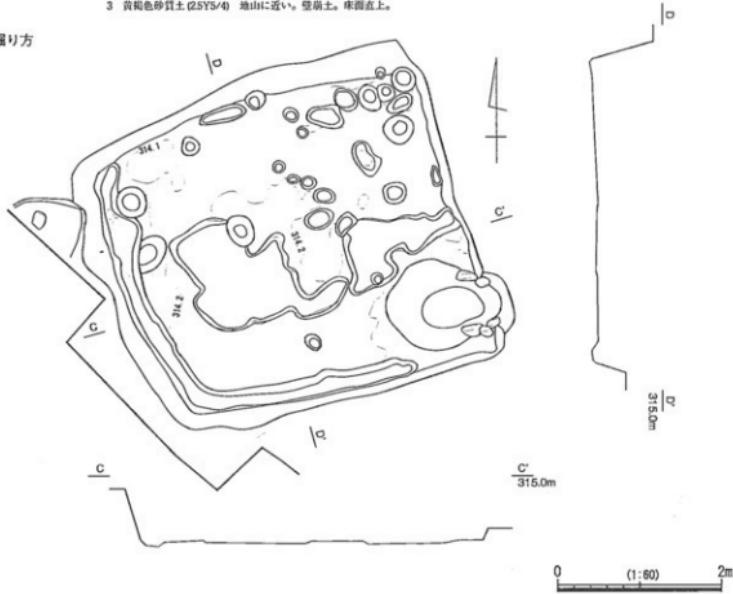
第6図 1号住居(4)遺構

2号住居



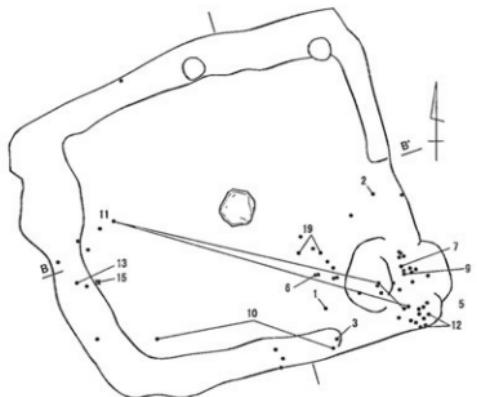
- 1 黄褐色砂質土 (10YR4/3) 黄褐色ブロックを多く含む。
- 2 喀斯特砂質土 (10YR3/4) 砂なし。遺物は少ない。炭化化。後土紅もない。
- 3 黄褐色砂質土 (2YS5/4) 地山に近い。笠原土。床面直上。

2号住居 掘り方



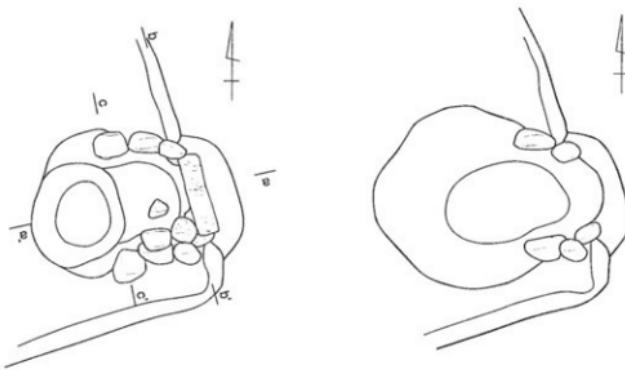
第7図 2号住居(1)遺構

2号住居



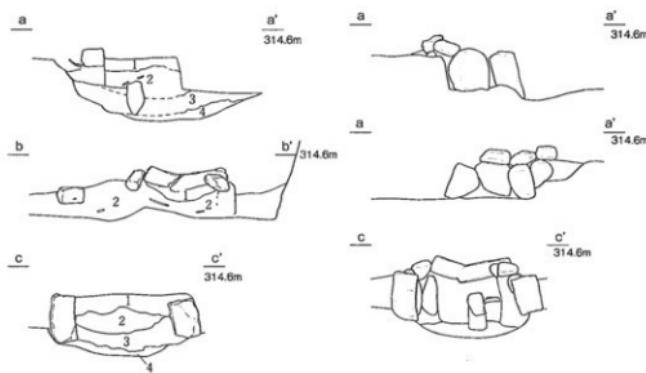
2号住居 室

2号住居竈 摂方



2号住居竈

2号住居竈石見通し図



- 1 オリーブ褐色砂質土(25Y4/4) 塗土粒少々。  
1 薄い黄褐色砂質土(10YR4/2) 炭化物(少々)入。塗土粒入。  
3 明褐色砂質土(10YR3/4) 黄褐色ブロックやや多。  
4 黄褐色砂質土(25Y5/4) 地山と同質。

0 (1:30) 1m

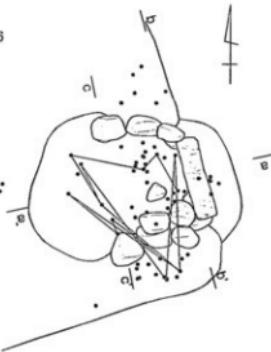
第9図 2号住居(3)遺構

2号住居 窓内遺物出土状況

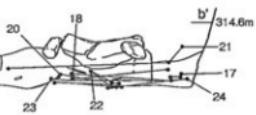
No.17・18・20~24



No.16



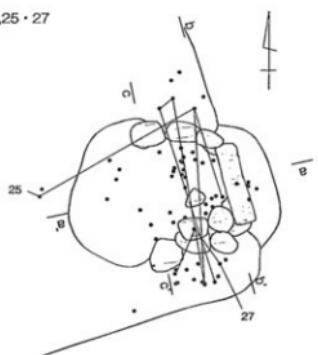
b



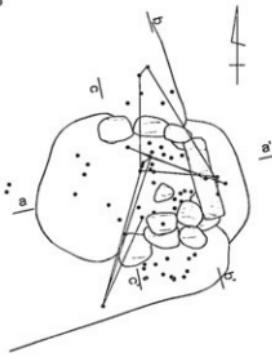
No.16



No.25・27



No.26



b



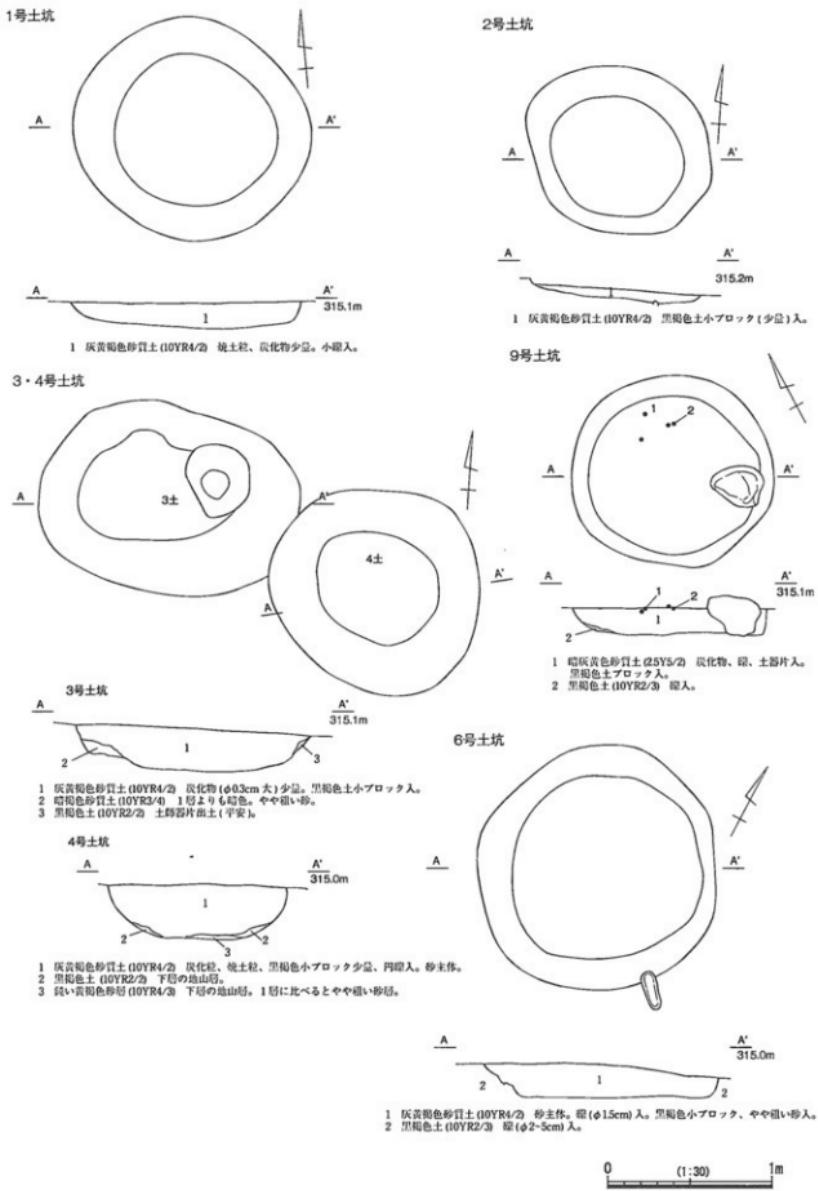
b



0 (1:30) 1m

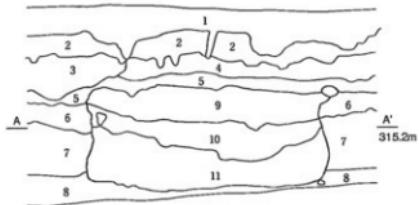
第10図 2号住居(4)遺構





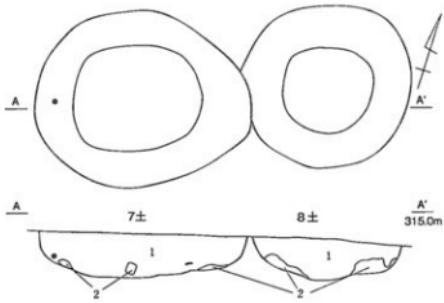
第12図 土坑(1)遺構

## 5号土坑



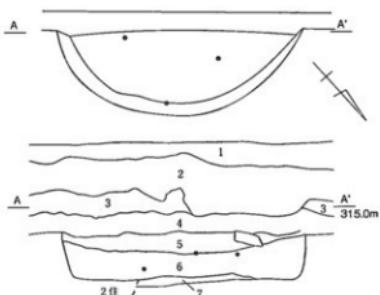
- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 土壌。耕作土。
  - 2 赤褐色土 (5YR4/8) 腐化物 (サビ?) 赤味あり。旧水田止水層か。
  - 3 鈍い黃褐色土 (10YR4/8) 植生 (ビット) 状。
  - 4 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 2層の小プロックを含む。腐化物、小礫 ( $\phi 0.2\text{cm}$ ) 入。
  - 5 黑褐色土 (10YR2/1) 10YR4/2と同質。小礫入。小根入。
  - 6 黑褐色土 (10YR2/1) やや黒い砂質土。小根入。
  - 7 鈍い黄褐色砂質土 (10YR4/2) やや褐色の母岩 (平安の聖土に似る)。
  - 8 黒褐色土 (10YR2/1) 地山の黒色土。砂粒入。堅味強い。
  - 9 鈍い黄褐色砂質土 (10YR4/2) 砂質層。深 ( $\phi 1\text{cm}$ ) 入。
  - 10 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 9層よりも細粒。
  - 11 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 9層と同じ母岩粒。堅や多。黒色小プロック入。
- \* 9~11は中世(?)の土壌段土。

## 7・8号土坑

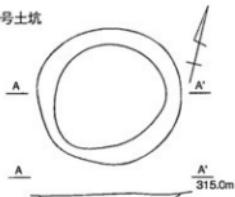


- 7土  
1 細弱色砂質土 (10YR3/8) 2層のプロック入。燒土粒、腐化物層。
- 2 オリーブ褐色砂質土 (10YR4/4) 地山と同質。
- 8土  
1 細弱色砂質土 (10YR3/8) 腐化物 ( $\phi 0.5\text{cm}$ ) 入。サビ (?) 小根入。
- 2 オリーブ褐色砂質土 (10YR4/4) 地山と同質。やや固りすぎを含む。

## 22号土坑

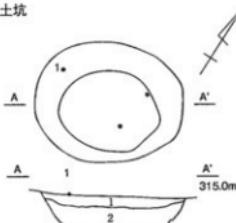


## 10号土坑



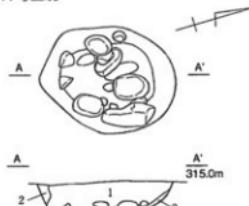
- 1 オリーブ褐色砂質土 (2.5YR4/6) 腐化物、サビ粒、小根入。

## 11号土坑



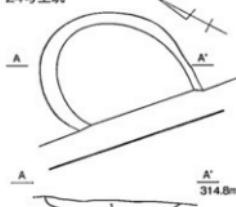
- 1 鈍い黄褐色砂質土 (10YR4/3) 腐化物、灰や多。やや固い砂。サビ巨粒入。
- 2 細弱色砂質土 (10YR3/4) 小根入。

## 17号土坑



- 1 細弱色砂質土 (10YR3/4) 底に侵蝕出。
- 2 鈍い黄褐色砂質土 (10YR4/3) 地山の土と同じ。

## 24号土坑



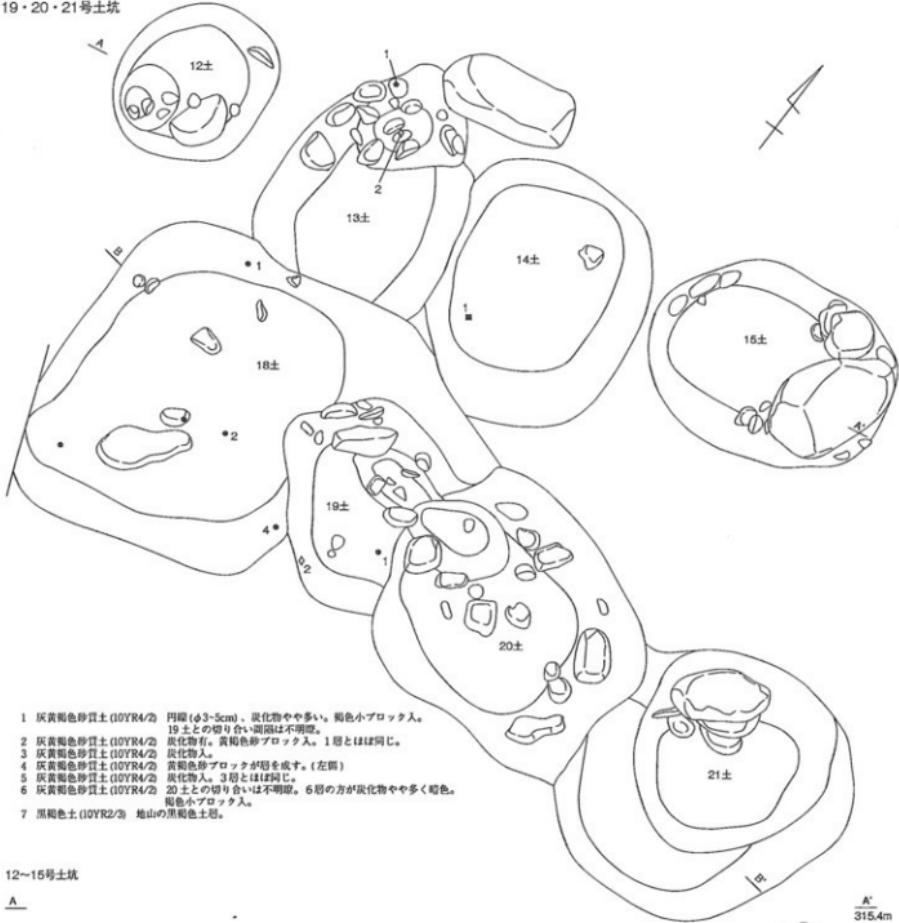
- 1 鈍い黄褐色砂質土 (10YR4/3) 細弱色砂質土中の挿り込み。

- 22土  
1 細弱色土 (10YR3/3) 土壌。耕作土。
- 2 細弱色砂質土 (10YR3/4) 地山。植生なし。
- 3 黑褐色土 (10YR2/2) 2層の小プロックや多。
- 4 鈍い黄褐色砂質土 (10YR4/3) 3層の小プロック入。
- 5 黃褐色砂質土 (10YR4/2) 4層からの泥炭層。苦味が強い。
- 6 黑褐色砂質土 (10YR2/3) 勝浦層。腐葉層や小根入。
- 7 細弱色砂質土 (10YR3/2) 地山に近い地山と6層の場合上)。地山以上。

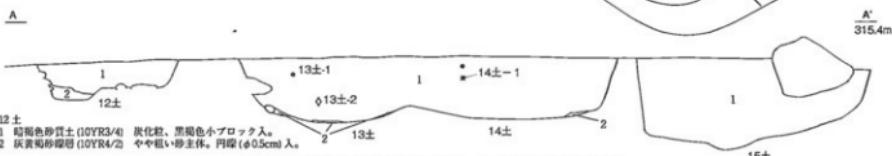
0 (1:30)

第13図 土坑(2)構造

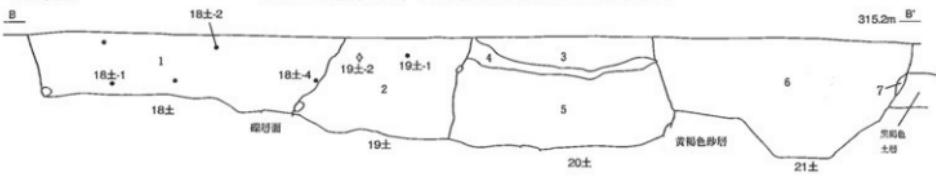
12・13・14・15・  
18・19・20・21号土坑



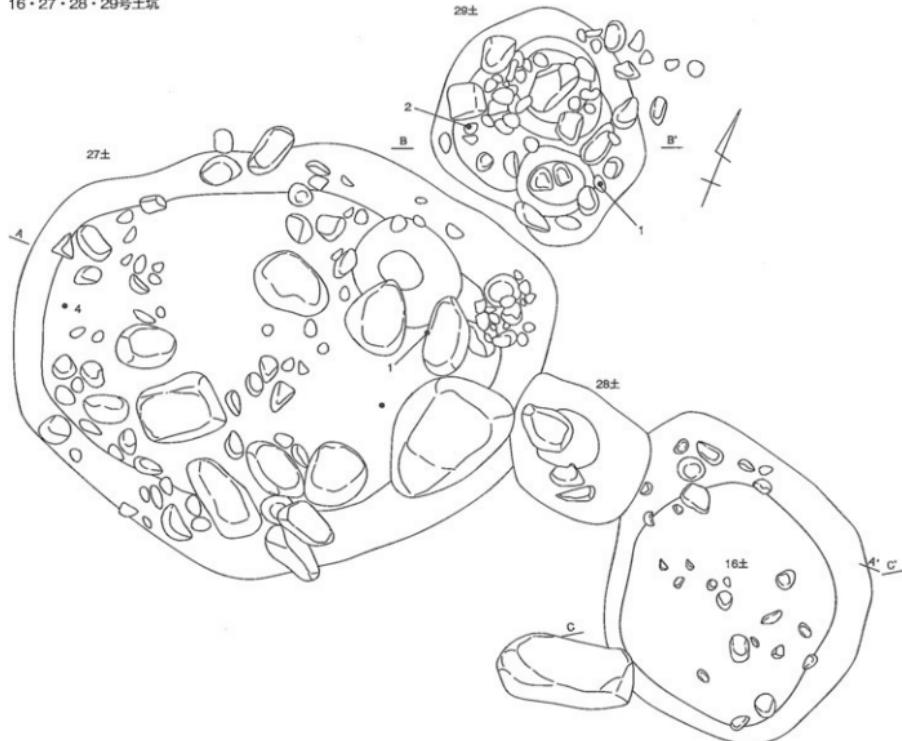
#### 12~15号土坑



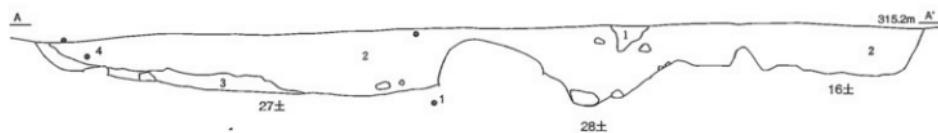
#### 18,19号土坑



第14図 土坑(3)遺構

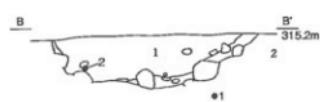


16.27.28号土坑



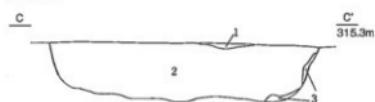
- 1 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 腐化物多。  
2 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 腐化物 ( $\phi 0.4\text{cm}$ ) やや多い。褐色粒、焼土粒、礫入。  
27 土と 28 土との界ははっきりしない。黄褐色土ブロック入。  
3 細い黄褐色砂質土 (10YR4/3) 地山に近い。やや黄味有。下層は微弱面。

29号土坑



- 1 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 斑駁色ブロック入。褐色粒、褐色ブロック入。礫入。  
2 オリーブ褐色砂質土 (2SY4/4) 地山。やや細い黄味ある砂粒。礫多く含む。

16号土坑

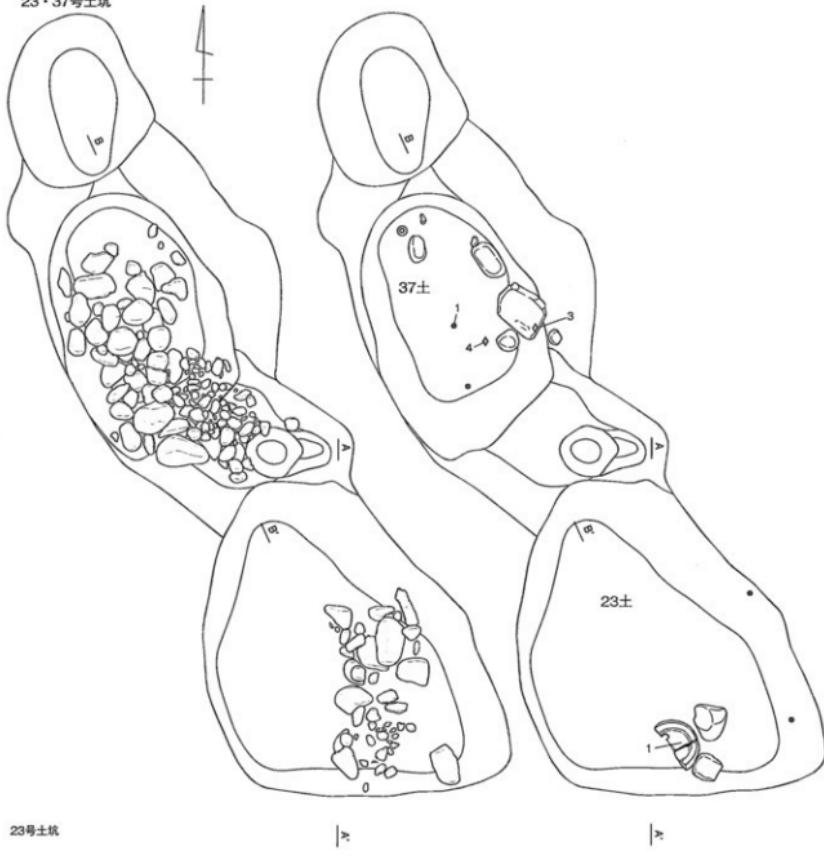


- 1 灰黃褐色土 (10YR4/2)  
2 喀麥色砂質土 (10YR3/4) 腐化物 ( $\phi 0.2\sim0.5\text{cm}$ ) やや多、灰白色砂質小ブロック入。  
3 黄褐色土質 (10YR4/4) 地山と同質。

第15図 土坑(4)遺構

0 (1:30) m

23・37号土坑



23号土坑



1 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 砂小ブロック。サビ入。上層に集石、瓦片混じる。  
2 黄褐色砂質土 (10YR4/3) 砂主作。地山直上。

37号土坑

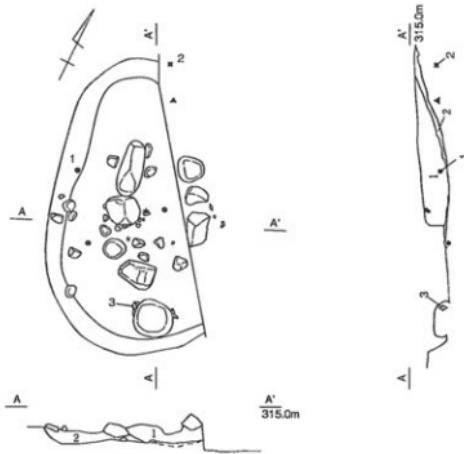


1 黄褐色砂質土 (10YR4/3) やや新しい土 (近現代か)  
2 黄褐色砂質土 (10YR5/2) やや古い物。  
3 黑褐色砂質土 (10YR3/2) 黒褐色サビ (マンガ付) やや多。

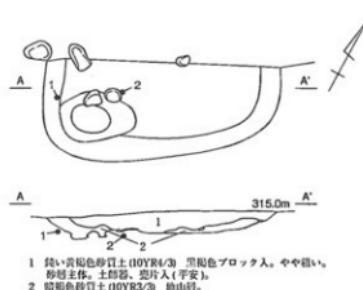
0 (1:30) m

第16図 土坑(5)遺構

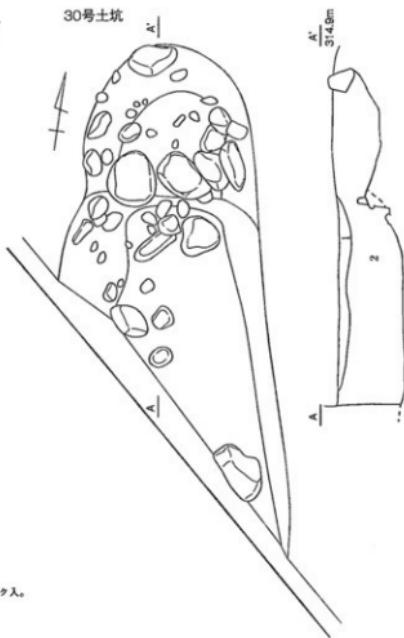
25号土坑



26号土坑



30号土坑



34号土坑



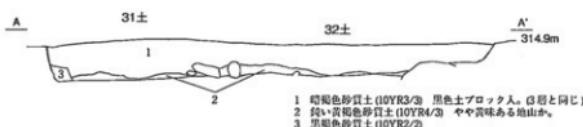
0 (1:30) 1m

第17図 土坑(6)遺構

31・32号土坑



31.32号土坑

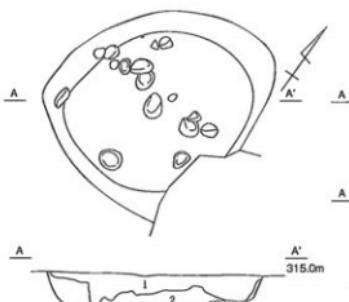


33号土坑



1 黄褐色砂質土 (10YR4/3) 黒色土小ブロック入。  
2 黑褐色砂質土 (10YR2/3) 地山。粗りすぎ。

35号土坑



1 黄褐色砂質土 (10YR4/3) 成化鉱入。  
2 黑褐色砂質土 (10YR2/3) 黑色小ブロック (1層と同質)、やや多。

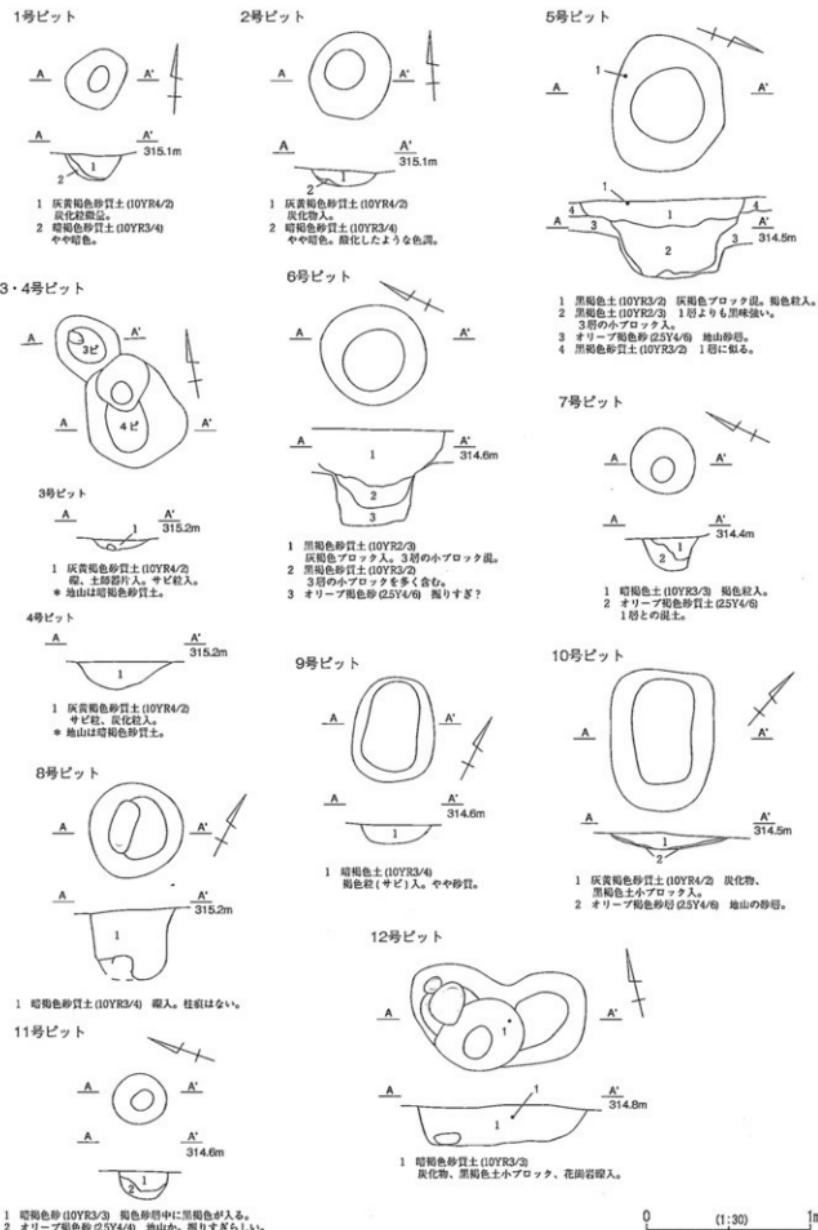
36号土坑



1 黄褐色砂質土 (10YR4/3) 灰白色砂ブロック、黑色小ブロック入。  
成化鉱入。壁上層に有。

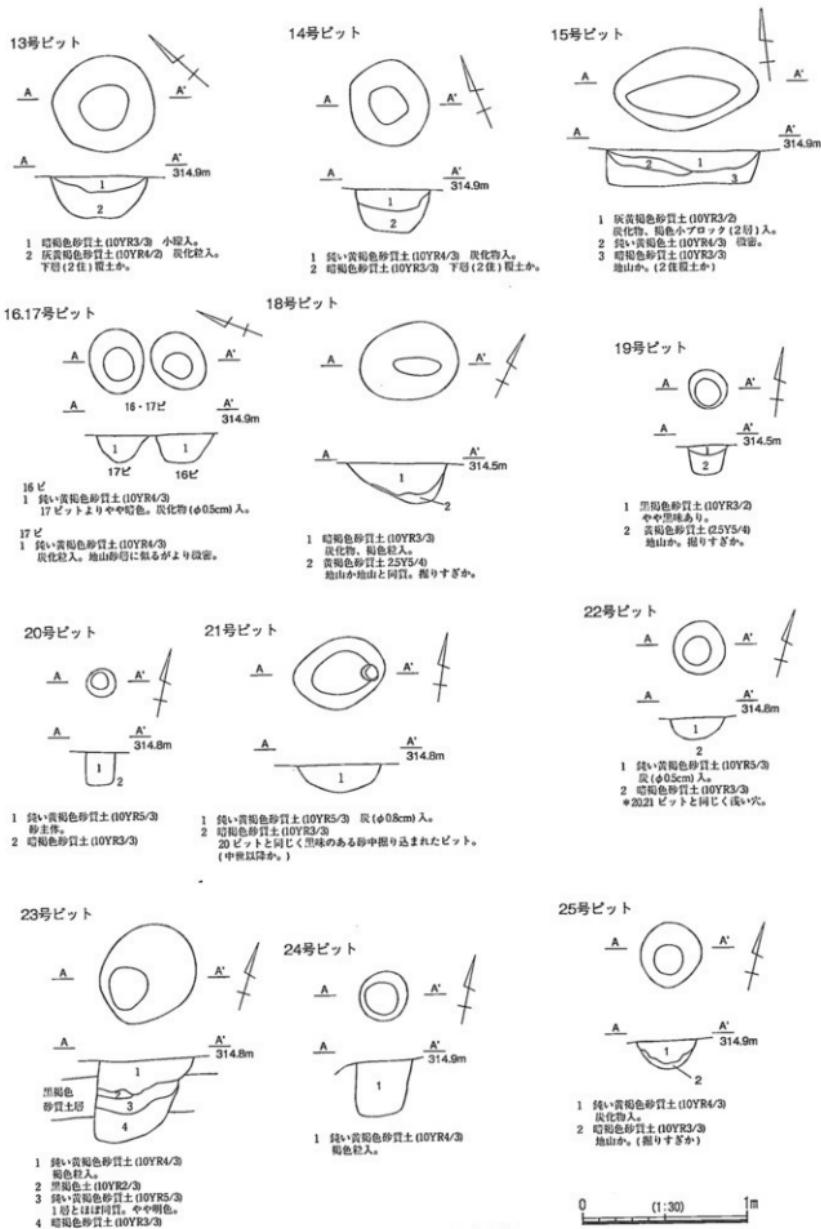


第18図 土坑(7)構造



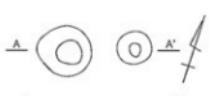
第19図 ピット(1)遺構

0 (1:30) 1m



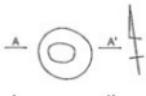
第20図 ピット(2)遺構

26.27号ピット



- 26ピット  
1 淡黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
2 オリーブ褐色砂 (2.5Y4/3) 地山。  
27ピット  
1 淡黄褐色砂質土 (10YR4/2) 黑化粒入。

28号ピット



- 1 淡黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
2 オリーブ褐色砂 (2.5Y4/3) 地山。

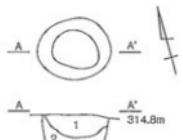
29号ピット



31ピット 32ピット  
314.8m

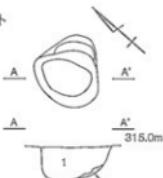
- 1 淡黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
2 黒褐色小ブロック少數入。  
地山。

30号ピット



- 1 淡黄褐色砂質土 (10YR4/2) 砂 (φ0.5cm) 入。  
2 黑褐色砂質土 (10YR3/2) 振りすぎか。

33号ピット



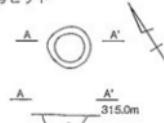
- 1 淡黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
2 オリーブ褐色砂 (2.5Y4/3) 地山。

31.32号ピット



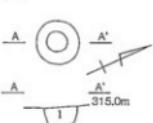
- 31ピット  
1 淡黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
2 黑褐色砂質土 (10YR3/2)  
32ピット  
1 淡黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
地土柱 (黒土柱) 入。

34号ピット



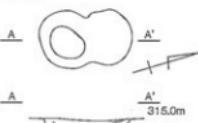
- 1 純い黃褐色砂質土 (10YR4/2)

35号ピット



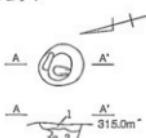
- 1 純い黄褐色砂質土 (10YR4/3)  
枕土柱 (少量) 入。

36号ピット



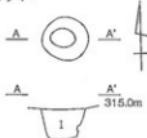
- 1 純い黄褐色砂質土 (10YR4/3)  
灰化粒入。  
2 黑褐色砂質土 (10YR3/2) 振りすぎか。

37号ピット



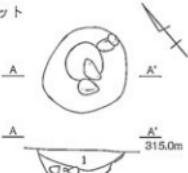
- 1 純い黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
黑褐色小ブロック入。  
2 黑褐色砂質土 (10YR2/3) (振りすぎか)

38号ピット



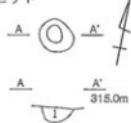
- 1 純い黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
澁粒、サビ入。

39号ピット



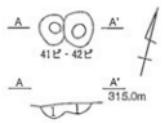
- 1 純い黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
2 黑褐色砂質土 (10YR2/3) (振りすぎか)

40号ピット



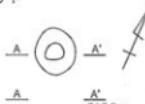
- 1 純い黄褐色砂質土 (10YR4/2)  
周囲は黒褐色砂質土。中盤以降の擾乱状。

4142号ピット



- 1 純い黄褐色砂質土 (10YR4/3)  
中盤以降の擾乱状。

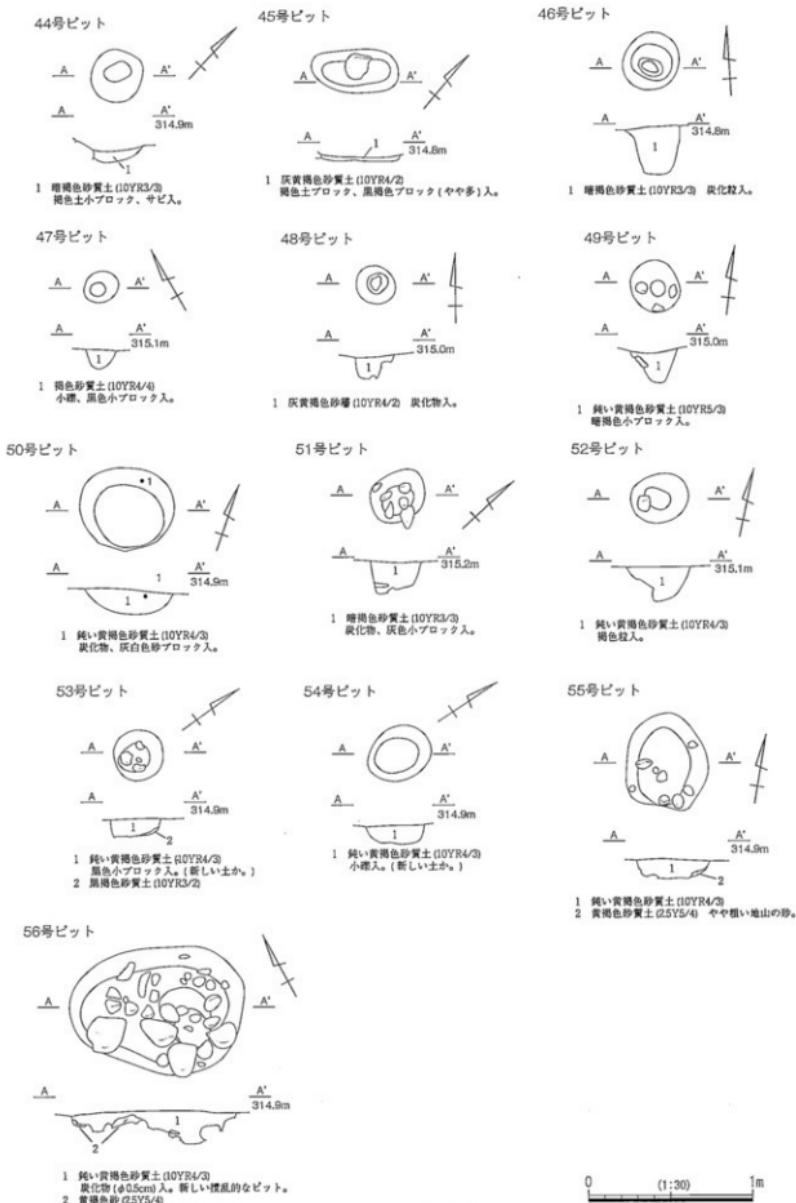
43号ピット



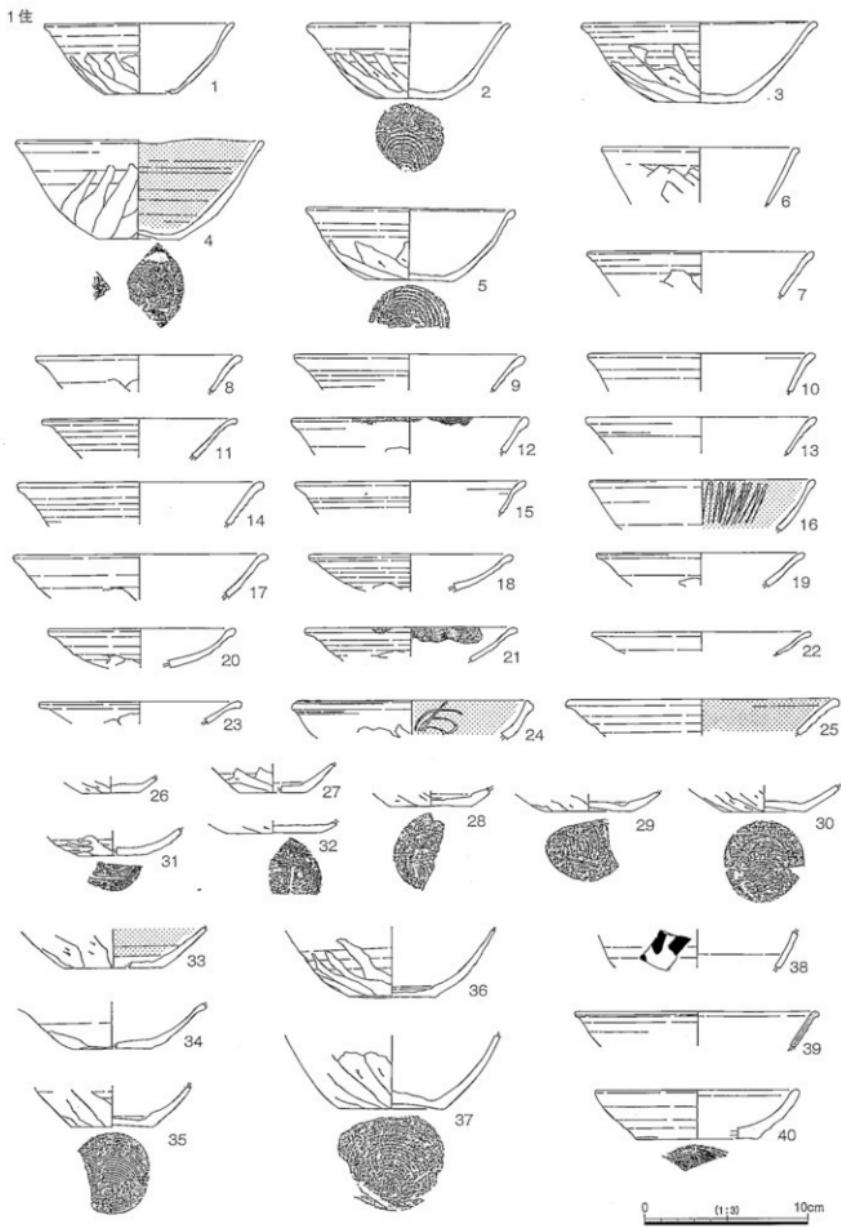
- 1 純い黄褐色砂質土 (10YR4/3)

0 (1:30) m

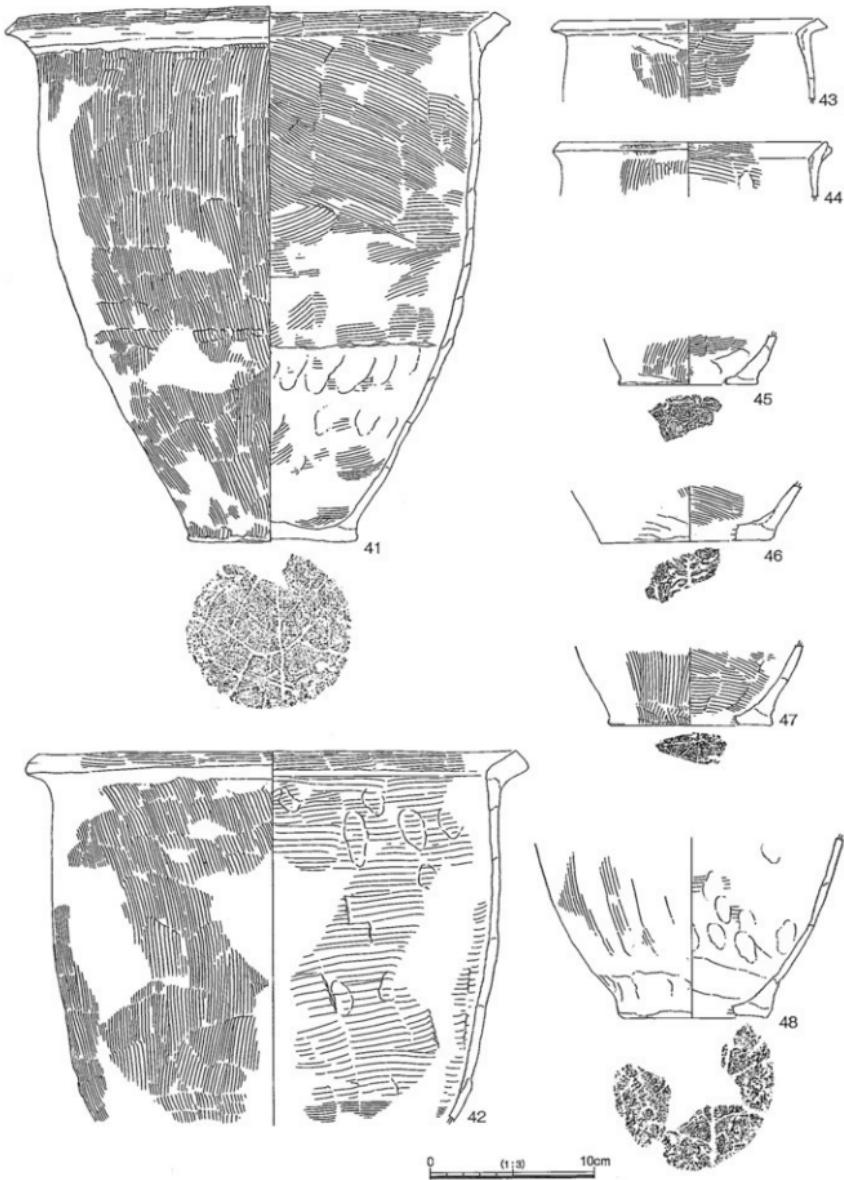
第21図 ピット(3)遺構



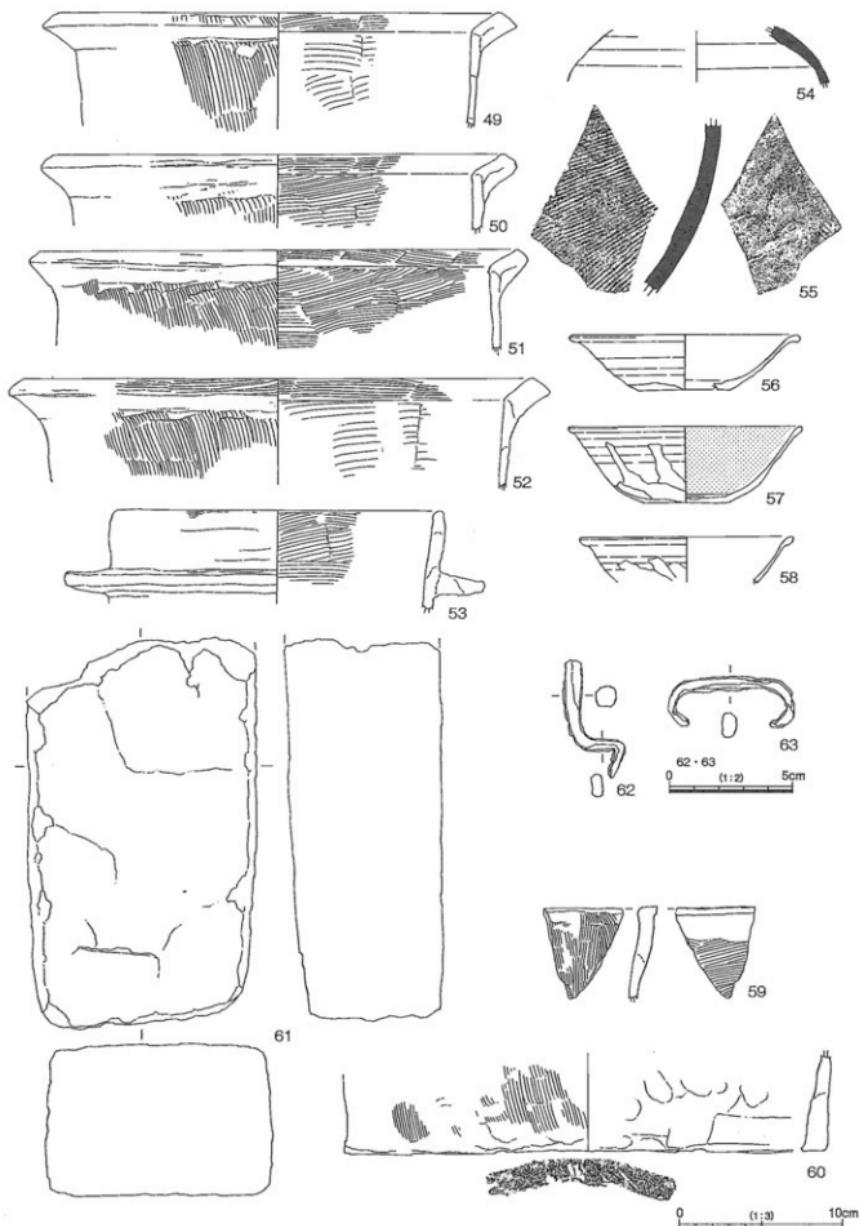
第22図 ピット(4)遺構



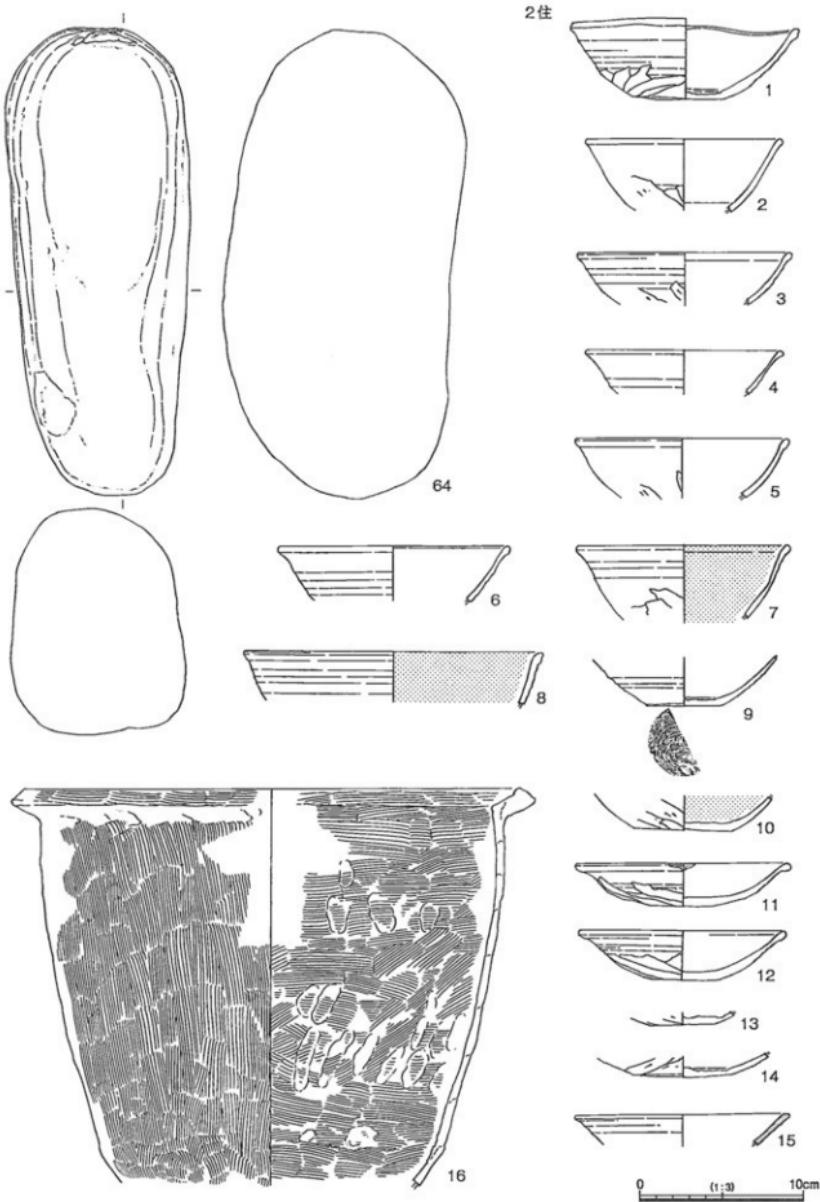
第23図 1号住居(1)遺物



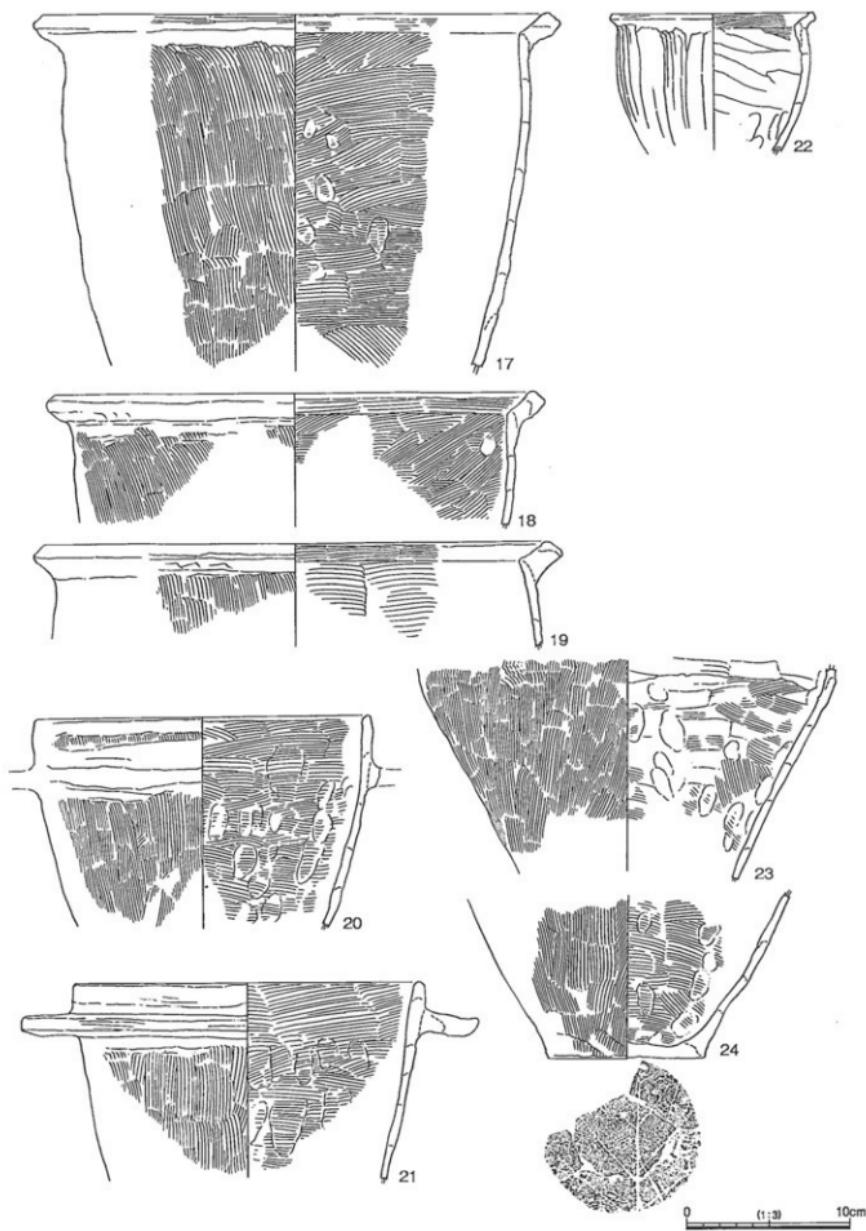
第24図 1号住居(2)遺物



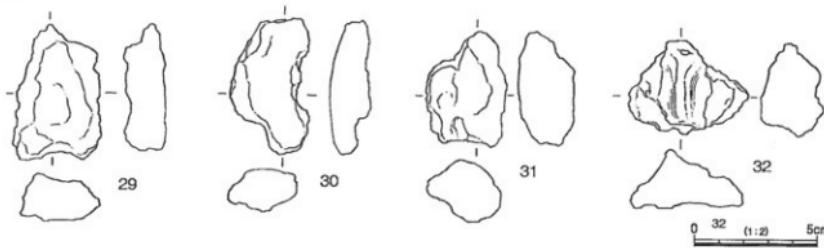
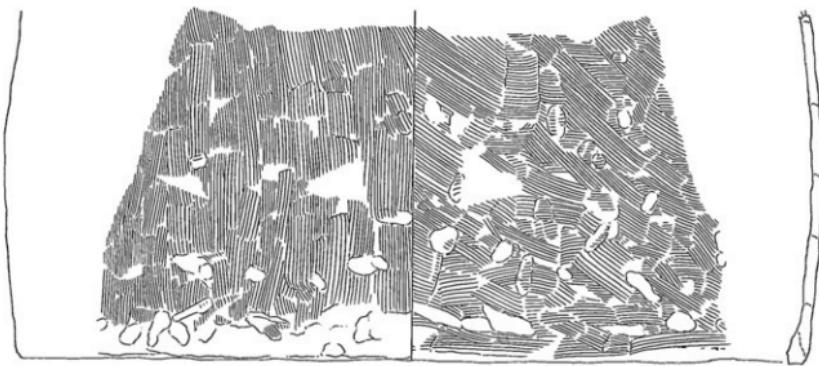
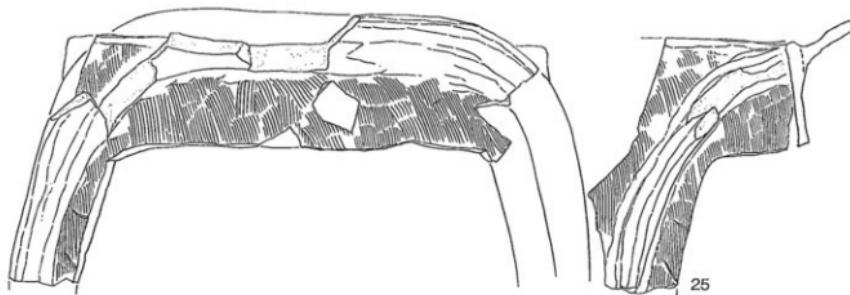
第25図 1号住居(3)遺物



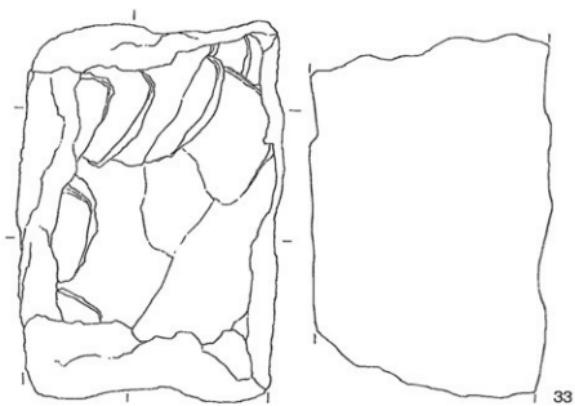
第26図 1号住居(4)・2号住居(1)遺物



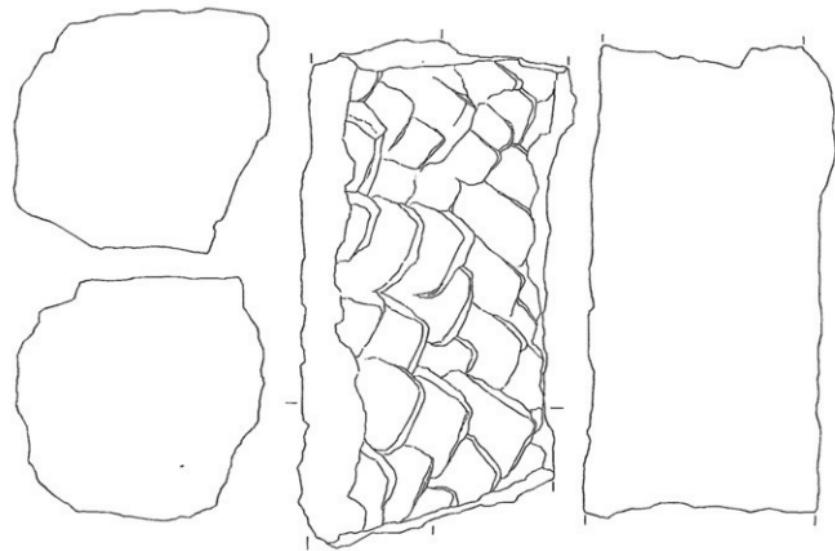
第27図 2号住居(2)遺物



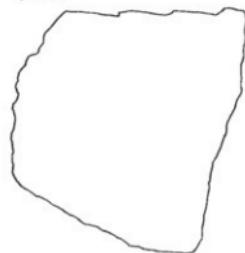
第28図 2号住居(3)遺物



33

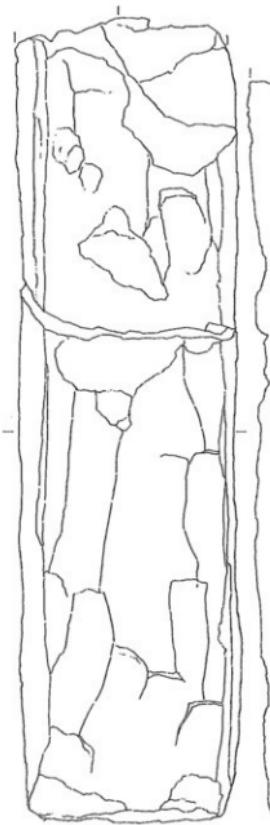


34



0 (1:3) 10cm

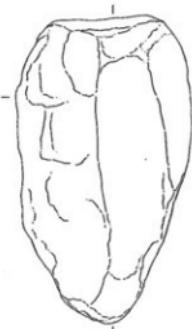
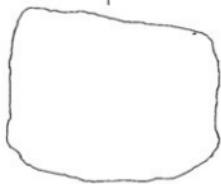
第29図 2号住居(4)遺物



35



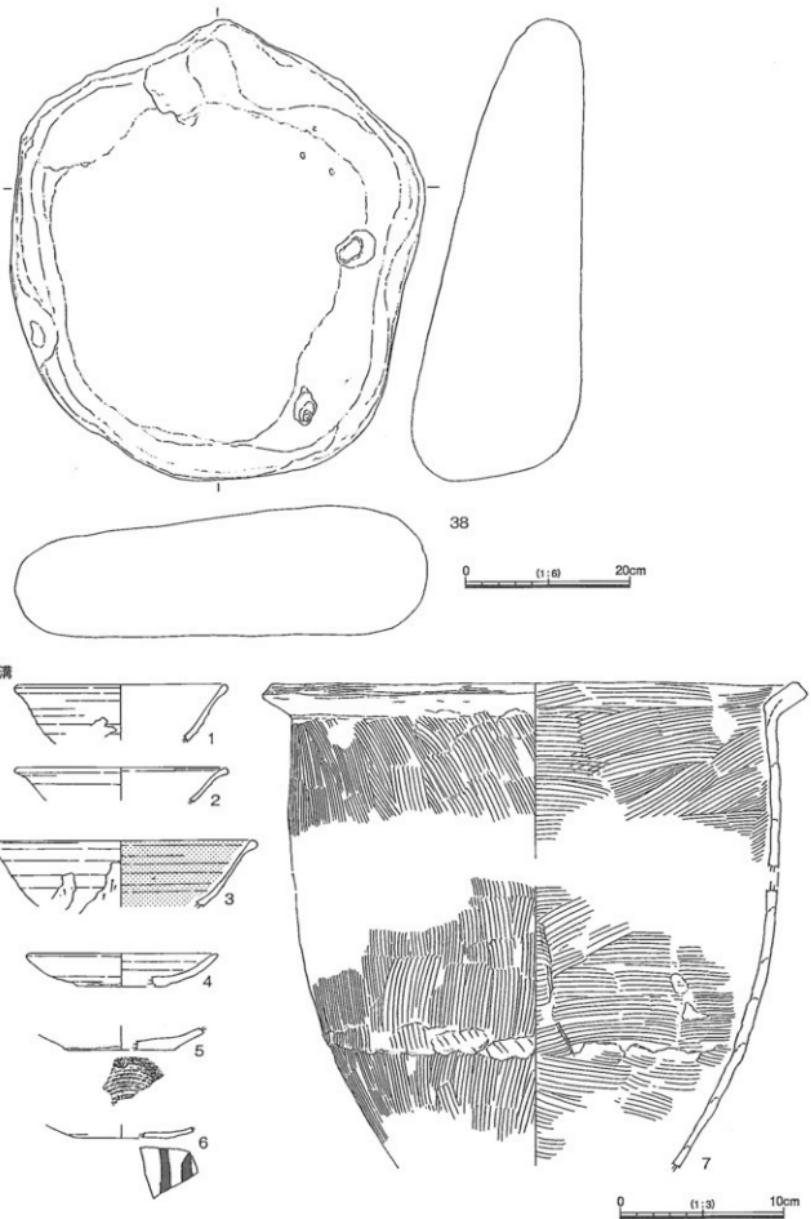
36



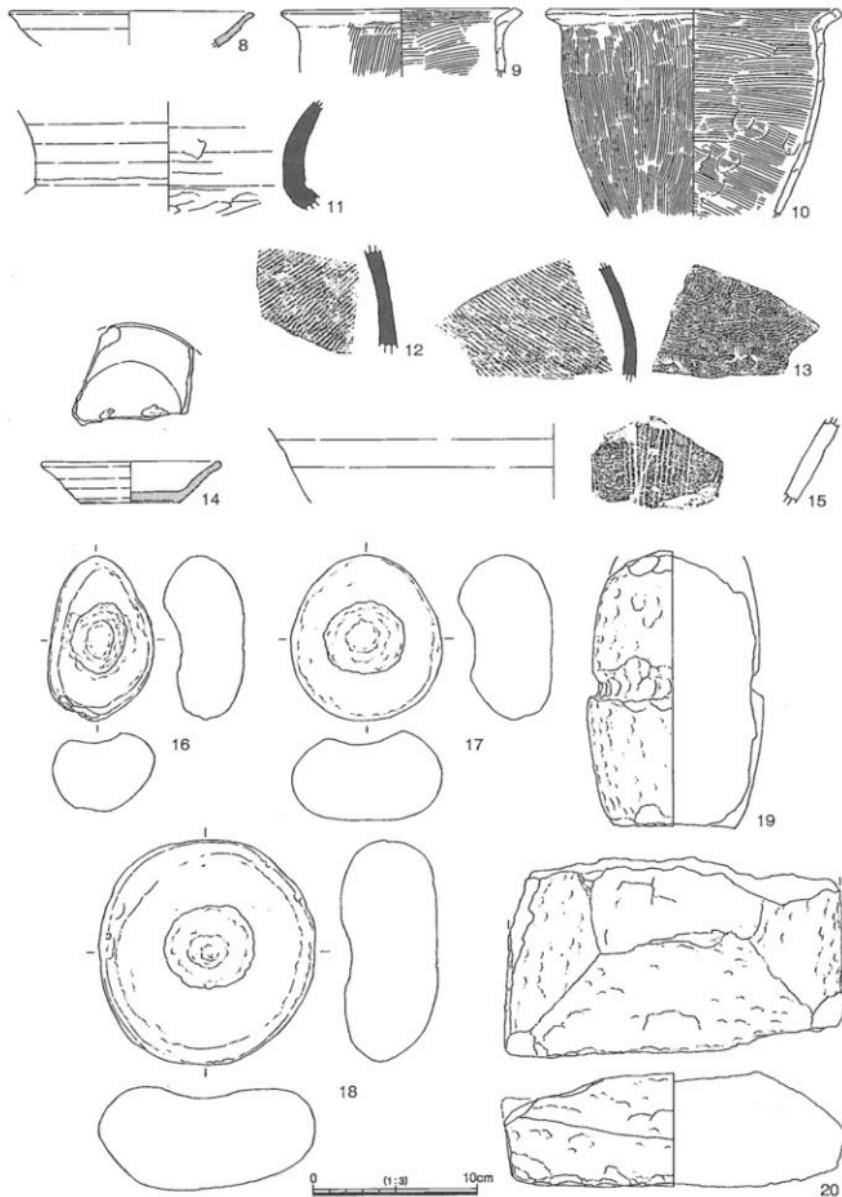
37

0 (1:3) 10cm

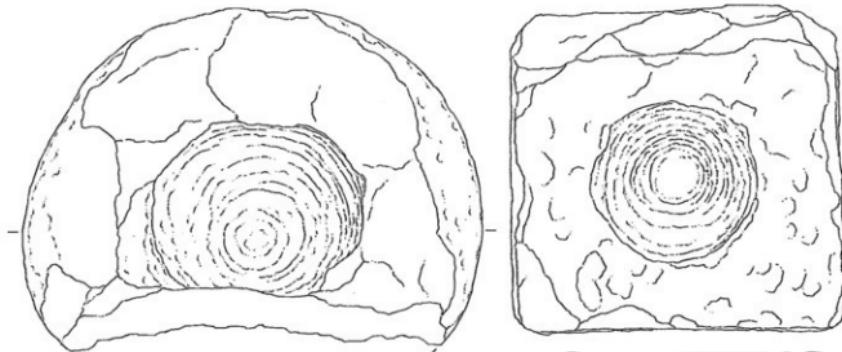
第30圖 2号住居(5)遺物



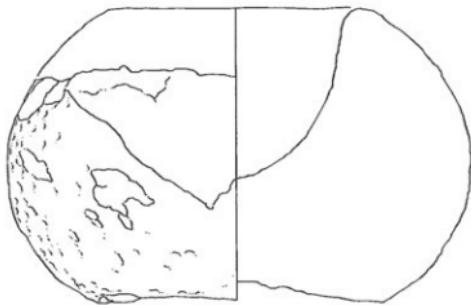
第31図 2号住居(6)・1号溝(1)遺物



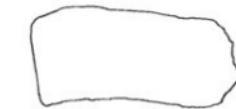
第32図 1号溝(2)遺物



22



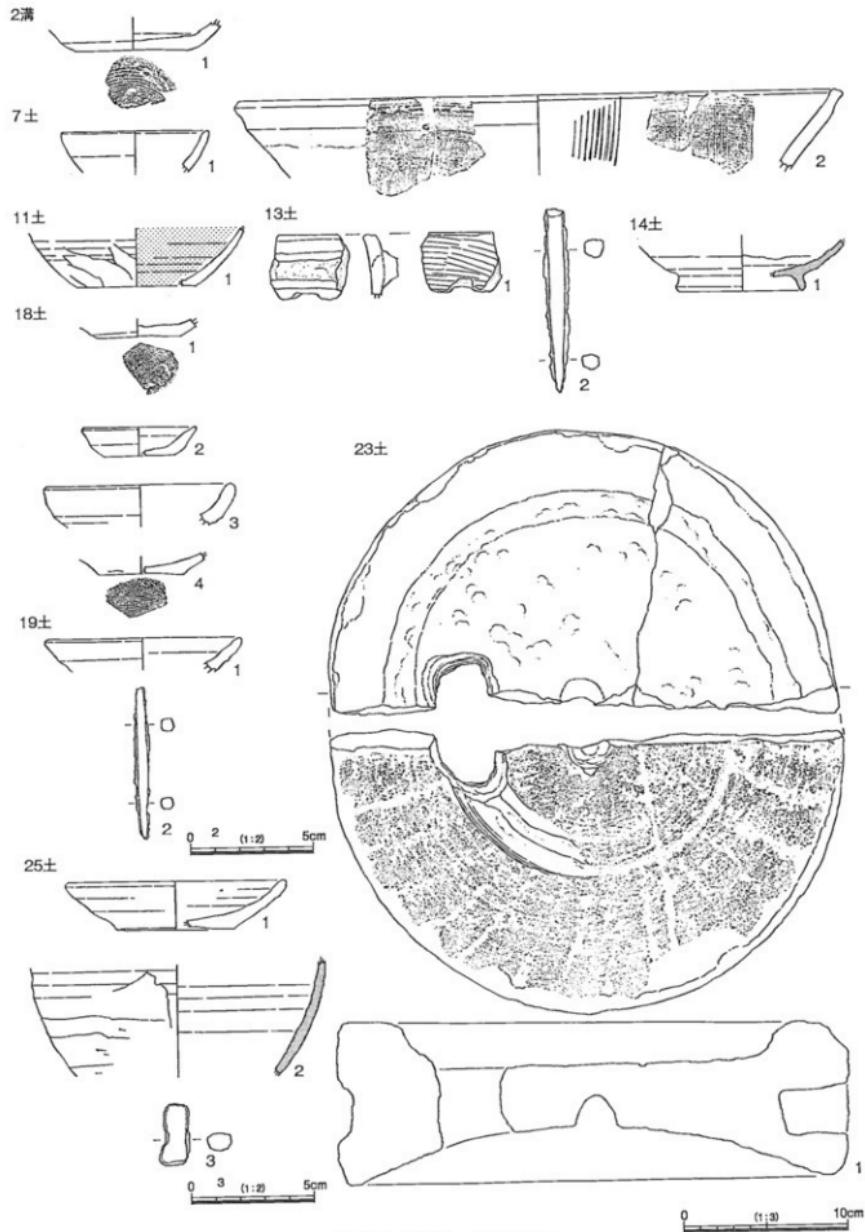
21



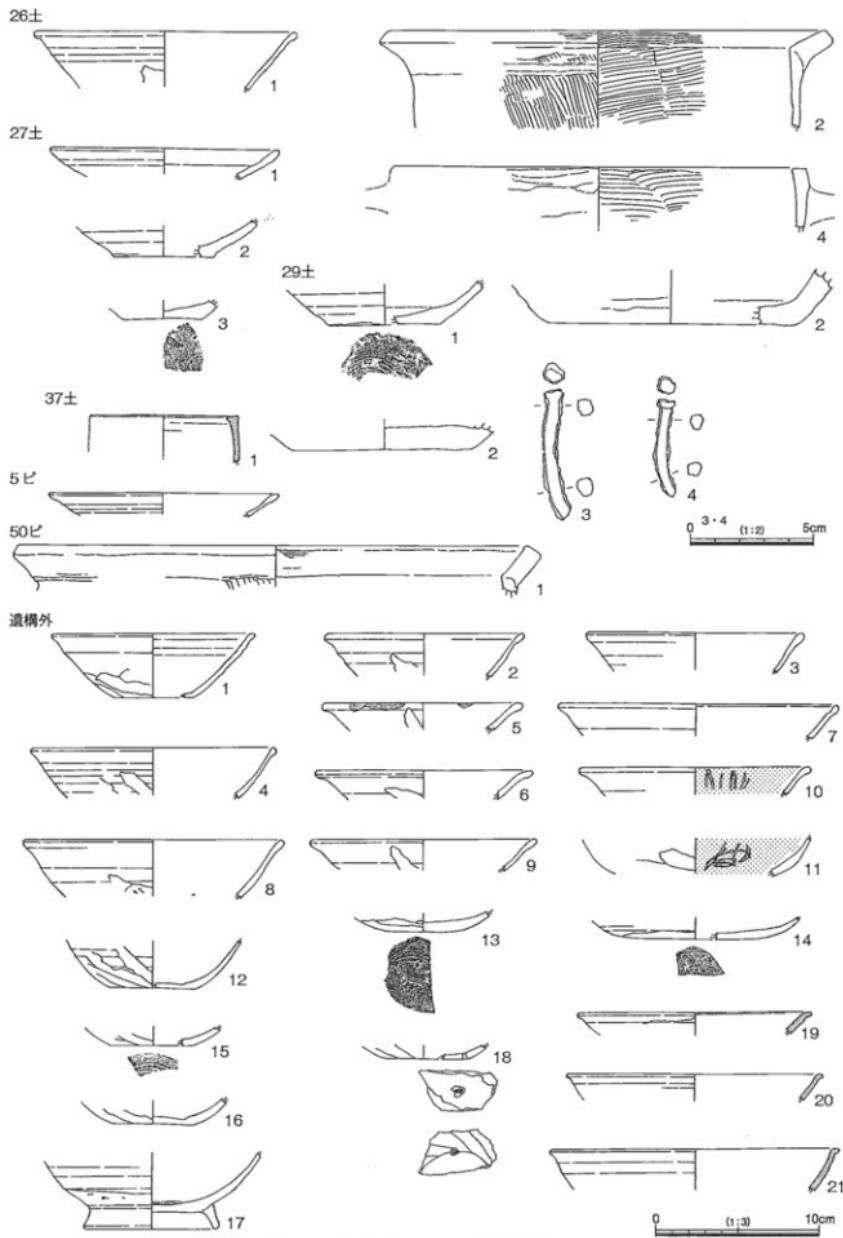
23

0 (1:3) 10cm

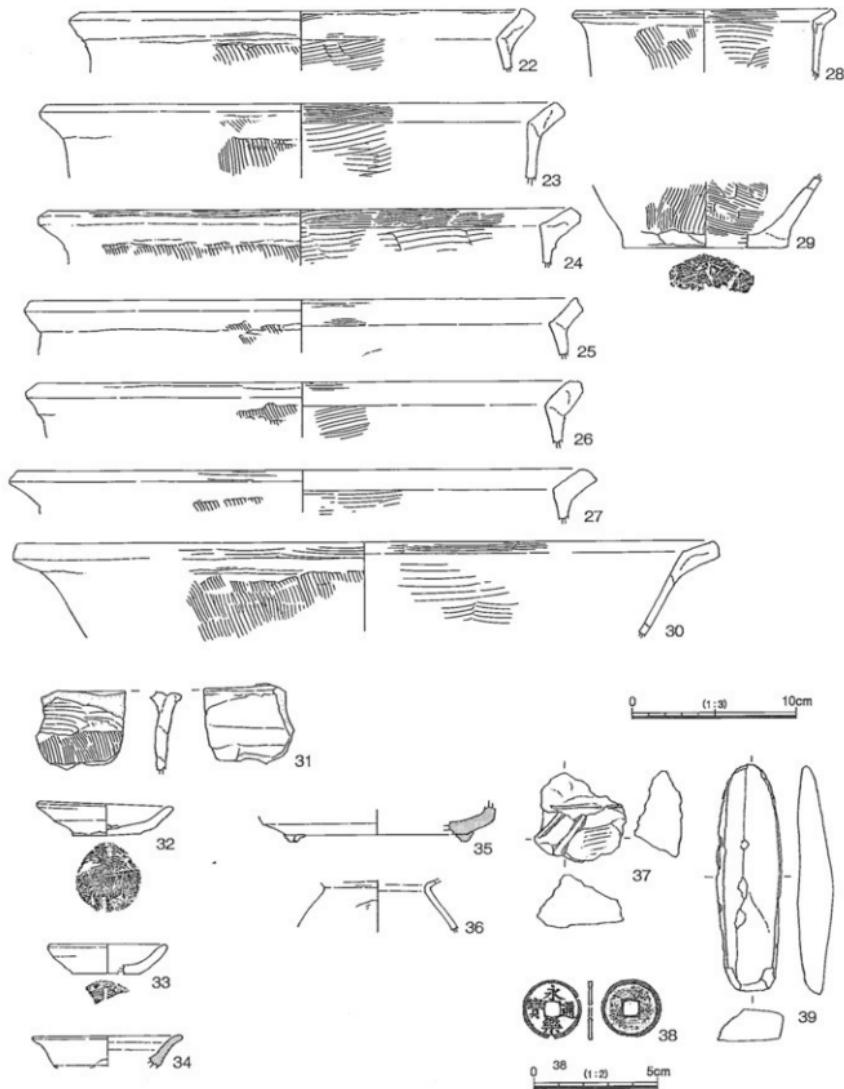
第33図 1号溝(3)遺物



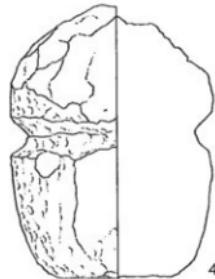
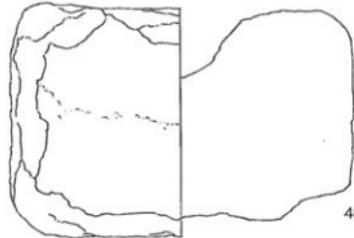
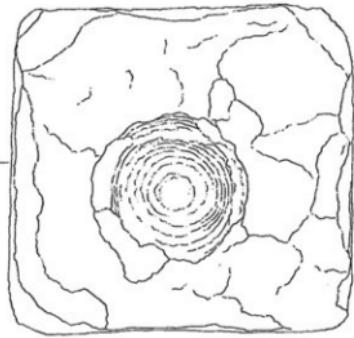
第34図 2号溝・土坑(1)遺物



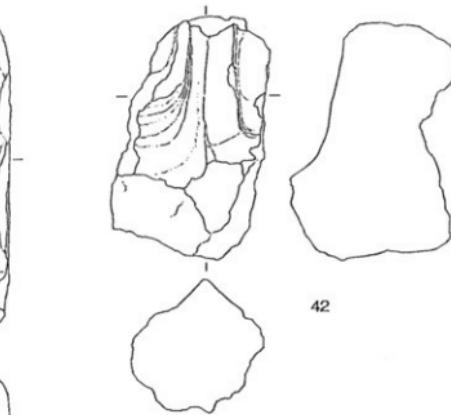
第35図 土坑(2)・ピット・遺構外(1)遺物



第36図 遺構外(2)遺物



0 (1:3) 10cm



42



43



44

第37圖 遺構外(3)遺物



1 航空写真(南東より、奥の白い建物は山梨厚生病院)



2 調査区全景(真上より、1号溝を東辺とする区画に注目)

図版2

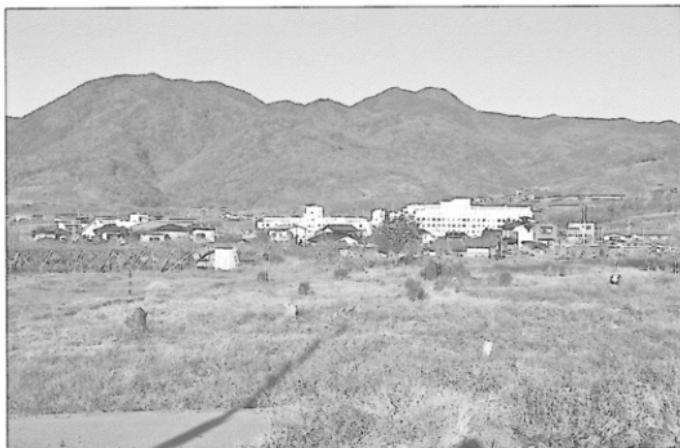


1 航空写真(北西より、右端は聖徳寺)



2 航空写真(南西より、万力公園方面を望む、右上は山梨市市街地)

1 調査前風景  
(南東より山梨厚生病院方  
向、中央左側の山は兎山)



2 作業風景(遺構確認)



3 調査区北東壁の土層堆積状  
況および5号土坑の断面  
(調査区壁面に中世の土坑  
が確認された)



図版 4



1 1号住上層礫・遺物出土状況（南西より、奥側が甌、砂地のため壁が崩落し確認面ではプランが不明瞭であった）



2 1号住礫・遺物出土状況（奥壁南寄りに甌、中央北東寄りに集石があり、住居プランは下層に段状を呈して確認された）



3 1号住内集石(床面より浮上して円錐がまとまる)



4 1号住甌道部分出土甌（甌道の立ち上がり相当部分に甌上半を逆位に伏せている）



1 1号住室



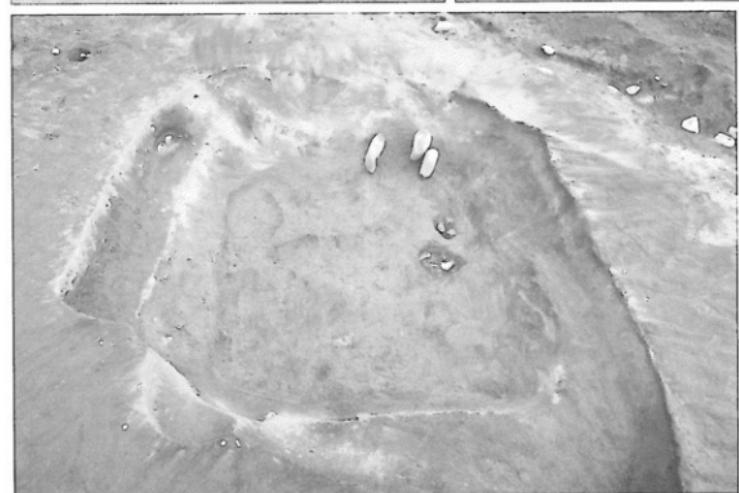
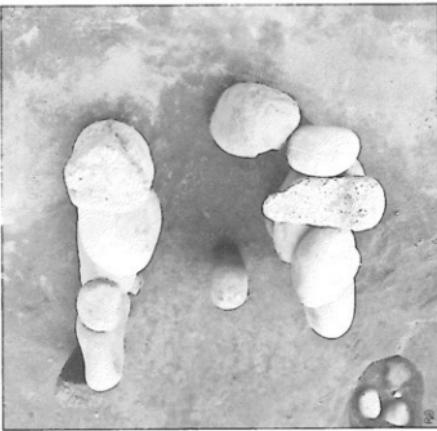
2 1号住床面ピット遺物出土状況



3 1号住完掘状況  
(ひとまわり大きい  
掘り方は壁の崩落  
部分)

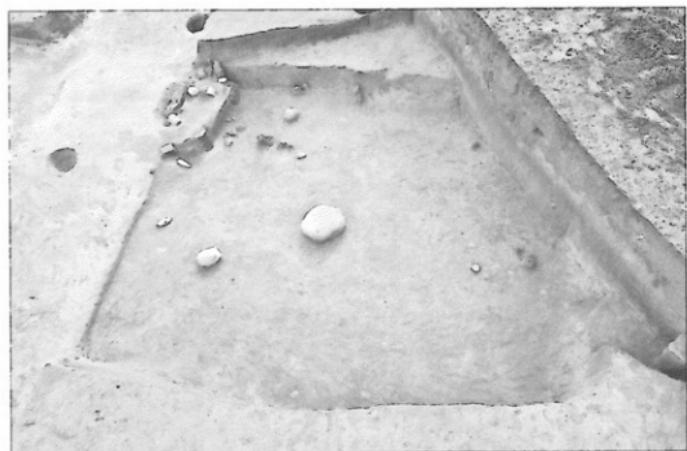


4 1号住断ち割り状況  
(南より、煙道部に  
壺を伏せる)



1 1号住窓右袖石組  
状況  
2 1号住窓  
(真上より)  
3 1号住窓左袖石組  
状況  
4 1号住窓  
(正面より、支脚石  
が直立し左前に加工石材が直立する)

5 1号住床下掘り方  
完掘状況  
(西より)



1 2号住居遺物出土状況  
(竈周辺以外の遺物は少  
ない。床面中央付近に台石  
を据える)

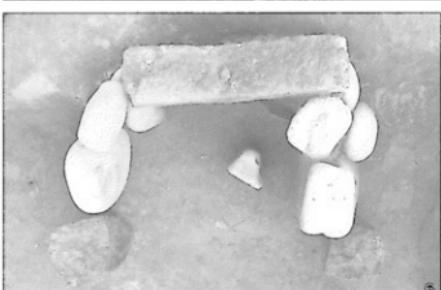


2 2号住居周辺遺物出土状況  
(北より)



3 2号住居完掘状況  
(西より)

図版 8



- 1 2号住竈(西より)
- 2 2号住竈(西より)
- 3 2号住竈(北より)
- 4 2号住竈(南より)
- 5 2号住竈
- 6 2号住竈(真上より)



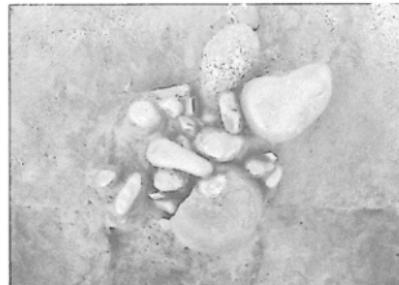
7 2号住床下掘り方完掘状況  
(西より)



1 1号溝内疊出土状況(北より)



2 1号溝完掘状況(北より)



3 1号溝内水輸出土状況



4 1号溝内空風輪出土状況

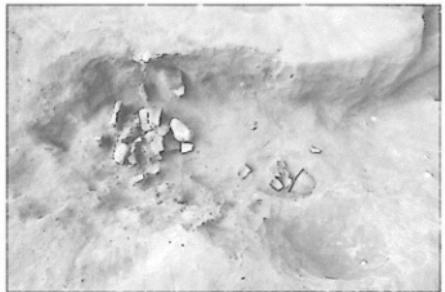
図版 10



1 1号溝完掘状況(南より)



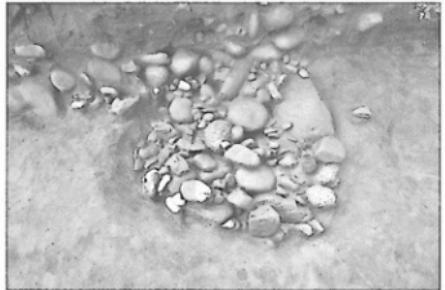
2 1号溝上層縦(部分)



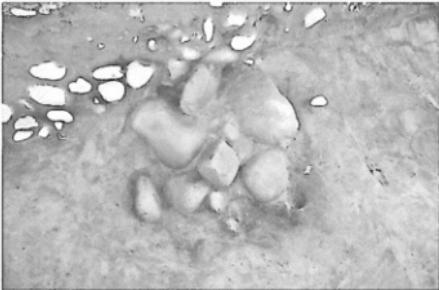
3 1号溝内土師器出土状況



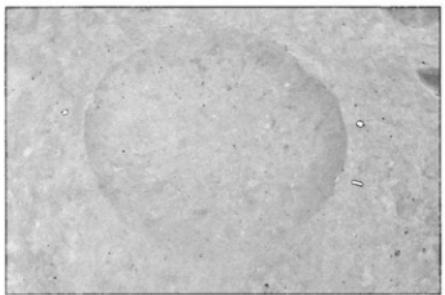
4 1号溝内土師器出土状況(2の右側のまとまり)



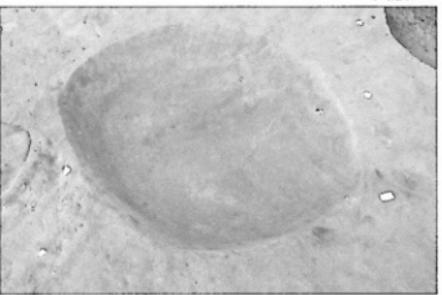
5 1号溝南端の集石



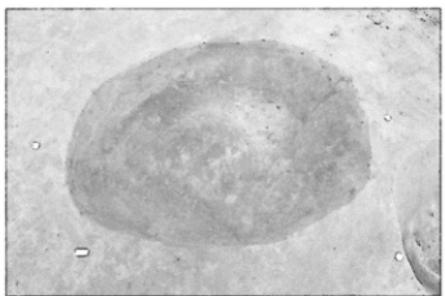
6 1号溝南端の集石下層(地輪出土状況)



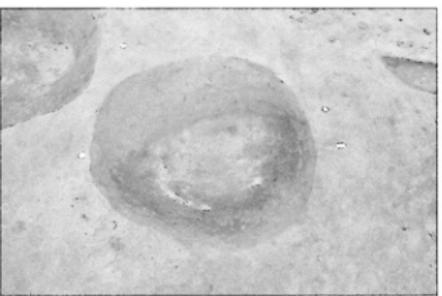
1 1号土坑完掘状况



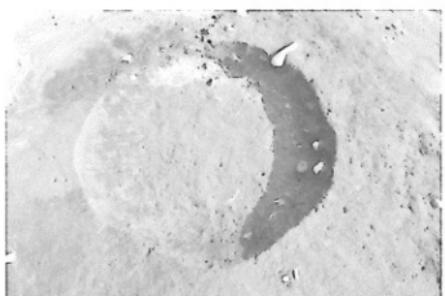
2 2号土坑完掘状况



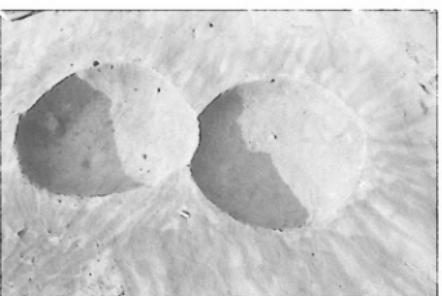
3 3号土坑完掘状况



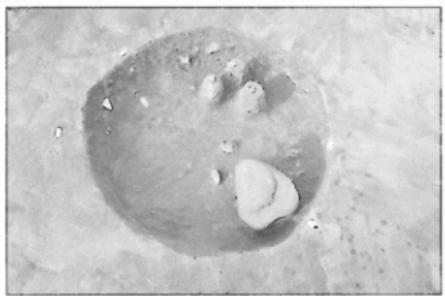
4 4号土坑完掘状况



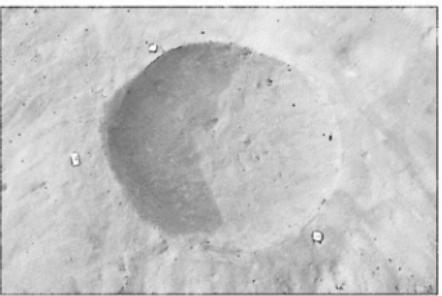
5 6号土坑完掘状况



6 7·8号土坑完掘状况

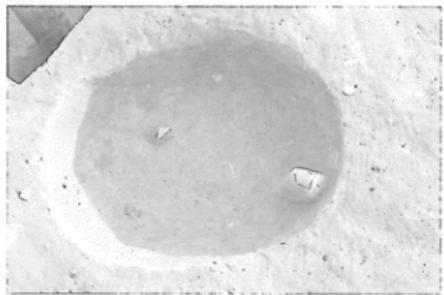


7 9号土坑遗物出土状况

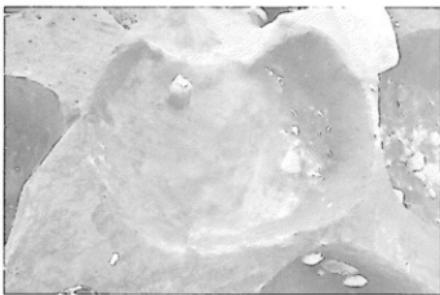


8 10号土坑完掘状况

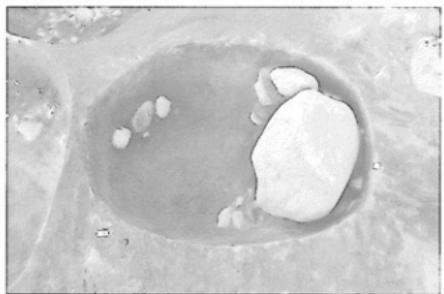
图版 12



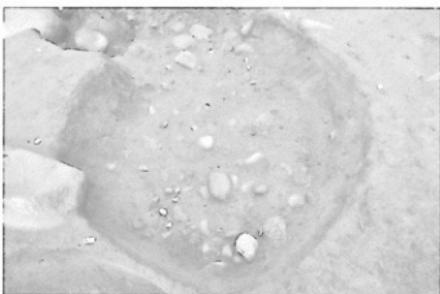
1 11号土坑完掘状况



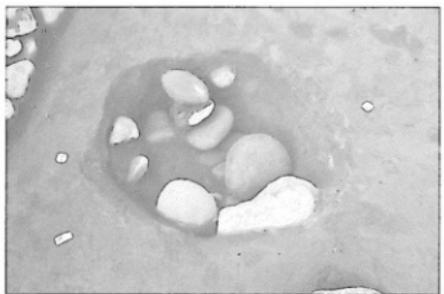
2 14号土坑完掘状况



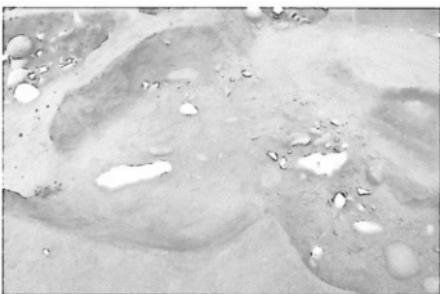
3 15号土坑完掘状况



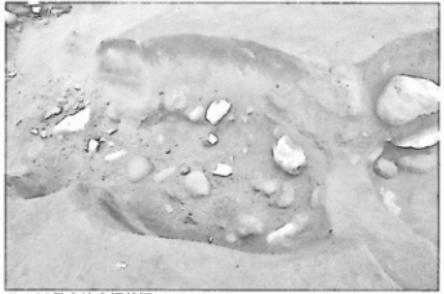
4 16号土坑完掘状况



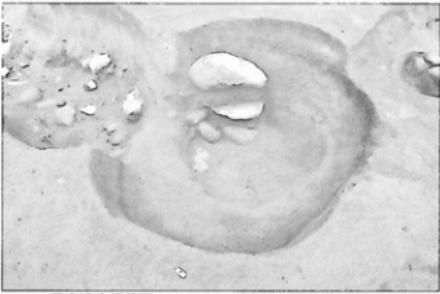
5 17号土坑完掘状况



6 18号土坑完掘状况



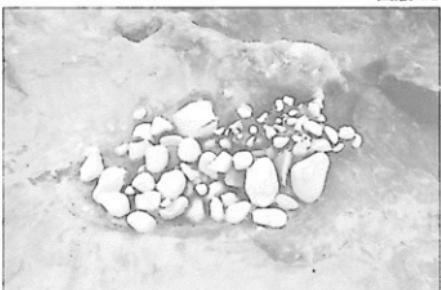
7 20号土坑完掘状况



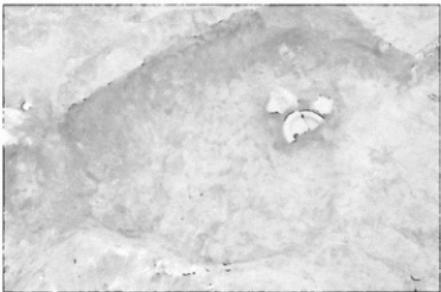
8 21号土坑完掘状况



1 23·37号土坑砾出土状况



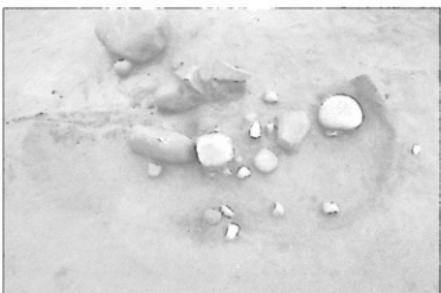
2 37号土坑上层砾出土状况



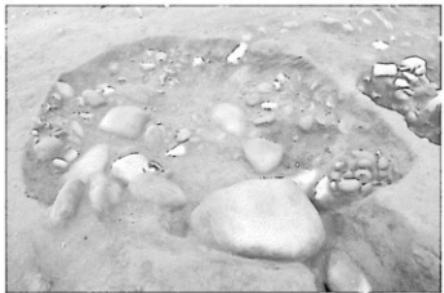
3 23号土坑遗物出土状况



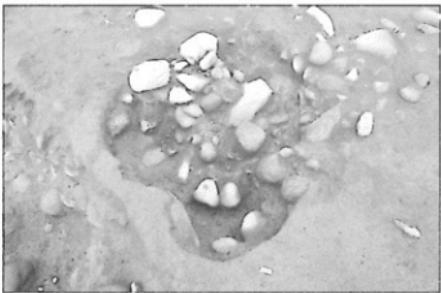
4 22号土坑土层堆积状况



5 25号土坑砾等出土状况

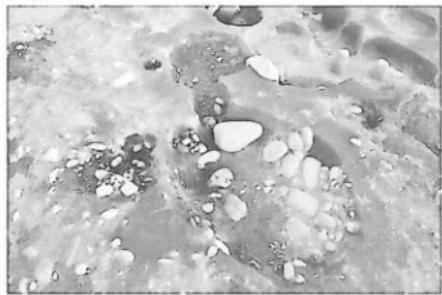


6 27号土坑完掘状况

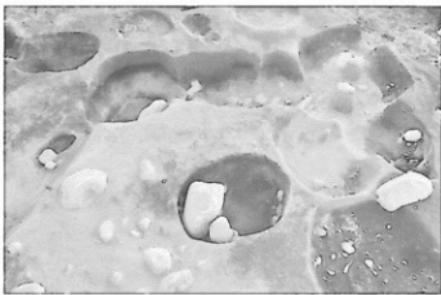


7 29号土坑完掘状况

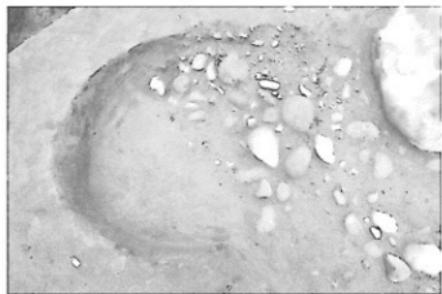
图版 14



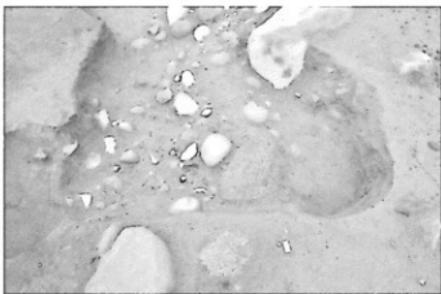
1 27号土坑周辺土坑群



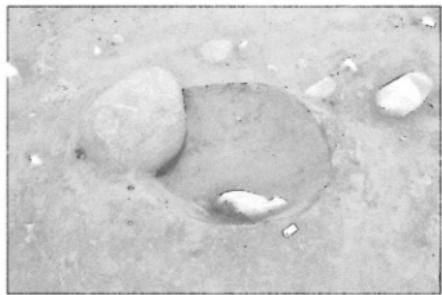
2 15号土坑周辺土坑群



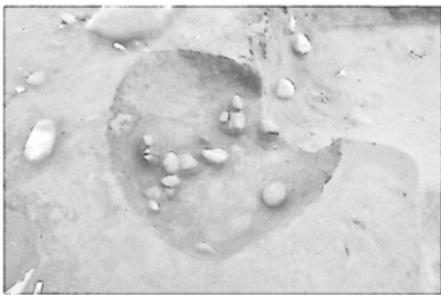
3 31号土坑完掘状况



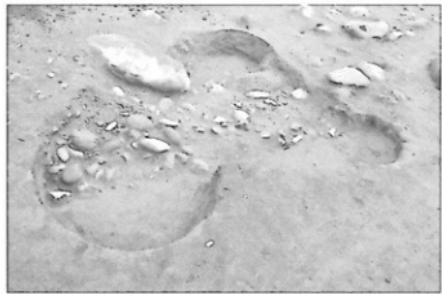
4 32号土坑完掘状况



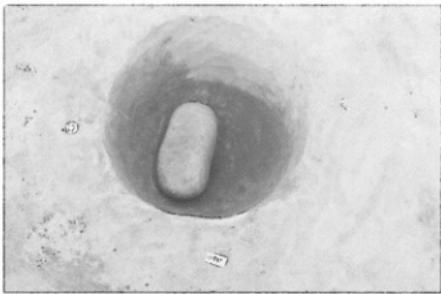
5 34号土坑完掘状况



6 35号土坑完掘状况



7 31~33号土坑完掘状况



8 8号ビット完掘状况

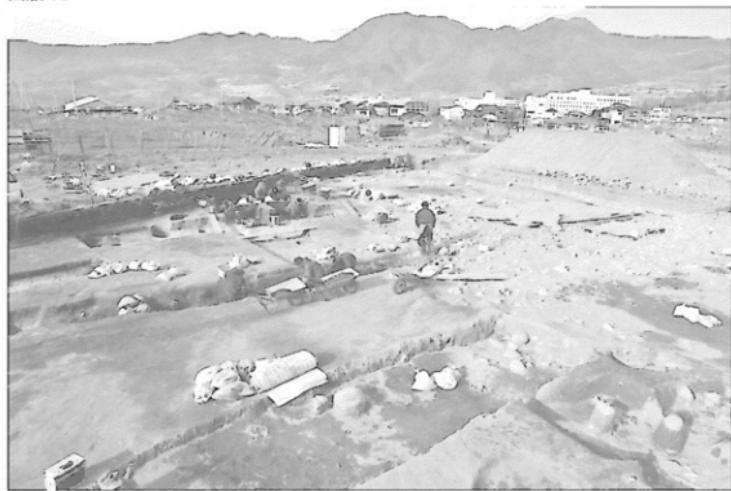


1 空中写真(調査区南東側、真上より)



2 空中写真(2号住周辺、真上より)

図版 16



1 作業風景  
(南東より)



2 作業風景  
(南西より)



3 ラジコンヘリによる空中写真撮影風景



4 ポールによる空中写真撮影風景

遺跡付近にある五輪塔群  
(位置は図 3 を参照)

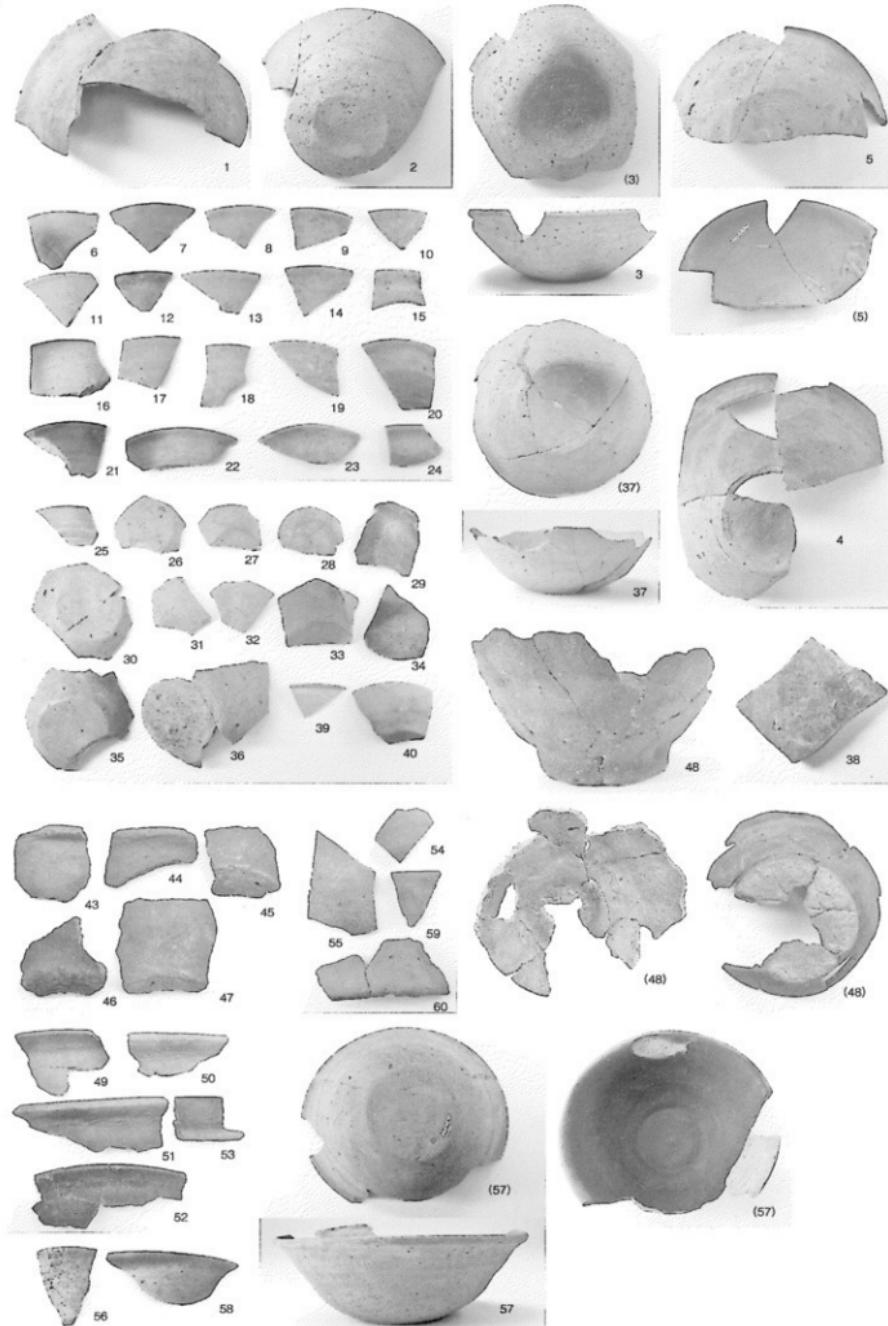


2 聖徳寺境内の(伝)武田信繩塔  
(聖徳寺は調査区南西にあり、正徳寺の地名由来とされている)

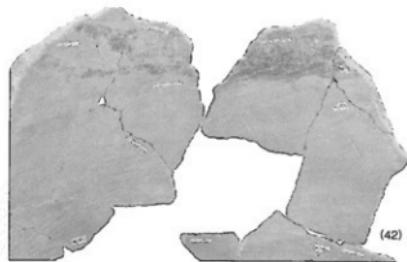
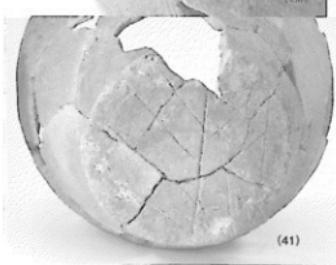
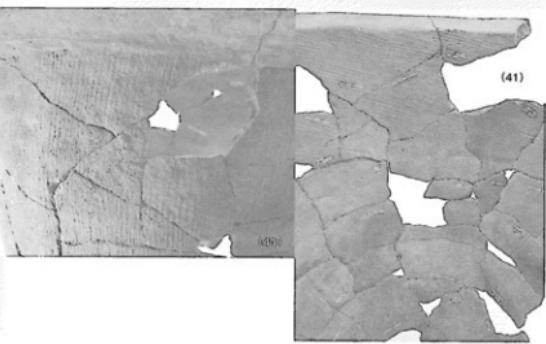
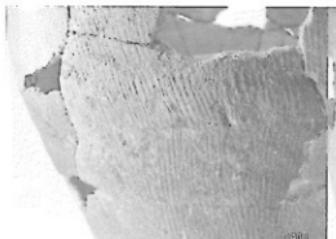


3 (伝)武田信繩塔  
(墓地内より移築、15~16世紀代の五輪塔で地輪は復元、水輪に梵字を刻む)



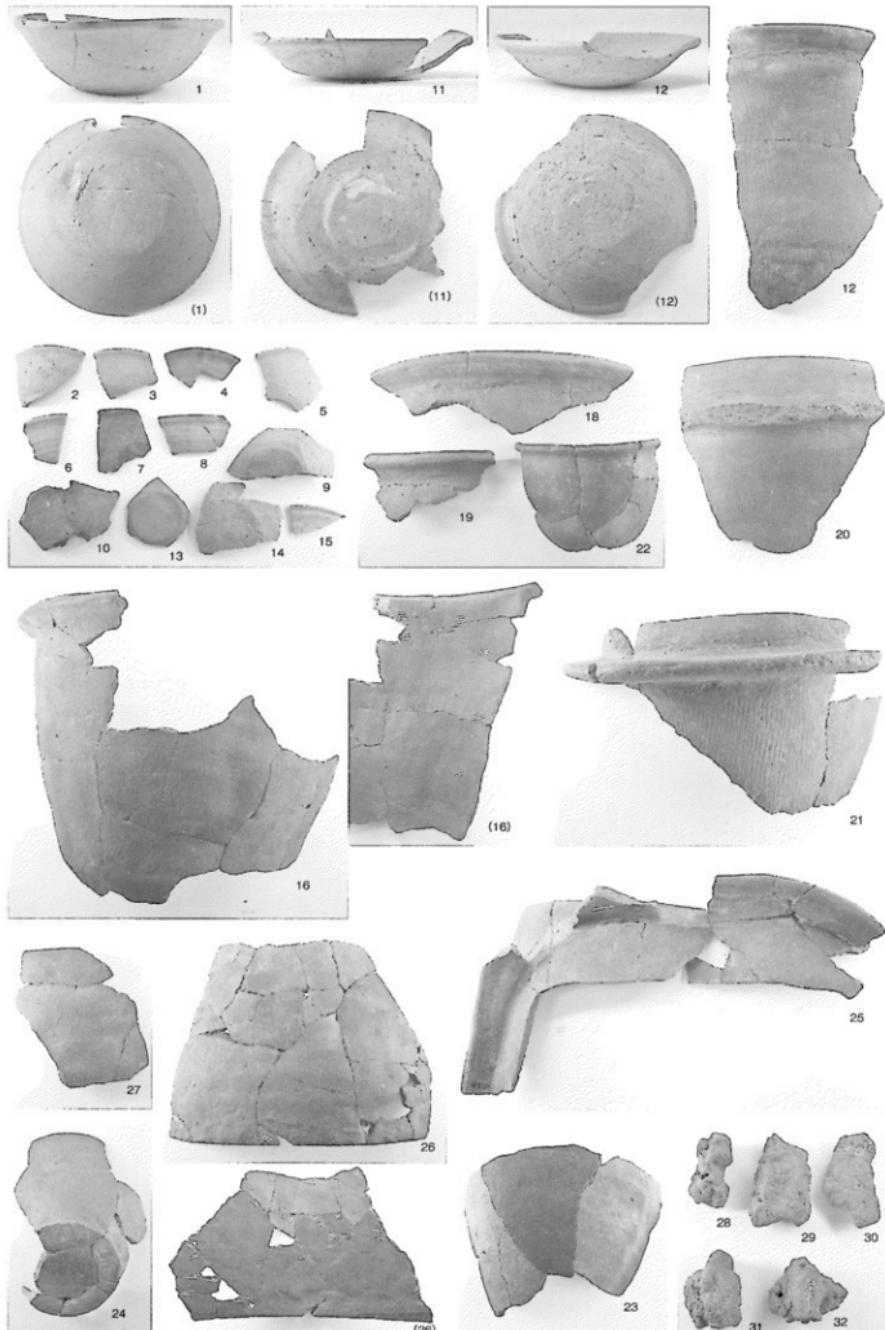


1号住居(1) 遺物

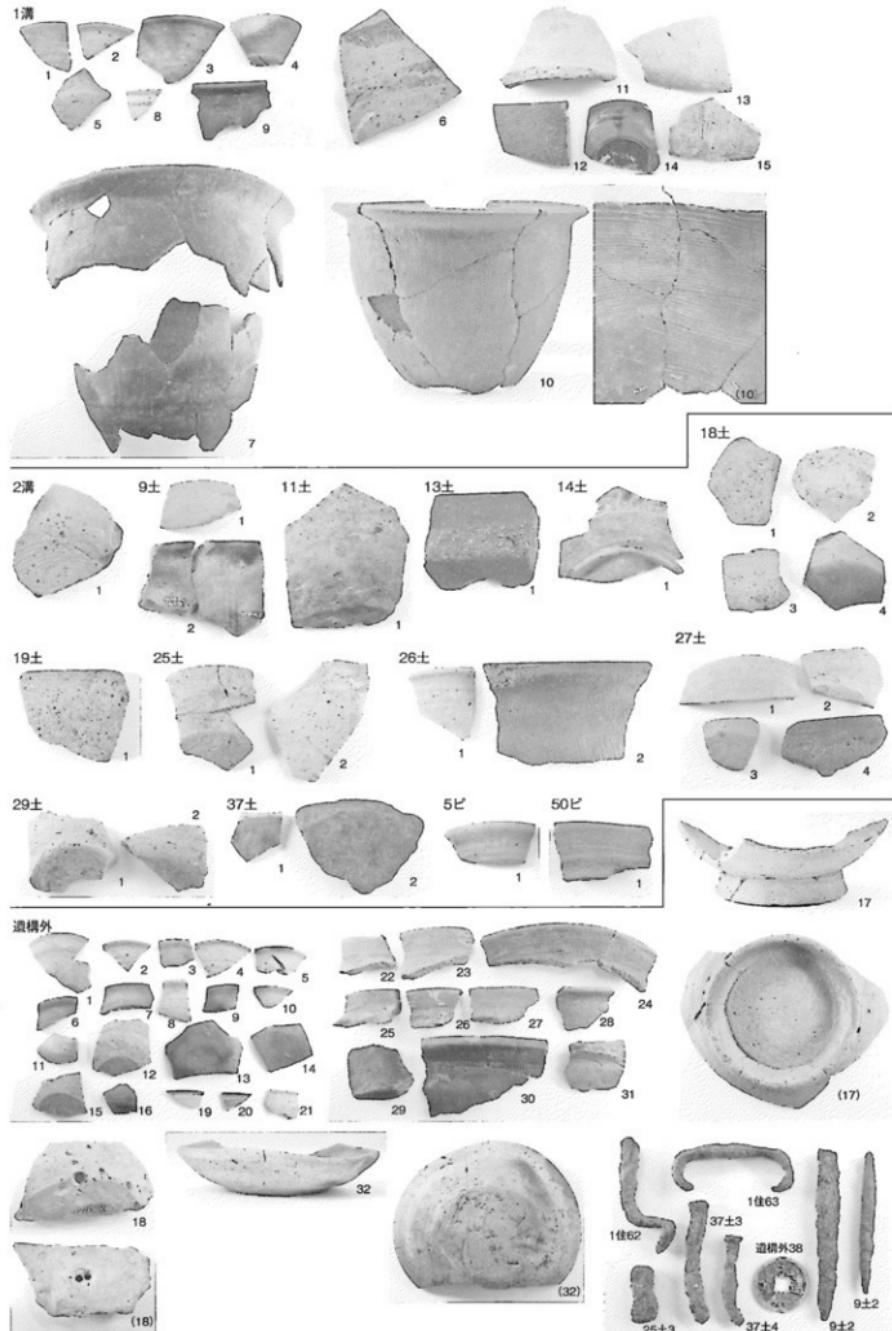


1号住居(2) 遺物

图版 20



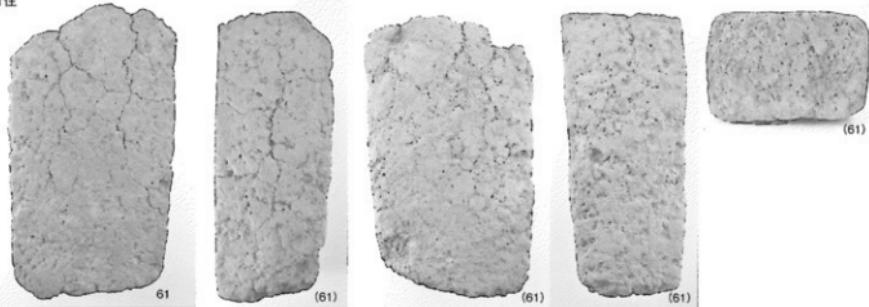
2号住居 遗物



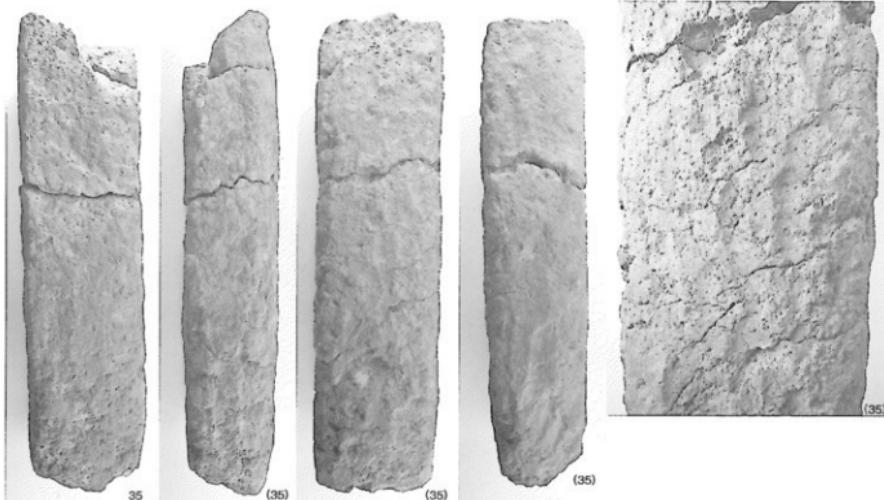
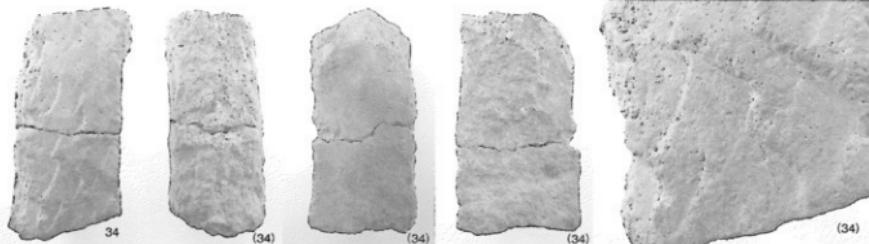
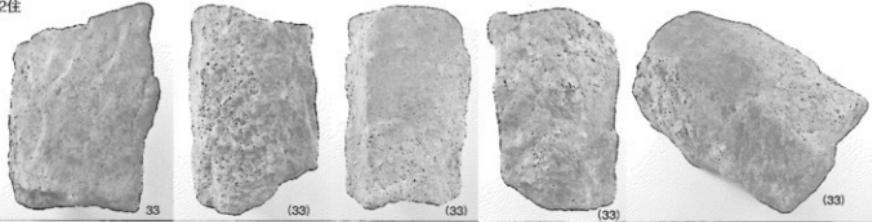
1・2号溝・土坑・ピット・造模外 遺物

図版 22

1住

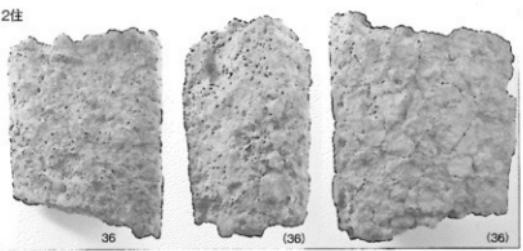


2住

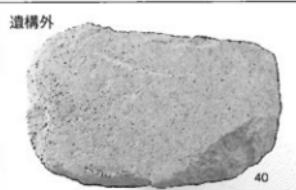
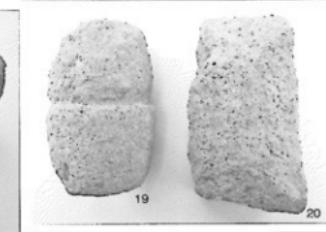


1・2号住居 加工石材

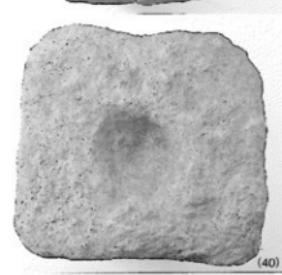
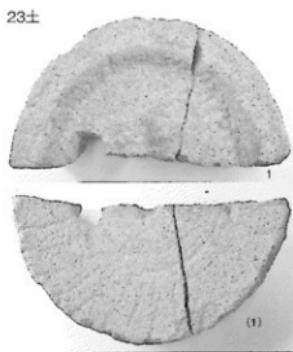
2住



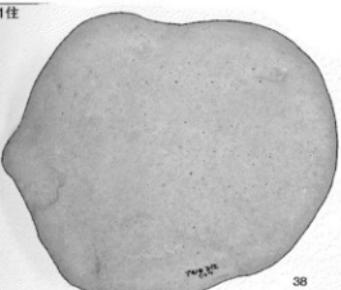
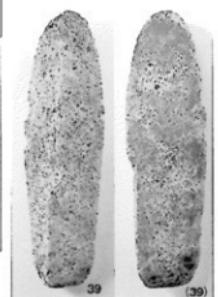
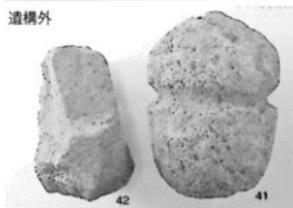
1満



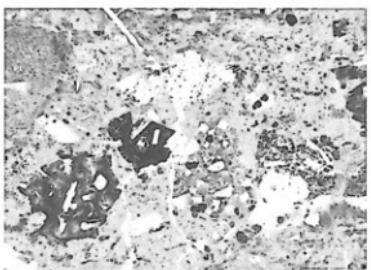
23土



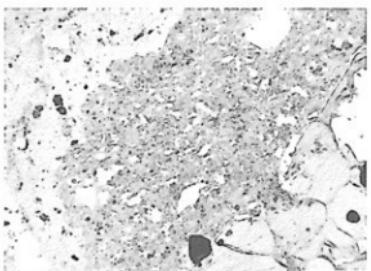
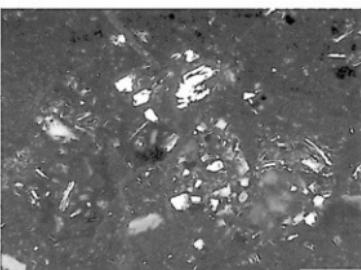
造構外



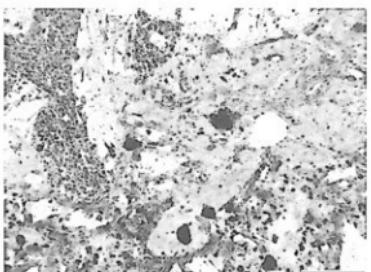
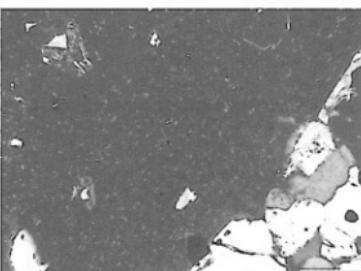
2号住居・1号満・土坑・遺構外 遺物



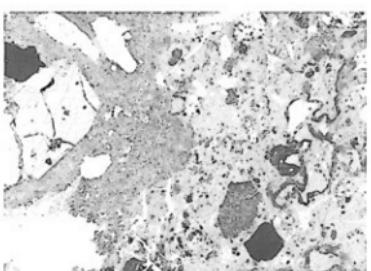
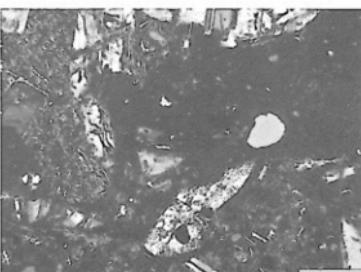
1 柱状自形の斜長石・不透明鉱物・褐色ガラスからなる比較的新鮮な安山岩粒子。安山岩粒子周囲のマトリクス中にも斜長石が含まれる。スケールは 0.2mm。



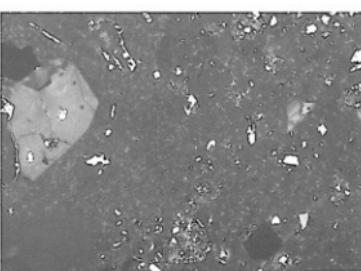
2 気泡が小さい発泡不良の安山岩質軽石で右下には單斜輝石・斜方輝石・鐵鉱などが集斑状組織を示す。左上はマトリクス。スケールは 0.2mm。



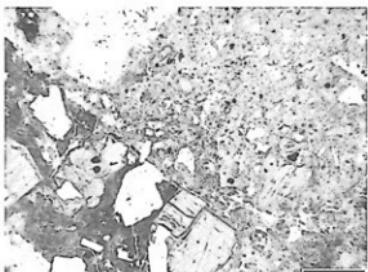
3 下半部の安山岩は気泡に変質鉱物が生じている。左上の安山岩は斜長石斑晶を伴う。スケールは 0.2mm。



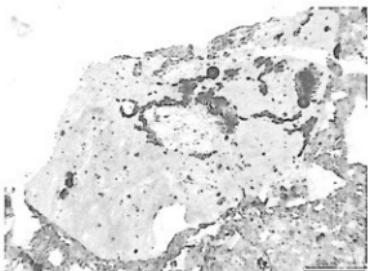
4 左半部の発泡不良の軽石質安山岩は、斜方輝石（左）・不透明鉱物（左上）・斜長石（上）斑晶を伴う。斜方輝石班晶中にはカンラン石の微晶を包有する。スケールは 0.5mm。



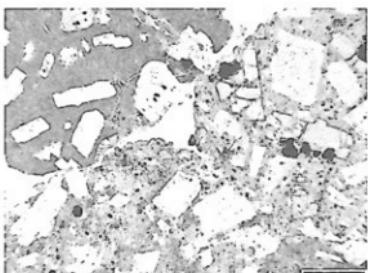
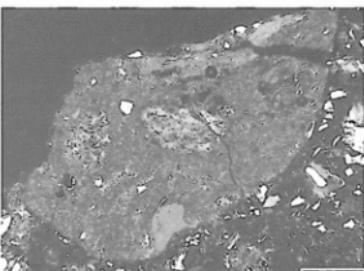
間之田東遺跡電構築加工石材の顕微鏡写真(左は下方ポーラーだけ、右は直交ポーラー)



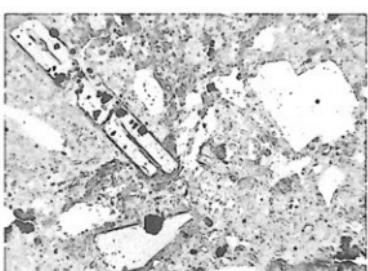
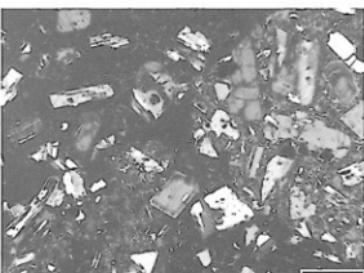
1 左下半は單斜輝石・斜長石斑晶を伴う暗褐色細粒石基の安山岩。右上半は斜方輝石（右下）・斜長石（左上）斑晶を伴う発泡不良の軽石質安山岩。両者の間に斜長石を含むマトリクスが左から右下に細長く分布。スケールは0.2mm。



2 変質した斜長石斑晶（中央・中央上）・融食を示す石英斑晶（中央下）をもつ流紋岩質溶結凝灰岩。中央上の斜長石斑晶には緑簾石が生じている。基質は流状を示す。スケールは0.5mm。



3 三つの安山岩粒子が接しておりマトリクス部分は欠落している。スケールは0.5mm。



4 長柱状自形の斜方輝石斑晶および紫帯構造を示す斜長石斑晶。スケールは0.2mm。



## 報告書抄録

ふりがな	あいのたひがしいせき						
書名	間之田東遺跡						
副書名	市道落合正徳寺線改良に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	山梨市文化財調査報告						
シリーズ番号	第19集						
編著者名	柳原功一・黒沼保子・佐々木由香・バンダリ・スダルシャン・河西学						
編集機関	公益財団法人 山梨文化財研究所						
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566-2 Tel. 055-263-6441						
発行年月日	西暦 2014年3月20日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	◦◦◦	◦◦◦			
あいのたひが しいせき 間之田東遺跡	やまなしけんやまな ししょうとくじ 山梨県山梨市正徳寺	19205	43	35° 41' 01.2732"	138° 40' 12.5063"	平成25年 (2013) 11月21日 ～ 平成26年 (2014) 1月6日	928.84m <sup>2</sup>	市道落合 正徳寺線 改良に伴 う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
間之田東遺跡	集落・墓地	平安時代・ 中近世	堅穴住居2 土坑37 ピット56 溝2	平安時代の土師器壺皿 壺・竈構築材としての 加工石材、中世の土師 質土器皿・五輪塔ほか	平安時代の竈構築材として凝灰 岩を加工した角柱状石材を用い る。

要約	笛吹川旧流路上の中洲状の砂層面に立地する。平安時代（10世紀前半）に2軒の住居からなる集落があり、中世末頃に墓域として利用されている。
----	---

### 山梨市文化財調査報告書 第19集

### 間之田東遺跡

#### — 市道落合正徳寺線改良に伴う発掘調査報告書 —

平成26年(2014)3月20日 発行

編集 公益財団法人山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566-2 Tel. 055-263-6441

発行 山梨市・山梨市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所

印刷 梅帝京サービス

